



中山修一著作集17 : ふたつの性——富本一枝伝

中山, 修一

(Issue Date)

2024-04-24

(Resource Type)

book

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492140>



中山修一著作集 17

ふたつの性——富本一枝伝

はじめに——著作集 17 の公開に際して

私は、著作集 9 『デザイン史学の再構築の現場』の第六部「伝記書法を問う——ウィリアム・モリス、富本一枝、高群逸枝を事例として」のなかの「第二編 伝記書法論（2）——富本一枝の伝記作家はその夫をどう描いたか」の「おわりに」におきまして、次のように書きました。

以上のような本稿における考察を踏まえて、一種、義憤という力に後押しされて、私はこれから著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』を執筆しようとしています。ここに、予告として書き記します。

まさしく私は、そこに書き記しました予告のとおり、義憤という力に後押しされて、いまこれから著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』を執筆しようとしています。義憤の内容は、繰り返しませんので、必要に応じて、「第二編 伝記書法論（2）——富本一枝の伝記作家はその夫をどう描いたか」のなかの本論をご参照いただければ幸いです。

著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』は、おおよそ次のような目次構成を考えています。

まえがき——新しい伝記書法の試み

- 第一章 生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）
一八九三（明治二六）年～一九一二（明治四五）年
- 第二章 青鞥社を舞台に（大阪・東京）
一九一二（明治四五）年～一九一三（大正二）年
- 第三章 青鞥社退社から富本憲吉との結婚まで（東京）
一九一三（大正二）年～一九一五（大正四）年
- 第四章 夫の生地での新生活とその崩壊（奈良県安堵村）
一九一五（大正四）年～一九二六（大正一五）年
- 第五章 新天地での生活再興とその破綻（東京府千歳村）
一九二六（大正一五）年～一九四六（昭和二一）年
- 第六章 夫の出奔と晩年の独り暮らし（東京都祖師谷）
一九四六（昭和二一）年～一九六六（昭和四一）年

あとがき——ある批判に関連して

語りの出典と注記

索引

付録／目次

- 付録一 私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）
- 付録二 私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）

この目次構成からもおわかりのように、この著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』は、いわば著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』の続編です。そこに所収されています第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」の「おわりに」の冒頭において、私は、以下のように書きました。

平塚らいてう、神近市子、丸岡秀子、石垣綾子、中村汀女のような、身近に交流した多くの友人たちが自伝や自伝的小説を書き残しているにもかかわらず、そのなかであって最後まで一枝は、自分の生涯を一著にまとめることはなかった。なぜなのであろうか。一般的に言って、自伝には、自己の歩いてきた人生を、正当化したり、合理化したり、安定化させたりする傾向が、避けがたいこととして伴う。もし人間の言動を、秩序と無秩序、正常と異常、常識と非常識といったような二元論によって分割することが可能であるとする前提に立つならば、おおかたの自伝というものは、秩序、正常、常識という片方の極に立脚して記述されることになる。しかしながら、必ずしもすべての人間が、秩序、正常、常識の世界に生きているわけではなく、それとは別の世界にあって、あるいはふたつの世界を往復しながら、生と性を持続している人たちがいることも、また事実であろう。そうした人たちが、自らの人生を振り返ろうとした場合、どのようなことに出くわすであろうか。想像するに、かかる人は、過ぎ去りし道に置き忘れた品々のふたを開け、なかをのぞき込むにつけ、それがいかに不連続なものであり、矛盾に満ちたものであり、説明がつかないものであるのかに気づき、それを正当化したり、合理化したり、安定化させたりすることの困難さにすぐにでも直面するにちがいない。そしてそのことに基因して、伝記を書くという作業が、いつのまにかに雲散霧消するのではないだろうか。おそらく一枝も、それに近い生き方をしたひとりだったのではないかと思われる。

このように書いた私は、本人に成り代わってどうしても一枝の伝記を書きたいという思いに駆られました。しかしながら、本人が書かなかった、いや、自分の手では書けなかった生涯が、いかに複雑で、矛盾に満ちたものであるのかは、私なりに十分に想像がついていました。それではそれをどう書くのか、自分に問いかける自分がいました。単なる思いつきや、思い込みによる記述では、一枝の真の姿に近づけないだけでなく、場合によっては、一枝の人格や尊厳さえも傷つける可能性さえあります。そう思う私には、どうしても伝記書法上の新しい方法論が必要だったのです。

その意味において、ここに公開します著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』は、「まえがき——新しい伝記書法の試み」において詳しく述べていますように、伝記記述に関しての新しい実験の場としてまずもって構想されてゆきました。その結果、一般的に伝記というのは、伝記作家が、対象となる人物の生涯を自分の言葉でもって叙述することによって成立するものですが、ここでは伝記作家は後景に退き、「本人と仲間たちの語り」でもって富本一枝という対象の人間模様を綴ってみることはできないかという考えにたどり着きました。この点が、従来の伝記には存在しない、本稿のもつ記述上の新しい実験といえるかもしれません。具体的にいえば、私は、富本一枝の生涯について叙述する本文のすべてを、本人と夫たる富本憲吉の言説はいうに及ばず、一枝の周辺に存する平塚らいてうや丸岡秀子のよう

な、多くの友人たちによって書き残されている発話内容や、さらには新聞や雑誌等に散見されるところの関連記事、そうした一枝に群がる一連の揺るぎない証言によって構成したいと考えるようになったのでした。

その理由は単純です。できるだけ、いや完全に、虚偽記述をなくしたいという私個人の願望によるものでした。つまり、別の言葉に置き換えるならば、そこには、一枝にかかわる既存の評伝や伝記的小説にみられるような、語り手自身の恣意的な多弁性を、可能な限り排除するとともに、記述にかかわるいっさいの曇りのない客観性をしっかりと担保することによって、主人公の全き実像に迫ってみたいという、強い個人的な願いが横たわっていたのです。こうした一種の義憤のような思いのもと、伝記執筆上の新しい手法が醸成されてゆきました。それは、私の担う役割を、著者としてではなく編者としてのそれに限定することでした。つまるところそれは、私が関与するのは、一枝の生涯の分節化に伴い考案されなければならない章題、節題、そして各項目題についての名称設定に限られることを意味します。こうして、関係する幾多の証言を渉獵し、章や節にグループ分けをするなかから、富本一枝というひとりの女性の一生涯にかかわるストーリーとプロットが生み出されていったのでした。

しかしながら、あくまでも「本人と仲間たちの語り」だけで構成される本文ですから、語りの内容にかかわってその背景や行間をも含めて、必ずしも十全に読み手に伝わるとは限りません。その場合、あちこちで未消化の雑駁さだけが残されてしまう危険性が予想されます。そこで、巻末に「語りの出典と注記」を設けました。ここにおいて、今後の再検証に必要とされる、それぞれの資料の出典を明記するとともに、読者のみなさまの思考や判断の手助けになるにちがいないと思われる範囲に限って補足的に注釈を加えることにしました。

果たして、ここであえて実験する新しい伝記書法の試みが、結果として、どれほどまでに学術的価値を生み出すことにつながるのでしょうか。あるいは、どれほどまでに、一枝の真実の姿を再現することへの有効な手掛かりとなりえるのでしょうか。お読みいただきましたみなさまから、忌憚のないご批評をお聞かせいただければ幸いに存じます。

とりあえず、途中ではありますが、今回は、第一章「生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）」と第二章「青鞥社を舞台に（大阪・東京）」を公開いたします。

二〇二四年四月二四日

陽春のいま、南阿蘇の森のなかの寓居にて
中山修一

編者について

中山修一（なかやま・しゅういち）

1948年12月、熊本市に生まれる。熊本県立熊本高等学校時代は、新聞部にて部活を楽しむ。東京教育大学農学部林学科に入学、木材工学を専攻する。学生運動の影響でほとんど授業は行なわれず、ヨット部に所属し館山と葉山で年間一〇〇日以上合宿生活を送る。卒業に引き続き、東京教育大学大学院教育学研究科修士課程において美術学（工芸・工業デザイン）を専修する。その後、東京教育大学は移転し筑波大学となる。

1974年4月に神戸大学教育学部の助手に採用される。それ以降、講師、助教授、教授へ昇格。主としてプロダクト・デザインの実技とデザイン史の講義を担当する。組織としての教育学部は、職を得てしばらくしたのち発達科学部に改組され、さらに現在は、国際文化学部との統合により、国際人間科学部へと改称。

在職中、学内にあっては、神戸大学附属図書館副館長を務め、学外にあっては、大阪教育大学教育学部、長崎大学教育学部、国立高岡短期大学（現在の富山大学芸術文化学部）、および静岡文化芸術大学デザイン学部等で、非常勤講師として「デザイン史」の集中講義に長年従事する。また、海外においては、1995年に、ロンドンのウィリアム・モリス協会が本部を置く〈ケルムスコット・ハウス〉にて招待講演を行ない、さらに2010年には、上海の華東理工大学美術・デザイン・メディア学部に招かれて二日間の連続講演を行なう。

他方、1987-88年にブリティッシュ・カウンシル（British Council）のフェローとして、続いて1995-96年に文部省（現在の文部科学省）の長期在外研究員として渡英し、主として王立美術大学（Royal College of Art）とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（Victoria and Albert Museum）を利用して英国デザインの歴史研究に当たる。

1987年から2013年まで英国のデザイン史学会（Design History Society）の会員。2003-14年、ブライトン大学客員教授（Visiting Professor at the University of Brighton）。また、2008年に学術雑誌 *The Journal of Modern Craft*（Berg Publishers, Oxford）が創刊されたおりには、国際諮問委員会（International Advisory Board）の委員を務める。

2013年3月に定年により神戸大学を退職し、それ以降、阿蘇山中の庵に蟄居し、執筆活動に専念する。専門はデザイン史学。

現在、神戸大学名誉教授、博士（学術）。英国にあっては、王立芸術協会（Royal Society of Arts）の終身会員（Life Fellow）、およびウィリアム・モリス協会（William Morris Society）の終身会員（Life Member）。

訳書（共訳を含む）に、ノエル・キャリントン『英国のインダストリアル・デザイン』（晶文社、1983年）、ハワード・ヒバード『ミケランジェロ』（法政大学出版局、1986年）、ステュアート・マクドナルド『美術教育の歴史と哲学』（玉川大学出版部、1990年、鹿島美術財団出版援助図書）、アヴリル・ブレイク編『デザイン論——ミッシェル・ブラックの世界』（法政大学出版局、1992年）、ジャン・マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』（晶文社、1993年）、およびポール・グリーンハルジュ編『デザインのモダニズム』（鹿島出版会、1997年）。

中山修一著作集 17

ふたつの性——富本一枝伝

本人と仲間たちの語りで綴る
富本一枝の生涯

2025 年 4 月

中山修一著作集 17

ふたつの性——富本一枝伝

本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯

目 次	二
まえがき——新しい伝記書法の試み	四
第一章 生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）	
一八九三（明治二六）年～一九一二（明治四五）年	八
第一節 富山での出生と幼児期	
第二節 離郷後の東京での学童期	
第三節 転居後の大阪での学童期	
第四節 夕陽丘高等女学校時代	
第五節 女子美術学校入退学	
第六節 『青鞥』の創刊を知る	
第七節 一時帰阪と新境地の幕開け	
第二章 青鞥社を舞台に（大阪・東京）	
一九一二（明治四五）年～一九一三（大正二）年	二一
第一節 ロダンの作品鑑賞とらいてう宅訪問	
第二節 大阪での『青鞥』の手伝いと《陶器》の受賞	
第三節 大阪から東京への転居	
第四節 青鞥社同人のある夜のミーティング	
第五節 「メイゾン鴻の巣」で「五色の酒」を飲む	
第六節 吉原「大文字楼」にて花魁と遊ぶ	
第七節 青鞥社内外からの非難の嵐	
第八節 ある日のらいてうと紅吉の愛の再燃	
第九節 ふたりの「同性の恋」の末路	
第一〇節 社内での人的交流	
第一一節 社外での紅吉の姿	
第一二節 青鞥社退社の意向を表明する	
第一三節 特異な自己のセクシュアリティをほのめかす	
第一四節 『青鞥』の表紙絵「アダムとイヴ」の製作	
第一五節 第一三回異画会絵画展覧会への出品作《枇杷の實》	
第一六節 妹の福美への佐藤春夫の恋心	
第一七節 青鞥社からの最終的な退場	

あとがき——ある批判に関連して	四四
-----------------	----

語りの出典と注記	四五
----------	----

付録

目次	一
----	---

付録一 私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）	二
------------------------------	---

付録二 私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）	三一
------------------------------	----

凡 例

- 一．本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
- 一．本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
- 一．本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
- 一．引用文および引用語句内の〔 〕は本著作集の著者による補足である。

まえがき——新しい伝記書法の試み

平塚らいてう、神近市子、丸岡秀子、石垣綾子、中村汀女のような、身近に交流した多くの友人たちが自叙伝や自伝的小説を書き残している一方で、富本一枝は、最後まで自分の生涯を一著にまとめることはありませんでした。なぜ書くことをためらったのでしょうか。

松島栄一編『女性の歴史』（講座女性5、三一書房、一九五八年）に、「青鞥前後の私」を寄稿した一枝は、その文を、「私自身、まるで草履と下駄を片方づつはいて道を歩いているような人間だと言えましょう」という結語で締めくくっています。「草履と下駄」という比喩的二足は、旧い女と新しい女の二面が共存する生き方だけでなく、体の性と心の性が乖離するふたつのセクシュアリティを暗に意味しているものと思われます。もし、そうでないにしても、「草履と下駄」という表現から、四方に入り乱れて渦を巻く苦悶の実相が容易に連想できます。一枝が歩んだ人生は、決して首尾一貫した一筋の道ではなく、その生涯のあらましを書くには、あまりにも拡散しすぎ、明確な焦点を結ぶことのない、コラージュ風の画像と化していたのではないかと推量されます。おそらくこれが、交流があった周囲の女性たちと違って、晩年の一枝が自伝を書かなかった、あるいは書けなかった理由だったのではないのでしょうか。

しかし、一枝がどう生きたのかということに対する周囲の関心は、本人の死後、絶えることなく続き、これまでに、吉永春子『紅子の夢』（講談社、一九九一年）と辻井喬『終りなき祝祭』（新潮社、一九九六年）のふたつ小説が書かれてきました。『紅子の夢』の著者の吉永春子は、学生時代に一枝に出会った一瞬が忘れられず、その強い衝撃が動機となって、筆を執ることになったと述べています。一方、『終りなき祝祭』の著者の辻井喬は、富本憲吉・一枝夫妻の息子の壮吉と学友関係にあり、両親へ向ける壮吉の生前の思いが、この小説を執筆するように自らを駆り立てたと語っています。

この間、一枝を主題とした評伝も上梓されました。それは、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』（ドメス出版、一九八五年）と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（不二出版、二〇〇一年）の二著です。あえていえば、このふたつの評伝には、幾分共通した難点が見受けられます。それは、一次資料に基づく実証的記述からしばしば離れ、書き手の私的な思いと判断が一方的に数多く盛り込まれているがために、主役となるべき一枝が随所で後景に退くとともに、加えて一枝の実像が必ずしも正確に描き出されていないという結果を招いている点です。残念なことに、現象として「^{ひいき}鼻眞の引き倒し」が発生しており、言い換えるならば、「男尊女卑」を単に裏返しただけの一面的視点が、つまりは妻一枝への讃美と夫憲吉への批判が、真実と実証に近づくことなく、全体にわたって記述の基調となっているのです。

過去に実在した人物の生涯を描くということは、どういうことでしょうか。それは、あくまでも事実に肉薄した学問的作物でなければなりません。逆のいい方をすれば、決して虚偽を構成してはならないのです。そのために、関連する人物および事象にかかわって、限りなくエヴィデンス（証拠となる一次資料）を渉猟し、十全にそれを援用して描写することが、伝記作家に厳しく求められることになります。その観点に立つならば、事実とは大きく異なる虚構空間に実在の人物を投入し、そのなかでマリオネットよろしく書き手が自在に操る

小説のごとき手法は、決して適切な描画法とはいえません。他方、実在人物の言動を都合よく利用し、書き手個人の強い思いを一方的に割り込ませようとする過度な評伝的手法もまた、同じく適切とはいえません。描写する歴史は真実であってこそ、人はそこから安心して多くの知識と教訓を得ることができ、そのことを前提として、伝記文学という形式は成り立っているといえます。

英国にあって、過去の実在人物の歴史を知るうえで小説の形式よりも伝記の手法の方が好まれる理由が、ここにあるのです。そしてまた、人物批評ないしは作品分析は、伝記とは別の相に属しているという理解が、一般的に定着しています。決して安易な混同は許されません。そのことを富本一枝に当てはめるならば、まずは一枝についての信頼に足る伝記が、それぞれの時代が要請する方法論に沿いながら、堆積的に生まれてゆき、その次に、それを土台的基礎学として呼応するかたちをとりながら、同じく時代が用意した主題と文脈に乗せ、精緻な一枝研究が多元的に構築されてゆくことを意味します。

それでは伝記は、どのような書法によって叙述されなければならないのでしょうか。単にエヴィデンスを並べるだけであれば、無色透明の年表になり、無味乾燥の年代記になってしまいます。単にそれだけであれば、実在した人物が生き生きとした画像でもって現像されることはありません。かといって、実在人物に余分なものまで恣意的にまとわせ、加飾してしまえば、どうなるのでしょうか。この場合は、書き手にとって都合のいい主人公像が生み出されることはあっても、一人ひとり関心の異なる読み手にとっては、思考の自由が奪われ、脚色された主人公像が無理に押し付けられてしまいかねない危険性が残されることになります。そうした危惧される事態を避けるためには、どうしたらいいのでしょうか。

少し極端かもしれませんが、ひとつの解決法として考えられることは、書き手自身が余分な思い込み（多くの場合は、事実に基づかない個人的な感想）の披歴をできるだけ差し控え、主人公たる本人に自身の人生にかかわる大部分を語らせることではないのでしょうか。私が研究の対象としています一九世紀英国のデザイナーで、著述家で社会主義思想家でもあるウィリアム・モリスの幾多の伝記にあって、そうした事例が過去にふたつありますので、ここで紹介します。ひとつは、次の書物です。モリスの死去一年後に出版されています。

Aymer Vallance, *William Morris: His Art, his Writings and his Public Life*, George Bell and Sons, London, 1897.

この本で著者のエイマ・ヴァランスは、主としてモリスの言説をつなぎ合わせるかたちをとって彼の生涯を構成しました。そのため、著者の語りは極力抑えられていますが、その反面で、引用符号が多用される結果となっています。ここでは、この書物の成り立ちについては詳しく論じませんが、この描写法は、著者の自由意思によって考案された書法ではなく、個人的な憶測や感情のもとにモリスの生涯が描かれることを避けようとする、遺族や関係者の意向を反映した、どちらかといえば、苦肉の産物ともいえるものでした。その意味でこの著作は中立的であり、機械的であり、その分物足りなさを感じる読者もいたかもしれません。

この本の出版から二年後に、公式伝記と呼ばれるジョン・マッケイルの『ウィリアム・モリスの生涯』が世に出ます。ヴィクトリア時代の伝記書法としては、こちらの方がより一般

的だったこともあり、実際、読書界にあつては、先行したヴァランスの伝記に比べて人気が高かったようです。しかし、ヴァランスのこの『ウィリアム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』は、今日あつていまだに言及する研究者も伝記作家も少なくなく、決して完全に色あせているとはいえません。「ひとつの記録」として成り立つ独自の書法が容易に無視されえないのではないかと推量されます。

次に挙げるものが、もうひとつの事例で、ヴァランスの伝記に比べれば近年の出版物となります。

Gillian Naylor ed., *William Morris by Himself: Designs and Writings*, Macdonald & Co (publishers), London & Sydney, 1988.

書題を訳せば、『本人が語るウィリアム・モリス——デザインと著作』とでもなるでしょうか。実際、内容は、モリスのデザインと著作（書簡類を含む）とが多数援用されながら、その生涯がどのようなものであったのかが概観できるように工夫されています。他方、編著者の語りは、各章の冒頭に慎ましく添えられている程度です。この形式は、ヴァランスの書物の成り立ちとは異なり、編著者であるジリアン・ネイラーなり出版社なりの発案による産物だったのではないかと考えられます。伝記書法上の新鮮なひとつのモデルが、ここに提示されているのです。

私は、これらふたつの伝記の記述手法に関心をもってきました。といいますのも、伝記文学の形式が確立しているといわれている英国とは異なり、これまで日本で出版された伝記にあつては、一般的にいて、歴史記述とも現代批評ともいいがたい、しかも虚実がない交ぜとなった言説が著者自身によって進んで開陳される傾向がしばしば見受けられてきたからです。しかし、上記の二著は、著者自身が多くを語るのではなく、モリス本人に自身の生涯を語らせようとしています。換言すれば、明らかに、客観性と真実性を可能な限り担保するために、著者による多弁と能弁が抑制され、本人が語る事実と現実とが優先されているのです。

富本一枝の伝記を書くにあたり、ヴァランスとネイラーの事例を参考にしながら、ここで私も伝記記述上の、いままでにないひとつの実験をしてみたいと考えました。本稿「ふたつの性——富本一枝伝」の副題であります「本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯」という表記において直接的に表現されていますように、本文のすべてを「本人と仲間たちの語り」で構成したいと思います。一方、一枝の生涯を分節化することで生まれた章題と節題、および項目題だけが私によって提供されます。さらに、巻末の「語りの出典と注記」におきまして、それぞれの資料の出典が明記され、あわせて、読者のみなさまの思考の手助けになるであろうと思われる範囲にあつて限定的に注釈を加えさせていただきます。

私は、本文において編集されています「本人と仲間たちの語り」をお読みいただいたうえで、読者のお一人おひとりが、自由にご自身の富本一枝像を造形されることを希望いたします。そして、その像を参照しながら、ご自身の生涯に思いを馳せてみてください。きっと何か感じるものが手に入るにちがいありません。伝記にかかわる書法上のこの新しい試みが、そのようなよい結果を招来することになれば、歴史家として、そして伝記作家として私の望外の喜びになることでしょう。

前置きが長くなってしまいました。それでは、これより、本文に入らせていただきます。
富本一枝という、明治、大正、昭和の三つの時代を生きたひとりの人間（ほぼ間違いなくトランスジェンダー男性）の、「本人と仲間たちの語り」でもって綴られる、その生涯をお楽しみください。

（二〇二三年一月）

第一章 生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）

一八九三（明治二六）年～一九一二（明治四五）年

第一節 富山での出生と幼児期

一．母方の家柄と両親の縁談〔語り手／富本一枝〕

私の生れたころ、父は、地方新聞のさし絵を描くかたわら、今で言う商業デザインの仕事をしていたようです。当時父は、自由民権運動論者と親しく交わっていたようで、母の話では、自由民権運動のために仕事もほうり出してかけずりまわっていたようです。それで、母と縁談がもちあがったとき、母方の一門は加賀前田の分藩の御家中でも禄の高い家柄ぞろいだったので、由緒正しい士の娘を、平民の、しかもしがたない貧乏画かきになど、と言って大反対されたそうです。それを祖母が「金禄公債の僅かな利子にたよって、びくびく暮す没落士族より、筆一本で身を立てている男の方がよっぽどえらい」とめづらしく言い張ったということです。明治二四、五年時分に、舊式一点張りの女であった祖母がこうしたことが言えたというのは、今思えば、禄を失った祖父が経済的に無力で、祖母のつらい働きでどうにか生計をたてていた、その強みがさせたことでしょうか、なかなか印象づよく残っている話ですが、と言っても勘定奉行なんの何某の孫とか、家老のなんとか、といった家柄の母は生れただったので、自由奔放な父のありかたに比べ、母は私たちを至って厳格に躾けました。〔1〕

二．母の嫁入り道具〔語り手／富本一枝〕

お嫁に来ますときなど、家伝の九寸五分をもってまいったくらいで、万事ひどく厳格でいわれるしつけということをやかましくもうしていました。〔2〕

三．父の性格と母の苦勞〔語り手／富本一枝〕

父は明治元年に生れた。ずいぶん人とかわつたところのあつた人だつたが、駆引とか、うそなどいえない、心のまつすぐな人だつた。なんにでも、すぐ感動して、よしと思つたらあとさきをかえりみるひまなく、たちまちそのことに夢中になつてかかつた。好奇心の強い、矛盾だらけのお人好だと、口癖のように母はいつて嘆いていたが、さぞかし母は苦勞だつたろう。

父は日本画を書いていたが、有名な画家ではなかつた。もし、父が画一筋の途を歩んでいたなら、あるいは、明治大正の画人傳の片隅にでも、名前がくわわつていたかも知れぬ。ところが画をかくことより、父にはもつと、他に心を惹かれることがとにかく多かつたようだ。〔3〕

四．一枝誕生〔語り手／尾竹親〕

紅吉——即ち尾竹一枝は、明治二十六年四月二十日、父熊太郎（越堂）の長女として富山市の越前町で生まれた。〔4〕

五．越前町の思い出〔語り手／尾竹親〕

「郵便局の柱に紐でよくつながれていたことを覚えています」越前町での思い出を、そう

語る一枝だが、そのころ、少年の竹坡は、もっぱら一枝や妹の福美たちの子守をさせられていたらしい。「叔父さんは、よく本を読んでいました」これが、当時の竹坡に対する印象であり、彼女の記憶である。〔5〕

六. 父方の祖父母に連れられて上京〔語り手／富本一枝〕

母さんがあなた方の時分は一体どうしてゐたでせう、母さんの六つのときは、まだとてもひどい赤ん坊でした。母さんの故郷が大火事で半分焼けて仕舞ひ、母さんは死なれた大おぢいさんや大おばあさんにつれられて東京に出た年です。餘程のあまつたれで、とてもお行儀なんか悪くてだめだったやうです。〔6〕

第二節 離郷後の東京での学童期

一. 小学校へ入級〔語り手／富本一枝〕

もっとも私は、父の仕事の都合で、小学校三年まで、東京にいた父の祖父母に預けられていましたから、母の躰けが、どんなに厳しいものだったか、それは大阪に住んでいた父母の膝下につれ戻されてからわかったことでした。〔7〕

二. 当時の根岸尋常高等小学校〔語り手／『創立百十周年読本「根岸」』〕

明治二十年（一八八七年）に、今の西藏院のうしろ、円光寺との間、今の下谷病院のあたりに新しく木造校舎をたててひっこしました。二階だての木造校舎で、広さは前の十倍になりました。

二年ほどたって、根岸町は金杉村から分かれて、下谷区にはいりました。そして、校名も、東京市下谷区根岸尋常高等小学校にかわりしました。

その後、生徒もだんだんふえてきたので、教室をたてましました。生徒数は、明治の終わりころには、今と同じ八〇〇～九〇〇名くらいになりました。〔8〕

三. 小学校での生活〔語り手／富本一枝〕

八つの年にはどうしてゐましたらう、たしか小学校に入學してゐました。勉強についての記憶よりか、学校の春秋の運動會にいつも走りつこの一番になり、かゝへきれぬ程欲ばつて賞品をもらつた事や、學校から戻るなり、祖父さんに作つてもらつた蟬とり網の袋をもつて、近所の男の子達と上野の山や田端邊に、日の暮れ暮れまで蟬とりにでかけてゐた記憶ばかりが思ひ出されます。〔9〕

四. 祖父母の思い出〔語り手／富本一枝〕

私の父の兩親は浄土眞宗の信者だった。私は、天保生れの祖父から、御文章をおそわり、文久生れの祖母から、西國三十三番順禮歌をならつた。祖母はまた、荳菴道心や安壽姫のあわれな物語を、天狗にさらわれる話や、狸や狐が人を化かす話と同じようにきかせてくれた。桃太郎や舌切雀では、もうつまらなくなつていた私と妹は、めそめそしながら、石童丸のそのあわれな物語に、いつまでもきき入つていたものだ。〔10〕

第三節 転居後の大阪での学童期

一. 東本願寺別院へ通う〔語り手／富本一枝〕

私は子どものころ、お經を習ったことがあった。そのいきさつは忘れたが、とにかく、日曜ごとに『正信偈和讃』と数珠をもつて、大阪の東本願寺別院に通った。本堂にあつまつた子どもは、どの子も私と同じとし格好で、二十人ほどだつたろうか、それが二人ずつ小さな經机に膝を入れて、お坊さんがあげるお經を、おとなしくして聴いていた。お經の字を讀める子は、ひとりもいなかった。みんなはただ、お坊さんの唱えるとおりに、“キ ミヨウ ムリヨウ ジュ ニョ ラーイー、ナムフーカーシーギーコウ”と、聲を張上げて合唱するだけだつた。それでも、いつのまにか、『正信偈和讃』を覚えてしまった。そして母は、弟たちの命日になると、私にお經を上げさせ、そのあいだ私の傍について、“南無阿彌陀佛”“南無阿彌陀佛”と、低い聲で唱^{しょうみょう}名していた。〔11〕

二. 日々の先祖供養の手伝い〔語り手／富本一枝〕

母の盛った御佛飯を、毎朝佛前に供えるのも私のつとめだつた。御佛飯のおさがりは母がいただくことに決まっていた。（中略）

佛事になると、なにごとによらず、母はやかましかつた。今年は、だれだれの十三回忌、ことしは、だれそれの三十三回忌、といつて、しきたりどおりに法事を營んだ。

私は、母といつしよに、お精^{しょうりょう}霊さまに供える茄子と胡瓜の馬をこしらえたことを覚えている。お盆が近づくと、母は佛具をきれいに磨き、佛壇のすみずみまで拭っていた。〔12〕

三. 父の道楽（その1）〔語り手／富本一枝〕

子どもの教育は母にまかされておりました。父は、その頃、美人画ですこし売り出していましたから、お金にさほど困るはずはなかったでしょうに、とったお金は、母の手もとに極く少ししか渡さず、その金で新案特許をとる品物づくりに夢中になり、やれ、沈没した軍艦の引きあげ機だ、やれ、戦車をこしらえるのだといって、家のくらしはかまわず、母はずいぶん苦労したようです。この風変りな父のおかげで、私はのびのびと育った面もあり、またその半面、母の古風な躰けで、子どもながら途方にくれるようなこともあったのです。〔13〕

四. 父の道楽（その2）〔語り手／尾竹親〕

生来の発明狂といわれた父の越堂は、大阪在住のころにも、一時自ら粉齒磨を作つては売っていたという。「金盥に齒磨粉をいっぱい入れて、かきまわしている父の姿を、よく覚えています。たしか〈大和桜〉とかいうような名でしたが、袋に桜の花模様がついていたことを記憶しています。」一枝は、当時のことをそう語ってくれた。

「そのころ、売り出しのため、私は、チンドン屋の旗を持って、街中をねり歩き、ビラを配って歩いたもんです」はじめて聞く彼女の少女時代の思い出話である。〔14〕

五. 母の厳格な生活信条〔語り手／富本一枝〕

幼いときから、畳のへりを踏んでも叱られるし、ごはんのたべ方にしても箸の上げ下げ一

つにしても、いちいちやかましくいわれてきたものです。祖先をうやまうこと、君に忠、親に孝ということ、これが第一の教えでした。夫につかえること、忍従の教えは徹底したものです。[15]

六. 母の生活信条の由来 [語り手／富本一枝]

母の父は、越中富山藩の高祿武士だった。廃藩のとき與えられた金祿公債を、「武士の商法」ですつかり失くし、私のうまれたころは細々としたくらしだったらしい。それでいて、武家の格式を守ることにやかましく、子供のしつけなども厳しかった、ということだ。[16]

七. 母のしつけ（その1）[語り手／富本一枝]

女の子は行儀よく、ということが第一でした。身なりをかまうこと、髪の毛一本ほつれていても、母はとても気にしました。下駄の脱ぎかたもやかましく、おふろ屋行は涙が出るほどつらいことでした。アカスリ、ヌカブクロ、の順で無理矢理にひっかかえられて洗われるのがこの上なくいやだったのです。また「学校」「先生」「復習」というものが母にとってオキテでありました。

学校から戻ると、まず復習^{おさらい}です。それがすむまで、ひとやすみも許しません。母はこの世で、うそほど悪いものはないと教えました。あたたかい人の真心のありがたさについても言い続けておりました。“偉い人になるのだぞ” としか私に言わなかった父と、この母の考え方の中で、私は育っていたわけです。[17]

八. 母のしつけ（その2）[語り手／富本一枝]

母は、うそをつくことと怠けることが大嫌いだった。へつらったり、自分さえよければ人はどうだろうと平気な人間を、とりわけ好きでなかった。（中略）

母がつねづね子どもにきかせていたことは、情のある人、思いやりのある人になることだった。一番はずかしいことは、困った人をたすけたことをいつまでも覚えていること。それと、「人のふり見て我がふり直せ」ということだった。[18]

九. 日露戦争の思い出 [語り手／富本一枝]

宣戦が布告されたときは高等小學校に通っておりまして。校長の講和のあとみんなで萬歳をとなえたものです。あのころはそろそろ天皇陛下というものは絶対のものになりはじめておりました。祖母など、御眞影を見ただけで目がつぶれるといっていましたから……私たち式のときなど、初めからおしまいまで最敬禮したままで……（中略）

私は廣瀬中佐の、旅順口の閉塞の話を校長からきいたとき緊張して顔がほてつたほどでした。小學生ですからまことに単純なもので勝てば嬉しいし負けたときけば悲しかったのです。遼陽の會戦で日本が勝つたときなど、授業を休んで祝つたものです。堺というところにロシアから捕虜がくるというので、母はお辨當をこしらえてまだ明けきらないのに、子どもたちを連れてそこまで汽車で出かけました。……しかし、しばらくそこにいるうちに、捕虜を眺めていることが妙に白々しい思いがしてきて、こんどは、ひどく可哀想に思えてきました。行くときは勇んで行つたくせに歸りには何か割り切れない、とてもさびしい氣がした

ことだけは、はつきり覚えております。〔19〕

一〇．義賊に憧れる〔語り手／富本一枝〕

高等小学校のころには、さかんに義賊に憧れましてね、父に見つかりと叱られるもんだから、押入れに隠れて、コッソリと鼠小僧の本などを夢中で読みました。〔20〕

第四節 夕陽丘高等女学校時代

一．夕陽丘高等女学校の前身校に入学〔語り手／富本一枝〕

私が女学校に入ることは、私の希望でもありましたが、父も母も、これからの女の子は「高等教育」を受けなければだめだ、ということでは一致しておりました。日露戦争がすんだ直後のことでした。といっても大阪というところでは、その当時は高等女学校へ子どもやる親たちは、まだごく僅かだったようです。私は、できたばかりの大阪府立夕陽ヶ丘高等女学校へ入学いたしました。明治三十九年でしたらうか。〔21〕

二．自由で華やいだ校風〔語り手／富本一枝〕

その時の女学校は、ちょうど日露戦争後の興隆期にあたり、東京の大学で新しい教育をうけた先生方が集まって、学校全体が非常にフレッシュでした。校長も進歩的な考えを持った人で、若い先生たちを大切に、どちらかといえば自由に、その考えを通してあげていたようです。英語と国語には特に力を注いでいたようでしたし、^{スポーツ}運動もなかなか盛んでした。テニスやピンポンもやりましたし、夏は、海へ出かけて水泳もやりました。私はピンポンではクラス一で、テニスは前衛でなかなか活躍しました。〔22〕

三．美しい女性教師を好きになる〔語り手／尾竹一枝〕

私がまだ學校にゐた頃でした。そうですね、丁度十八の時の事です。今いつたように、ちよつとしたことから思ひがけなく愛の爲に競争して自分が勝利者になつた瞬間にそれまでの色々の無理が破裂して私の幼い罪惡が正直に私の兩親なり受持教師の前に搬ばれたのです。それがために私は死人のようになつて K 市の波止場まで逃走したことがありました。

私の學校に私が二年になつた春、そりや美しい綺麗な若い音樂の先生が來ました。その春音樂學校を卒業したばかりの聲の大變にいゝ女の先生でした。その先生はソプラノがことに得意でした。（中略）

日が経つにつれて私は I 先生がたまらなく好きな人になりました。……けれど私と先生の間には特に好い機會がなかつたゝめ可成り長い間二人きりの親みを有つことが出来なかつたのです。（中略）

それがふとしたはづみで私は I 先生とどうしても殊更の深い愛をもち合はなければならぬ様になつてきました。私の妙な意地と不思議な好奇心がそうさせてしまつたのです。（中略）

私はこの小さな短いこれだけの會話を耳にしたばかりにいつもの妙な競争心が電光のやうな早さを以つて私の胸を走つた。（中略）

私の不安は一刻毎に募つてきました。そしてそれまでに芽くんでゐる私と I 先生の愛着

を絶対のものに爲ると云ふ願ひよりもつと強く私はまづ競争者にならなければならないと強い強い感情を有つてゐました。私はまあ愛の掠奪をする積りなんです。（中略）

そのうち X はまるで狂人のやうな荒い恐ろしい眼でいつも私を凝視てゐるやうになりました。そして I 先生に對しての烈しい愛の欲求は火の様に舞い狂つていました。（中略）

私は無理に無理して随分苦しい手段や危険な方法をもつて X と相對してゐました。……人から見ると卑劣だとか卑怯だとか云はれましようけれど、全く私はその事實を話すことが苦しいのです。……どうぞ強いて聞くやうなことはしては下さらぬやう。（中略）

それでとにかく K 市についてすぐ私は西洋人の牧師か宣教師の家を訪ねて自分の罪をすつかり懺悔しようと決めました。……K 市に着いたのはもう夜になつてからです。……只私の罪を悲しみ驚き怒つてゐる両親のことがはつきり眼に浮かんでくるのです。私はいくどかいくどか新しい涙が溢れました。（中略）

私はこの人の話をきいて、どうしても家に歸へらなければならないと決心しました。

私はもうそれまでに弱くなつてゐました、みぢめなものになつてゐました。そしてどうして自分はこんな處まできてしまつたのだらうとつくづく両親のために恥ぢてまたあたらしく悲しましました。〔23〕

四. 友だちにうそをつく〔語り手／富本一枝〕

私が、まだ大阪にいる頃でした。よくありましよう、自分の家の自慢をすることが……私もまだ女学生でしたし、何かのはずみに、うちにオルガンがあると、クラスの者たちに自慢しちゃったんです。ところが、あとで、友だちがみんなで見にくく言うので、困っちゃいましてね……今、ちょうど毀れているから駄目だと嘘をついてどうにかごまかしたんですが……そんな、私のことを母は知っていたんでしょうか、その後まもなくオルガンを買ってくれました。〔24〕

五. 絵描きになるための修行〔語り手／富本一枝〕

とにかく私は女學校の下級生であつた頃から父の考へのやうな繪をかくために仕込まれてゐたやうだ。學校から歸つてくると先づその日の新聞小説の挿繪があてがはれる。薄美濃といふ大型の……薄手の紙で、その繪を寫しとらせることと、「前賢故實」といふ大部な歴史物を極つた枚數だけそつくり寫しとることが仕事だつた。新聞小説の挿繪の方は……そんなに困難ではなかつたが、「前賢故實」といふのにはいい加減なさけない思ひをさせられた。〔25〕

六. 絵を描くことへの反発〔語り手／富本一枝〕

時には、信貴山縁起だの福富草紙だのという繪巻の模寫まであてがはれたが、私は父の希望するやうに、繪をかく人になる氣などまるでなかつた。それどころか繪をかく勉強などさせる父を心のなかでどんなに憎んできたか知れない。だから私は學校から戻ると、その仕事をなんとかしてはぐらかそうと色々と苦心した。……たゞ、小説を読むことに夢中で、隙さえあつたら手あたりまかせに読みあさつて居た。私の周囲には私がのぞむやうな本がまるでなかつた。私は貸本屋にひそかに足をはこんだ。圖書館にも出かけた。……知識的に質の低劣な私に讀めるものは悲しくもすこししかなかつた。それでも私は乱讀を續けることを

止めようとはしなかった。

父は勿論そのことを悦ばなかった。小説本を讀んでゐるところをみつけられたら最期、父の手でそれは何處かに隠されてしまった。貸本屋から本をもつてくることを私は遂々斷念して、その代り日曜がやつてくると、友達を訪ねるといふ口實で朝はやくからきりきりの時間まで圖書館で讀んだ。〔26〕

七. お茶とお三味線を習う〔語り手／富本一枝〕

父は私を繪かきにさせるときめておりましたから、少しぐらい變り者の方がよいぐらいに考えておりました。母はさつき申しましたように、茶を習わしたり、三味線を習わしたり、させたがりました。ですから、女子美術に入るまでは、琴も、お茶もごく一通りでしたが、これは母のために習いもしました。それで母がよろこぶなら、というところでしょうか。しかし、結局母の考えとは、ことごとにくいちがつて、いろいろな點で母を困らせておりました。〔27〕

八. 新校舎への移転と景勝に富んだ敷地〔語り手／初代校長の伊賀駒吉郎〕

本校校地夕陽丘はもと大阪名勝の一に算へられ梅樹を以て鳴る校地は街路より数十尺の高地に在り、後に歌聖藤原家隆卿の塚と聖徳太子建立の愛染塔とあり北は巨剎を控え南は大江神社に隣す。前面西方を望めば、煙突林立活動の市街をへだてて遠く茅渚の海を觀る。天氣晴朗の日夕陽の海波に映じて淡路島山にかくれなんとする光景は雄大艷美、空氣清涼四方靜閑実に大阪の仙境たり。〔28〕

九. 文芸会〔語り手／『大阪毎日新聞』〕

夕陽丘女學校の文藝會は唱歌、箏曲、英語對話皆好成績、中にも無形の劇ともいふべき三段の朗讀對話なるものが來會者を驚嘆せしめたり……第三段の『酒匂の吹雪』と題せる二宮金次郎孝行の條に至りては川崎道江子の母お由、中村數枝子の金次郎等切々の哀情を表はし高橋楠枝子の馬鹿男、尾竹一枝子の強欲八郎兵衛など輕快なると執拗なるとを配し殆んど遺憾なく感ぜしためるが散會したるは午後七時なりき。〔29〕

一〇. 運動会〔語り手／『大阪毎日新聞』〕

若草色の校舎に沿うて見物人がずらりと詰めかけて居るが而も八分迄が女性なので髪飾り着物の色が一しほに會場の色彩を引立しめた……最後には五百の生徒がカタン糸で（運動會）と書いた綠門から第四師團軍樂隊の奏樂につれ手を組みながら出て來て行進プロ子ーズを演じたのは壯觀で白いリボン^{アーチ}は四年、青が三年、桃が二年、赤が一年と區別したのはおもしろい思付きである〔。〕先生と生徒が一緒に校歌を歌つて會を終つたのが五時、幸ひ雨も降らず、なかなか規律の立つた面白い運動會であつた。〔30〕

一一. 第一回卒業式の答辭〔語り手／卒業生總代の牧こむめ〕

妾等今將に校門を辭せむとして、4年敬仰の恩師と同胞四百の諸嬢と袂を分かつは転々悲痛に堪へざる處なり、紅葉焦がるゝ大江の神社、古木鬱蒼たる愛染塔何時のときか忘らるべき、或は運動会に、或は文藝会に、或は遠足にかたみに楽しく、勇ましく語らいし昔あわれ、

明日よりは思多き過去の生活となりぬべし、されども人生は人をして何時までも学校生活をなさしむるを許さざるなり、嗚呼妾等が敬仰せる恩師の君よ、よく健康にましまし永く我が校に止まりて我が同胞を強化し妾等卒業生を指導し給へ、親愛なる同胞よ、よく師命を守り束の間も校規を服膺し愈々我が校の名声を高められよ。いざさらば。〔31〕

一二．小説家や声楽家を夢見る〔語り手／富本一枝〕

私は一八になつた。學校を出るとすぐ私の將來に就て親達は本格的な相談をもち出した。

……私は一體どうしたいのか自分に問うてみなければならない程、明確に進む目的なり方向をもつてゐない自分をそこにみつめて、黨惑したものだ。小説を読むことはやたらに好きであつたが、小説をかくといふことがどんなことなのか、それすら考へ及ばぬことであつた。

勉強の方法がわからなかつた。だから、さうなれば修業の方法がわかつてゐた聲樂をやつてみてもいいといふ氣になつた。……それを自分の希望として父に話したら、頭からどなりつけられた。〔32〕

一三．東京への強い憧れ〔語り手／富本一枝〕

きまつた方針もたゝなかつたが、東京に行くことだけはあきらめきれなかつた。東京に待つものが、自分をきつとしあはせにし、自分にしつかりした目標を與へてくれる、その考へにつき纏はれた。……

なにかしら東京といふものを考へてみると、背後から激しい力で私を前に押しやるものがあつた。（中略）

むやみに、新しい生活が、自分の親達とはまるで違つた生活が、自分の手で力で意思で、とにかくやつてみたくて、またしなければならぬ氣ばかりして、その情熱で身も心も焼きあふり、呼吸も出来ないやうな切迫した思ひで夜明けが待たれた。……私はひたすら東京に行かしてほしいことを頼みつづけた。〔33〕

一四．叔父竹坡の来阪と助け船〔語り手／富本一枝〕

そんなところへ東京から伯父が偶然に來合せて、父の意見と私の夢のやうな考へをきいてくれて……この子を美術學校に入れたらどうか、といふ意見を出してくれた。……私は好きでやらうともしないことに結局つれていかれることが悲しかったが、東京に行くためにそれ以外の手段が全くないことがわかつてゐたから、それでは美術學校に行きますと返事をするより仕方がなかつた。〔34〕

第五節 女子美術学校入退学

一．女子美術学校に入学〔語り手／富本一枝〕

……上野の美術學校は女人禁制であつた。或は今年あたりから少數採るやうなことになるかも知れないと言ふ伯父〔竹坡〕の話をあてにして出て來たが、女子の入学は問題にさへなつてゐなかつた。私はすっかり失望した。やむなく本郷の菊坂にある女子美術に行くことに決まり、その寄宿舎に移つた。〔35〕

二. 寄宿舎の概要〔語り手／『女子美術大学八十年史』〕

寄宿舎は建て坪一二一坪の総三階建てで、部屋数は八畳室二八、六畳室八の計三六室、それに洗面所、食堂、炊事室、浴室などが付属していた。〔36〕

三. 日本画科の授業〔語り手／富本一枝〕

毎日、日本畫の教室に出て川端玉章のお弟子だといふ何とか紫川といふ老人の教師から水墨のつけたての手本を與へられ……そんなものを習はねばならなかつたことがどんなにせつなくつまらなかつたか。やがて私は寫生するために配られて來た薩摩芋や栗を火鉢にくべて焼くことに成功をかさねたり、林檎や柿を半分まづ喰べてしまつて半分になつてしまつた果實でうまく立體的な感じを出すことが楽しいことになつてしまつた。併し學校でのこんな生活に私は我慢出來なくなつて、退屈な日が思つたより早くやつて來た。〔37〕

四. 月岡花子との恋〔語り手／深草の人〕

それから、また紫の色も床しいカシミヤの袴を胸高にきりゝと着けて、靴音も活潑に女子美術の門をくゞつた、この人の可愛い女學生姿に見惚れた者もありませう。然し時々はこの美しい人と並んで、女には珍らしい程身長の高い、色の浅黒い、セルの袴に男ものの駒下駄をつツかけた、女壯士とでも云ひたいやうな人の聲高に、話して行く有様を見て吃驚した人も一人や二人ではないと思ひます。

この美しい可愛い人こそ誰あらう月岡花子嬢で、も一人の女壯士こそ問題の人謎の女の尾竹紅吉女史その人であつた。

……花子嬢が女子美術の生徒であり、紅吉女史も一時女子美術に席を置いたことがあると云ふ關係から、おそらく知己となり友達になつたと云ふことだけは確かです。（中略）

〔奥村博の出現により紅吉は平塚らいてうと別れなければならないことになり〕それからと云ふもの、二人の仲は親しい友と云ふよりも、その友垣の垣根を越えて、わりなき仲となつたのでした。同性の戀！まア何といふあやしい響きを傳へる言葉でせう。〔38〕

五. 大川茂子との恋〔語り手／深草の人〕

……やがてその次にあらはれたのが大川茂子といふやはり女子美術の洋畫部の生徒でした。茂子嬢と紅吉女史との戀……は花子嬢のそれと比べてはなかなかまさるとも劣ることない程の強く深く切ないものでありました。（中略）

……嬢は何時とはなしに紅吉女史の例の魅力に惹き付けられて仕舞つたのでした。……それから二人の放縱な自由な切な嬌曳は日に夜についてこの日暮里の小やかな茂子嬢の部屋につゞきました。〔39〕

六. 特異な性的指向の自覚〔語り手／尾竹一枝〕

……私にはちいさな時分から美しい女の人をみるのが非常に心持のよいことで、また、大變に好きだつたのです。それで私の今迄の愛の對照になつてゐた人のすべては悉く美しい女ばかりでした。私の愛する人、私の戀しいと思ふ人、そしてまた、私を愛してくれる人、戀してくれる人の皆もやつぱり女の人ばかりでした。

ですから美しい綺麗な女の人と言へば私に有つてゐるようないほど非常な注意と異常な見守り方をもつて來てゐました。〔40〕

七. 寄宿舎の舎監と衝突〔語り手／富本一枝〕

日本畫の教室から抜け出して三階の西洋畫の教室に遊びに行く方が多くなつた頃、私は學校から立派な不良生徒としてにらまれてゐた。私が裸體のモデルを使ひたくなつて、西洋畫に轉科したい希望を父に書き送つた手紙の返事がこないうちに、私は、寄宿舎の舎監と衝突して、さつさと行李を伯父の家に搬ぶやうになつた。消灯後私が友達と遊びすぎたといふ事が重なつたのが、舎監の老先生をすつかり怒らせたのがこの原因だつた。〔41〕

第六節 『青鞥』の創刊を知る

一. 叔父宅の食客となる〔語り手／富本一枝〕

私は自分勝手に學校を去つたことで父をも伯父をも怒らせてしまつた。一種の刑罰のようにそれ以降私は伯父の家で女中代わりの仕事をしなければならなくなつた。私は伯父が繪をかく時は繪具溶きに廻されたし、伯母が臺所に立てば、七論の下をはたき、味噌をすり、野菜を洗ひ米をといだ。〔42〕

二. 異性装を身にまとう〔語り手／竹坡の妻きく（一枝の叔母）〕

一枝さんと一緒に上野の山へ行つた時よ、その人マントをすらっと着ているものだから男と間違えられちゃつてね、笑つたことがあるわよ……。〔43〕

三. 叔母宛ての青鞥社からの手紙〔語り手／富本一枝〕

或る日の朝、表庭の掃除をしてゐたら伯母宛の手紙が一通配達夫から渡された。……私はその一本の手紙がひどく氣にかかり、不思議に思はれて裏返してみたら、青鞥社と書かれて居た。……私の渡した手紙を伯母も不審らしく眺めていたが……封を切つてとり出したのが青鞥發刊の辞と青鞥社の規約であつた。伯母にとっては勿論それは一枚の印刷物に過ぎなかつたが、私にとっては天地振動そのものであつた。〔44〕

四. 小林哥津子へ手紙を書く〔語り手／富本一枝〕

その夜私は偶然なことから知合ひになつた私の文藝のたつた一人の友達であつた小林清親の娘さんに長い長い手紙を書いた。その頃私はこの人から西歐の文藝書を大方貸してもらつて讀んだものだ。どんなことをその長い手紙で書き送つたかまるで記憶に残つてはみないが、ありたけの熱情をかたむけつくして自分達のために自由な世界が出現したことに祝福と歡喜をさへげたといふことには間違ひない。〔45〕

五. 小林哥津子のこと〔語り手／富本一枝〕

私は小林清親さんの娘さんの哥津子さんとお友だちでした。哥津子さんは——私たち、小林さんのことを哥津ちゃん、哥津ちゃんといっていました、その哥津ちゃんは、その時はもう青鞥社の同人でした。私は哥津ちゃんから青鞥加入を盛んにすすめられました。哥津ち

ゃんは仏英和（女学校）を出たばかりで、外国の作家のものを、言語で読んでいたので、私はびっくりしたのですが、青鞥の運動についてはなかなか情熱をもっていました。[46]

第七節 一時帰阪と新境地の幕開け

一. 竹坡に連れられて大阪へ〔語り手／富本一枝〕

はじめて青鞥という雑誌を見たのは小林歌津さんに長い手紙をかいたすぐ後、伯父の下阪について大阪に戻つてゐた間だつたと思ふ。「元始女性^{メヅ}は太陽であつた」といふ平塚さんのあの文章を、若い私は聖典のやうに毎日読んで考へた。……

なんといふ眩しい傲然とした宣言だ。……平塚さんの言葉を幾度も聲に出して読みかへした。……

ロオトレイクの繪を「白樺」で見たのも、ロダンの作品の寫眞版を見たのもそれと同じ頃だつたか。

私はその部屋から平塚さんに何度となく手紙を書き送つた。……自分のことがよく理解されるのは平塚さんよりないとまで思ひつめた。[47]

二. 平塚らいてうへの手紙〔語り手／尾竹一枝〕

『青鞥』の発行されたのは、東京にいた時分から知っていました。……

然し……私は入社せずに大阪の町に帰りました。私は只口惜しく思います。そしてその反動の様に心齋橋の難波の本屋迄毎日のように行つて『青鞥』をさがしました。けれど……一冊も『青鞥』はありません。私は泣きたくなりました。

けれど来月号からは、私は本屋のおかみさんにかたく談じて、一番に私の家にまでとどける事を約束しました。……私は来月からいよいよ『青鞥』の読まれる、一人の女の子の仲間になりました。私はこれで入社ができたのですか？ [48]

三. 「大阪のへんな人」「紅吉」を名乗る〔語り手／平塚らいてう〕

……一種独特な書風の、天衣無縫とも、子どもらしいともいいようのない手紙を受けとったわたくしは、この手紙に惹かれるものを覚えながらも、出さずにいました。

それからたびたび手紙がくるようになり、社内では「大阪のへんな人」ということで、すっかり知られた存在となつたのですが、たまたま、年末の社員会に出席した小林歌津さんから、わたくしはこの未知の、大阪の「へんな人」についていろいろ聞くことができたのでした。

小林さんは、小娘のような口振りだが男のようなたいへんな大女^{おおおんな}、声が大きくあたりかまわずなんでもいう女^{ひと}、白秋の詩が大好きな、十九歳の娘——「そりゃあずい分変わった女^{ひと}よ、恐い女だわ」といいます。

いずれにしてもよほどの変わり者らしく……それから矢つぎばやによこしますが、自分の名前が手紙のたびごとにいろいろ変わり、これがいつの間にか『紅吉』『紅吉』と自分と呼ばしめました。わたしはこの変わり者に入社承諾の返事を出し「あなたは絵を勉強していただけるそうですが、一つ『青鞥』の素晴らしい表紙を描いてみる気はありませんか。いいものが出来れば、今のをいつでも取替えます」と書き添えました。[49]

四．「紅吉」の由来〔語り手／尾竹親〕

「あれはやはり私の小さい時から持っているその気分から出た名なのです」

紅吉という自分のペンネームを一枝はこう説明している。ちょっと見ただけでは、女の名とは思えない。それでも〈べによし〉と読むと、やはりそこには女の感情が伝わってくる。自分では「あれで随分欲張った名」だと言っているところから推すと、彼女なりにある意味がこめられているのだろう。〔50〕

五．青鞥社の社員となる〔語り手／『青鞥』

尾竹一重^{ママ} 大阪南区笠屋町五一。〔51〕

六．『白樺』を見て富本憲吉の存在を知る〔語り手／富本憲吉〕

……四〔、〕五日前書棚の古い白樺を見て居て「私信往復」と云ふ例の手紙があった。初めて「一枝が僕の住む」大和〔安堵村〕の画室へ訪ねて来たのはアノ手紙を見たセイらしい。〔52〕

七．面会打診について憲吉から返事が届く〔語り手／富本憲吉〕

御端書ありがたく拝見。別に何にと申して、御覧に入れる様なものも有りませむが、御かまいなひ無くば何日にても、御来駕を待ちます。なるべく早く。法隆寺駅で、車夫に安堵の富本と云へば、解ります。朝なら大抵、拾一時頃迄、寝て居ます。不一。〔53〕

八．憲吉を大和安堵村に訪ねる〔語り手／富本一枝〕

ちょうど、その頃、英国の留学から帰った人で木版を彫る人が近くに住んでいるということを知りましたので、清宮さんという方を介して訪ねてみたんです。それが富本だったわけです。当時、私は『青鞥』の表紙など描かされそれがたまたま木版刷りだったものですから、教えてもらうために一人でたのみに行きました。〔54〕

九．名刺を差し出す〔語り手／バーナード・リーチ（中山修一訳）〕

ある日のことである、富本が水墨画を描いていると、ひとりの客が面会を求めて玄関で待っていることをそっと伝えるために、下男がやってきた。そして下男は、男物の大判の名刺をこの家の主人〔である富本〕に差し出した。富本はちょっと目を向けただけで、「それでは、その男の方を別の部屋に案内しなさい。お茶を差し上げて、この絵が終われば行きます、と伝えなさい」という指示をした。

しばらくすると、弁解をしようと下男がまたやってきて、作法に倣って咳払いをすると、「旦那様、もう一度その名刺をご覧になっていただけますでしょうか」と小声でささやいた。トミー〔富本〕はそうしてみた。すると、そこに書いてある住所が、いままさに東京で売り出し中の「女性」雑誌の住所であることに気づいたのであった。〔55〕

一〇．大阪への帰り道〔語り手／富本一枝〕

帰りには、わざわざ私を大阪まで送って来てくれたんですが、そのとき、印度のガンジス

川にいた洗濯女からもらったものだという、美しい石の指輪を、富本は私にくれました。ずいぶん、セッカチな話なんですが、一目惚れとでも言うんでしょうか……。〔56〕

一一．お礼状に対して憲吉から返信が届く〔語り手／富本憲吉〕

御手紙ありがたく拝見いたしました。

何むと云ふ理由か知りませむが、近頃私の神経が追々と、ガサガサに成って行く様に思はれます。特に此の四、五日はヒドイ頂点でした。

御出でになった時、何にを申し上げたか、何う云ふ物を御覧に入れたか、一切、只今から考へてわかりませむ。或は無礼な事がありはせむかと心配致しました。

御手紙の通りにマダマダ申し上げても申し上げても、云ひ切れぬ事が沢山あります。〔57〕

一二．再上京〔語り手／富本一枝〕

武者小路實篤氏からロダンのブロンズを展覧するといふ通知をもらつた。私はそのハガキを見てからすぐに荷物をつくつて父の前に出た。さうして父の怒つた顔をそのまゝにして夜汽車で東京に立つた。〔58〕

（第一章完／二〇二三年二月）

第二章 青鞥社を舞台に（大阪・東京）

一九一二（明治四五）年～一九一三（大正二）年

第一節 ロダンの作品鑑賞とらいてう宅訪問

一. ロダンの作品に感動〔語り手／富本一枝〕

新橋につくなりそのまゝ赤坂の三會堂に行つた。作品はすくなかつたが、私は天の星を眼近で見る思ひがした。……ロダンの作品はそれまでの私の退廢的な陶醉に不思議にも苦惱めいたものを感じさせた。私は身動きがならなかつた。〔59〕

二. 小林哥津子の案内で平塚らいてうを訪ねる〔語り手／富本一枝〕

その翌日、私は思ひきつて平塚さんを訪ねた。歌津^{ママ}さんに連れられて本郷曙町にあつた平塚さんの家にいつた。……床の間に小さな香爐が置かれ、眞直ぐにさゝれた一本の線香からたちのぼる煙のかたちがくづれることなく天井にむかつて、部屋はよき香に満ちてゐた。ぴつたりしまつた襖を前に、私と歌津さんは人が違つた程静肅に列んで坐つた。

憧憬のまゝであつたその人がやがて襖をあけて這入ってくるのだ、私は出来るかぎり心を落着かせようとあせつたが、力がまるでお腹にはいつてこない。私は線香の煙を追うて、そこに心を集中しかけたその時だつた。襖が静かにひかれた。平塚さんだ——私は瞬間頭を眞直ぐにあげてその人と眼を合せたが——それなり意氣地なく眼を伏せなければならなかつた。

あの時の、あの静かな美しかつた人、その人の中から溢れこぼれた美、それは崇高といふ言葉で現はしても足りない。叡智といふものの輝かしさであつたらうか。……

私は自分の身體が震へてゐたのがわかつて怖いほどだつた。さうしてその人の叡智に輝いた美しい双眸が、垂れた自分の頭上にそそがれてゐるのだ。さう思ふとますます身體がかたくなつて、足の指にまで力がかたまつて喰ひついてゆくのが解つて弱つた。こんなことでは、これはどうやら自分にとって運命的なつながりが出来るのではなからうか。何人よりも私はこの人を愛するやうになるのではなからうか。私は迷信的なさうして祈祷にも似たふしぎな氣持につかまへられて、そんなことが頻りに思はれてならなかつた。……ロダンのブロンズの話が出た。私は顔をあげずにきのふ感じたことをしかし慎み深く饒舌つた。……私から平塚さんにききたいことが澤山あつたが、それにもかゝらず胸がせつなくなつて舌がつれるようになって、なにも自分からは言へなかつたやうだ。およそ藝術の世界のことが、ぼつぽつとではあつたが、平塚さんから話し出された。哲學、宗教、そんな方面の話はまるで出なかつた。私も小林〔哥津子〕さんも、あまりにも子供だつたから——

あなたは、いい繪をかくことに精進なさいと平塚さんに言はれた。繪など、そんなにかきたくないのですとどうしても言へなかつた。

それどころか、きつと私はいい繪をかきますと言ひきつたものだ。あまりに平塚さんと自分の教養の高さ深さがかけ離れてゐて、羞恥のため消え入るばかりの思ひでゐたから、文學の勉強がもしも出来たら本黨は好きでやりたいのですと言へなくなつたのも本黨だが、この人のためになら——そんな氣持もよほどてつだつてゐた。〔60〕

三．初対面の尾竹紅吉の印象〔語り手／平塚らいてう〕

はじめてみる紅吉という人は、細かい、男ものの久留米緋の対の着物と羽織にセルの袴をはき、すらりと伸び切った大きな丸みのある身体とふくよかな丸顔をもつ可愛らしい少年のような人でした。〔6 1〕

四．翌日も再びらいてう宅へ出現〔語り手／平塚らいてう〕

翌日の夜、また K はひとりしてやつて来た。前の日の歸りがけに今夜にも大阪へ歸るやうなことを云つてゐたから、折角来たのに今少し遊んで行つてはとか、今一度ゆつくり話しにいらつしやいかいふやうなことを云つたには云つたが、それは大した意味のないほんの御世辞に過ぎなかつたのだから少々意外だつた。何て眞正直な人だらうと思はずにはゐられなかつた。（中略）

其夜は前の日より多く話した。（中略）

それから S 社の事務所に電話を設けるやうにしよう。伯父に話して寄附させやうとか、時計の面白いのが二つあるから大阪へ歸つたらすぐ一つあなたに御送りするとかいふやうなことも云つた。

まだ今日で二度しか逢はないこの女から何でそんな物を貰ふ理由があるのか、物をやつたり、とつたりするやうな面倒なことの嫌いな私には何のことだかさっぱり分らなかつた。けれど折角やるといふものをぐずぐずいふにも及ぶまいと思つて、だまつてゐた。〔6 2〕

第二節 大阪での『青鞥』の手伝いと《陶器》の受賞

一．「人形の家」の劇評執筆の依頼〔語り手／富本一枝〕

平塚さんから手紙が来て青鞥でノラの批評をやるから、私にもその時大阪に来て上演中だつた松井〔須磨子〕さん達の『人形の家』を見てその批評を書くやうにといふことだつた。……とにかく私は道頓堀の劇場と川を隔てゝ建つてゐた河岸沿いの旅館で劇を観るよりさきに松井さんと島村〔抱月〕先生に會つてゐた。〔6 3〕

二．『青鞥』表紙絵「太陽と壺」の製作〔語り手／富本一枝〕

あれは、私が勝手に作り上げた、傳説から取つたのです。

世界の人間が最も、ほしがつてゐる者〔物〕は、不思議な國に藏されてゐる、眞黒な壺だつた。

その壺は、たつた一よりない。

その壺を得たものはどんな強さでも弱さでも自由に使い分ける事が容易に出来る。けれど、その壺がそれ以外に、どんな不思議な力を有つてゐるか誰一人、知つてゐるものがない。

只その眞黒な壺の上には、曰く、BLUE-STOCKING と記名されてゐるばかりで。〔6 4〕

三．異画会への《陶器》の出品と作品評〔語り手／黒田鵬心〕

構圖がやゝ散漫であるが、題材がいゝし、余の好きな畫である。〔6 5〕

第三節 大阪から東京への転居

一. 東京へ居を移す〔語り手／『多都美』〕

尾竹竹坡、國觀兩氏の長兄たる越堂氏は、從來大阪に根據を作り雄を稱したりしが、兩弟が東京に於て今日の名聲を博し、しかも文展に於ては兩弟に貳等優勝を得られたるに比し、頗る振はざるものあるを奮慨し……極力勉強以て月桂冠を得、長兄たるに恥ぢざらん事を期し……是まで竹坡氏の邸宅たりし下根岸八十一番地にト居したり。〔66〕

二. 転居通知に対する富本憲吉からの返信〔語り手／富本憲吉〕

東京は何うです。大和の今はステキです。只シャバンヌの様な柔い空に桃の花が一、砂の丘に咲く菜の花、麦のグリーン、わら東、ソロソロと咲き出した春の野の花一、実にキレイです。遠い処に円い青い山が、屏風のように見えます。……

東京は何うです。何日頃、大阪に帰りますか。五月の初め頃は富士川と云ふ法隆寺の東を流れる小川に、白い野バラがステキです。ご案内致します。

春になって大和の野も山も馬鹿にキレイですが、寂しい事は、前に同じです。〔67〕

三. 憲吉から《陶器》受賞の祝いに自刻版画が届く〔語り手／尾竹紅吉〕

富本氏よりお祝ひに下した黒い壺（木版）は、古代模様の絹しぼりの中に留めつける。…
…富本憲吉氏と、らつて^{ママ}う氏に手紙をかく。〔68〕

四. 『青鞥』紙上で憲吉の作品が紹介される〔語り手／田澤操〕

富本憲吉氏の木版やエツチング、山下新太郎、柳敬介、湯浅一郎、津田青楓氏など、新歸朝者の個人室がある。バーナード、リーチ氏の日本畫、伏見人形の掛圖は排つたもの皆輪郭が鉛筆でとつてある。南薫造氏の辭に、富本君の工藝美術の趣味は、今日の日本に於ける卑俗なるそれとは餘程離れて居る様に思はれます。遠く東京の地を距つて奈良の邊の自分の静かな家にあつて……嚴格な心持ちで模様を置き刺繡をこゝろみて居るのが窺はれる、ウ井リアム、モリスを最も尊敬して居る君の製作を見ては、又モリスのなつかしい藝術の深い味を多く思ひ出させます。とある。ハンギング、テーブルセンターに更紗模様をおき、ぬいとりをして居る。奈良とさへ云へば幽しい所なのに、藝術のかをりの高い土地なのに。何となくなつかしい氣分になる。〔69〕

第四節 青鞥社同人のある夜のミーティング

一. 青鞥社への紅吉の出没〔語り手／平塚らいてう〕

円窓のあるわたくしの部屋へ、〔はじめて会った〕このとき以来紅吉はよく訪れてくるようになり、社の事務所へも顔を出して、編集の手伝いや表紙絵やカットの仕事など、なんでも手伝ってくれるようになりました。久留米緋に袴、または、角帯に雪駄ばきという粋な男装で、風を切りながら歩き、いいたいことをいい、大きな声で歌ったり笑ったり、じつに自由な無軌道ぶりを発揮する紅吉。それが生まれながらに解放された人間といった感じで、眺

めていて快いほどのものでした。他の社員たちからも……可愛がられるので、人にもてることの好きな紅吉は、幸福のやり場のないうれしそうな顔をして、得意然としてあちらこちらに出没していました。〔70〕

二. 紅吉によるミーティングへの招待告知〔語り手／尾竹紅吉〕

桃色のお酒の陰に、やるせない春の追憶を浮べて春の軟い酔を淡い悲しみで、それからそれに、覚めて行く様に、私達は新しい酒藏から第二の壺を運び出した。そして私達の仕事に異大な祝福の祈を捧げ乍ら青いお酒を汲み合ひたいと思ふ。来る〔五月〕十三日午後一時から紅吉の家で同人のミーチングを催します。紅吉は、黄色い日本のお酒とそして麥酒と洋酒の一〔、〕二種とすばしこやのサイダを抜いて待つて居る。……紅吉は、その日、その夜の來るのを、子供の様に數へて待つて居る。さよなら。〔71〕

三. その夜の「抱擁接吻それら歡樂の小唄」〔語り手／尾竹紅吉〕

私は、どうしたらいいのだろう。抱擁接吻それら歡樂の小唄は、どんなになる事だろう！？。……私の心は、全く亂れてしまつた、不意に飛出した年上の女の為めに、私は、こんなに苦しい想を知り出した。少年の様に全く私は囚はれてしまつた。……けれども……あゝ私は毒の有る花を慕つて、赤い花の咲く國を慕つて、暗い途を、どこ迄歩ませられよう。……DOREI になつても、いけにへとなつても、只 抱擁と接吻のみ消ゆることなく與えられたなら、満足して、満足して私は行かう。〔72〕

四. らいてうから紅吉に宛てた手紙〔語り手／平塚らいてう〕

私はあなたを抱くことを、接吻することを欲してゐる、けれど孤獨のたのしさ、深林の静けさを更に欲してゐる。さらば、さらば。〔73〕

五. 紅吉かららいてうに宛てた返信〔語り手／尾竹一枝〕

涙が膝の上に落ちてゐます。……

私は遂々黒い棒を引かれてしまつた。あなたから、あなたから。

けれど私の命は短かつた。私は、五月十三日の夜、夢のように實現した「私」をどんなに不安に思つたろう。その不安から生れたおどおどした悦びどんなでしたか。恐らくあなたはそれを知つては下さりますまい。……

ピストルで打たれた紅吉は今死にます。

けれどあなたを恨みはしません。……

研究會にはもう出ません、私は又二度とあなたに逢ひますまい。逢へば泣きます、涙がにぢむ。眼がはつきり見えない程あたりがうるんでゐます。……

さよなら、さよなら。あなたの好きな生活をいつ迄も送つて下さい。

阿部先生にも、生田先生にも、最う御目にかゝれますまい。……〔74〕

第五節 「メイゾン鴻の巣」で「五色の酒」を飲む

一. 美少年が「鴻の巣」で飲み「圓窓」を訪ねる〔語り手／「編輯室より」『青鞥』〕

らいてう氏の左手でしてゐる戀の對象に就いては大分色々な面白い疑問を蒔いたらしい。或る秘密探偵の話によると、素晴らしい美少年ださうだ。其美少年は鴻の巣で五色のお酒を飲んで今夜も又氏の圓窓を訪れたとか。〔75〕

二. 『青鞥』同人が「五色の酒」に酔う〔語り手／『國民新聞』〕

先頃紅吉が異畫會に出品した「陶器」と題する畫が百圓に賣れた時彼女は勿體ないから皆で御馳走を喰べやうとて四方の同人に葉書を飛ばせ赤い酒青い酒を重いものから上へ上へと五色に注ぎ分けて飲み合つた……さうして其洋盃に透明る色を飽かず眺めた面々は……焼け付く様な酒に舌を鳴らしつ其香に酔ふて思ふさま享樂したのである。〔76〕

三. 一枝の酒好み〔語り手／バーナード・リーチ（中山修一訳）〕

彼〔富本憲吉〕はいった。「それ以外のことではそのようなことはないが、酒を飲むことだけは、どうしても彼女〔一枝〕にかなわない!」。〔77〕

第六節 吉原「大文字楼」にて花魁と遊ぶ

一. 父親竹坡の女性観〔語り手／尾竹親〕

理論体系をもたぬ竹坡にしてみれば、女を愛する——ということは、即物的な行為であつて、女を理解することは、同情することでも、百の饒舌を吐くことでもなく、目の前にある肉体としての女の実在を、行為として、しかも責任とともに抱擁することであつたのだろう。〔78〕

二. 叔父竹坡による色里紹介〔語り手／富本一枝〕

おまえたち偉そうに婦人の解放とか何とかいつているが、吉原というところには非常に氣の毒な——解放しなければならない女がたくさんいる、そこを知りもしないで偉そうなことをいつているのはおかしい。平塚さんにぜひとも——今で申す見學をなさいませんか、ということで、平塚さんも見たことがないし、ぜひ行きたいということになつて、五、六人で参りました。このおじは……遊ぶことでも相黨だつたようです。そのおじの行きつけのお茶屋におじが話しておいてくれましたから、吉原でも一番格式の高いうちに案内されて、たいへん丁寧に扱われました。〔79〕

三. 女三人で大文字楼に登る〔語り手／『國民新聞』〕

七月の『青鞥』には雷鳥が左手で戀してるとか美少年を何うしたとか云ふ妙な事がある〔。〕其美少年と云ふのは夕暮に屢々白山邊を引張つて歩いて居るほんに可愛らしい學生帽を冠つた十二三の子供だ〔。〕それは兎も角此間の夜雷鳥の明子と尾竹紅吉（數枝子）中野初子の三人が中根岸の尾竹竹坡氏の家に集まつた時奇抜も奇抜一つ吉原へ繰り込まうぢやないかと女だてらに三臺の車を連ねて勇しい車夫の掛聲と共に仲の町の引手茶屋松本に横著けにし箱提灯で送らせて大文字楼へと押上り大に色里の氣分を味つた。〔80〕

四. 花魁「栄山」と一夜を過ごす〔語り手／平塚らいてう〕

ある日、紅吉が、叔父の尾竹竹坡氏からの話として、吉原見学の誘いを突然もちこみました。尾竹竹坡氏は、当時の日本画壇に異彩を放っていた尾竹三兄弟のひとり、なかでも天才的ということで名を馳せている人でしたが、紅燈の巷に明るい通人というか粋人というのか、そういう点でも知られていました。……竹坡氏は、姪の紅吉を通して、青鞥社やわたくしへの親近感というか、好意をもっていられたようで、その一つのあらわれが吉原見学の誘いともなったのでしょう。……そこは竹坡氏のお馴染みの妓楼で、吉原でも一番格式の高い「大文字楼」という家でした。「栄山」という花魁^{おいらん}の部屋に通されましたが、きれいに片付いた部屋で、あねさま人形が飾られており、それが田村とし子の作ったあねさまだということを知って、紅吉はひどく興味をもち、田村さんを誘えなかったことを残念がりました。……おすしや酒が出て、栄山をかこみながら話をしたわけですが、栄山の話によると、彼女はお茶の水女学校を出ているということでした。……その夜、わたくしたち三人は花魁とは別の一室で泊まり、翌朝帰りました。〔81〕

五.『萬朝報』の記者が紅吉宅を訪問する〔語り手／『萬朝報』〕

平塚明子、中野初子、尾竹數^{タツ}〔一〕枝などゝ云うふ青鞥社の女豪連が、二〔、〕三日前竹坡畫伯を案内にして吉原の大文字樓に豪遊を試みたと聞いた、何しろ珍らしい事である、所謂『新しい女』の吉原觀も面白からうと、尾竹兄弟を叔父さんに持つてゐる數枝女史（廿二）を下根岸八一の越堂氏方に訪うて見る。〔82〕

六.『萬朝報』の記者に紅吉はこう受け答える〔語り手／尾竹紅吉〕

……参るには参りました、私は少い時叔父（竹坡）に伴れられて吉原に泊つた事がありましたが、あの上草履のよかつたのを思ひ出して是非伴れてつて下さいと頼んだのです……私の花魁は榮山さんと云ふ可愛い人でしたよ、「女學生の昔が思出されて懐かしい」と云つて大切にしていられ、今日手紙迄貰ひました、私は眞實に身受がしたくなり茶屋へ歸つてから聞きますと千兩は掛かると云ふんです……若し男だつたらと男が羨ましくなりました、浅草の銘酒屋もよう御座いますネ、今度は呼べたら上つて見やうと思ひます。〔83〕

第七節 青鞥社内外からの非難の嵐

一. 社内からの紅吉批判〔語り手／平塚らいてう〕

「新しい女、五色の酒を飲む」「新しい女、吉原に遊ぶ」といった思いがけぬ噂が、新聞に出て、しかもその張本人が紅吉だという、社内からの批判が起こったのです。

すでにわたくしたち「青鞥」に集う女の上には、「新しい女」という称号が与えられて、時のジャーナリズムはことあるごとに、わたくしたちの行動に目を光らせていたときでした。〔84〕

二. らいてうへの攻撃と脅迫状〔語り手／平塚らいてう〕

「放蕩無類」の青鞥社に対する世間の非難攻撃は、とりわけわたくしに対して強く、だれの仕業か、わたくしの家には石のつぶてが投げられたりしたものでした。……なにか得体のしれない男が面会を強要して動かなかつたり、「どこそこで待っているから出てこい、黒シ

ヤツ組より」などという脅迫状も舞いこんで来ます。〔85〕

三．紅吉の母親の心労〔語り手／富本一枝〕

……「新しい女」で世間が非難しはじめたときなど、母は、世の中に申しわけないという
氣持が先に立つて心をいためていたようでございます。ことに、親戚などに對してはそれこ
そ首を縮めておりました。私が入りするたび近所の人は、そら、「新しい女」が歩いて来
た、という騒ぎでしたからずいぶん母は困ったようです。〔86〕

四．晩年の一枝の釈明〔語り手／富本一枝〕

非難を受ける種をまいたのは私だということで、社内でもいいかげん非難があつたよう
です。五色の酒と吉原見學が非難のキッカケをつくつたのですが、話せば何でもないことな
です。「メーゾン鴻の巣」へ廣告をもらいに行つたとき、注ぎわけて見せてもらつた五色の
酒の美しさを編輯後記に書いてだけで、のんでいないのです。それではやじること出來な
いし、非難の材料にはなりませんから新聞はおかまいなしにガアガア書きたてたのです。一
行の訂正もしてもらえず、日毎に大変な騒ぎになつて、浮薄なこつけいな姿で日本全國に宣
傳されたというわけです。そうなればなるほど、社内の批判は当然私をめぐって激しくふり
かかつてきました。〔87〕

第八節 ある日のらいてうと紅吉の愛の再燃

一．窮地に立つ紅吉〔語り手／平塚らいてう〕

私共三人が、見ることの一寸出來ないものを覗いて見たさのふとした好奇心から吉原に
一夜を明したといふことがクリスチヤンの白雨を少なからず憤慨させた。

「君達は吉原に行つたさうだ。随分思ひ切つた眞似をしましたね。私は君達が行つた深い
理由は知らないが、何だか自分が侮辱されたやうで悲しかつた。さうしてたまらなく不快だ
つた。云々」

又「青鞥」を眞に敬愛を以て迎へられるやうな雑誌にしたいと常に言つてゐる同氏は同じ
手紙でこんなことも書いてよこした。

「此頃の青鞥には著しく不眞面目な、街氣的な色が見えて來た。創刊黨時に於ける如き眞
面目さが無い。……従て敬意は拂はれぬ。……品位も威嚴もない兒に育てたことを悲しんで
おく。」

これが又ひどく紅吉の心を害した。〔88〕

二．紅吉の左腕に包帯が〔語り手／平塚らいてう〕

「見せて、見せて、ね、見たい、見たい。」

私の心は震へた。紅吉は戀の爲めに、只一人を守らうとする戀の爲めに……我が柔かな肉
を裂き、細い血管を破つたのだ。……

長い繃帯が一卷一卷と解けて行く。……

私は腸^{はらわた}の動くのを努めて抑へた。そしてちつと傷口を見詰めながら、眞直に燃える蠟燭
の焰と、その薄暗い光を冷たく反對する鋭利な刃身と熱い血の色とを目に浮かべた。〔89〕

三．事務所の黒板に書かれた紅吉の詩〔語り手／平塚らいてう〕

午後ふたりは萬年山の事務所へ行く。……紅吉は疲労に耐へないと言ふ風に縁側に長大な身體を横へた。

が、暫くしてから、ふと立つて黒板にこんなことを書く。

離別の詩

あたいの人形に火がついた

赤いおべべに火がついた

いとしや人形は火になった

いとしや人形が火になった

人形を買つて五十八日目の夕 紅吉

らいてう様〔90〕

四．ふたりの記念すべき夜の残照〔語り手／平塚らいてう〕

五十八日目の夕？

「さうだ、さうだ。」

五十八日目の夕！

ふたりの記念すべき五月十三日の夜から數へて。

私の心はまたもあのミイチイングの夜の思ひ出に満たされた。

紅吉を自分の世界の中なるものにしようとした私の抱擁と接吻がいかに烈しかつたか、私は知らぬ、知らぬ。けれどもあゝ迄忽に紅吉の心のすべてが燃え上らうとは、火にならうとは。〔91〕

五．『國民新聞』に「所謂新らしき女」の連載がはじまる〔語り手／平塚らいてう〕

『國民』に「所謂新しい女」が掲載されだし事はこの日からのことだつた。

紅吉は其記事に就いて眞面目に心配してゐるらしい。……

私はあらゆるものを眞面目に考へることの出来る紅吉を、新聞の記事の虚偽を以て満されてゐるのを今更のやうに驚く紅吉を心に羨んだ。そして三〔、〕四年前の〔塩原事件（煤煙事件）のときの〕自分を目の前に見るやうな氣がした。

この紅吉が、この率直な、子供のやうに單純な、疑ひ深くない紅吉が今後世間の色々な事に遭遇して、次第に信ずるといふことを失つて行くのかと、私は妙に悲しくなつた、淋しくなつた。

……内部を知る在京の社員はいゝとして眞面目な愛すべき地方社員のとへ一人にでも無益な不安を抱かせるのは罪だと思つた。實際目下青鞥社は分裂の必要見る丈の程度にさへまだ發展してゐないのだから。

だといつて私は紅吉を咎めやうとはゆめさら思わない。……どうしてこれ位の些少の過失？を以て紅吉を咎める氣になれやう。たとえそれがいかなることであらうとも彼の長所、美點を枯すやうなことは斷じてしたくない。……〔92〕

六．紅吉からの退社の申し出とらいてうの慰留〔語り手／平塚らいてう〕

「退社してお詫びします。」

「馬鹿」

私の少年よ。

らいてうの少年をもつて自ら任ずるならば自分の思つたこと、考へたことを眞直に發表するの何の顧慮を要しやう。みづからの心の欲するところはどこまでもやり通さねばならぬ。それがあなたを成長させる為めでもあり、同時にあなたがつながらる青鞥社をも發展させる道なのだ。〔93〕

七. 肺の病への紅吉の不安〔語り手／平塚らいてう〕

紅吉は一月ばかり前からどうかすると柄になく力弱い、消え入りさうな咳をした。よく頭痛で倒れもした。動悸の激しいことも、寝汗をかくことも私は知つてゐないぢやない。

（中略）

「ねえ、もうこうしてゐるのも今日だけのよな氣がしていけない。」

首を上げて黒板の離別の詩を一寸見た、がすぐに又私の方に寄り添つて眼を落した。

「何故今日だけ。」と私は故と詰問した。

「明日診察を受けるでせう……すると、どつちかに極るでせう、ね、どつちかに。」……
「けれどもし何だつたらもう逢はない。逢へない。」

私は紅吉の大きな手を無言で握つた。

「私も明日病院へ行く。院長に一度逢ひたいことがあるから。丁度いゝ、診断の結果はともかく總て私が訊いて上げる」。〔94〕

八. らいてうの愛の衝動行為〔語り手／平塚らいてう〕

「淋しい？ どうした。」と言ひざま私は兩手を紅吉の首にかけて、胸と胸とを鼻と押し付けて仕舞つた。

「いけない。いけない。」口の中で呟いて顔を背けたが、さりとて逃げやうとはしない。

（中略）

「ね、いゝでせう。あなたが病氣になれば私^{わたし}もなる。そしてふたりで茅ヶ崎へ行く。ね、私の好きな茅ヶ崎へ。……」紅吉は久しく頭を上げなかつた。

あたりが暗くなる頃、萬年山を出た。〔95〕

九. 帰宅後らいてうは「同性の恋」に思いを巡らす〔語り手／平塚らいてう〕

昨年十一月三十日を始めとして今日まで、手紙廿九通、ハガキ卅八。

あの忘れられない十三日の夜、あの夜の後、始めて来た手紙と速達の朱印あるもの二つ三つとを撰んで再び讀んだ。

手紙を見詰めて座つたまゝ其夜はとうとう〔う〕明けた。同性の戀といふやうなことを頻りに考へて見た。〔96〕

第九節 ふたりの「同性の恋」の末路

一. 茅ヶ崎の南湖院での紅吉の療養生活と訪問者たち〔語り手／平塚らいてう〕

紅吉は茅ヶ崎の南湖院でしばらく療養生活を送ることになり、やがてわたくしも「青鞥」八月号の編集をすませて、紅吉を見舞いかたがた、茅ヶ崎へでかけました。……八月の半ばを過ぎたある日、わたくしたちは南湖院の応接間で、二人の未知の男客を迎えました。その一人は、[今後の『青鞥』の発行と発売を委託する件で相談にやってきた] 当時文芸図書の出版社として有名な東雲堂の若主人で、詩人でもあった西村陽吉さんです。……[もうひとり、たまたま藤沢駅で知り合い、西村さんに連れられてやってきた] 骨太で、図抜けた長身に、真黒な長髪をまん中からわけた面長の青白い顔が、異様なまでに印象的な青年で、奥村博と名乗りました。……なんの装飾もないがらんとした休日の病院の応接間で、[青鞥社の社員で、いまだ南湖院との縁が切れず、東京と茅ヶ崎のあいだを行き来していた] 保持[研子]、紅吉、わたくしの三人が居並ぶテーブルをへだてて、最初に私を見、眼と眼があった瞬間、心臓を一突きに射ぬかれたようなせんりつが走り、青年になってはじめて、かつて覚えぬ想いで、ひとりの女性を見た——と、奥村はのちに述懐しました。わたくしもまたこの異様な、大きな赤ん坊のような、よごれの無い青年に対して、かつてどんな異性にも覚えたことのない、つよい関心とその瞬間生まれたのでした。[97]

二. 紅吉から奥村博に宛てた手紙（1）[語り手／尾竹紅吉]

不吉な予感が私を襲って、私は悲しい、恐ろしい、気遣わしいことに今ぶつかっているのです。それがはっきり安心のつくまであまり面白くもない生活を送らねばなりません。そして幾日かののちに私は生まれて来るのです。だがそれまでは私は淋しい、私は苦しい。

広岡[らいてう]がぜひあなたに来るようにと、そして泊まりがけです。待っています、いらっしゃいまし。

八月十九日 しげり [紅吉] [98]

三. この手紙についてのらいてうの感想 [語り手／平塚らいてう]

一度会ったばかりの奥村にこんな手紙を出したとはわたくしも保持さんもまったく知らないことでした。（知ったのは三十数年も後に奥村が『めぐりあい』という自伝小説を書いたときです。）手紙の最後には、あたかもわたくしからの伝言であるかのような一節があり、紅吉の病的な神経の動きの鋭さ、速さ、とくに嫉妬の場合の複雑さにわたくしは驚くよりほかありませんでした。[99]

四. りいてうが雷鳴の夜に奥村と寢床を並べる [語り手／平塚らいてう]

二、三日して写生の帰りだといって、スケッチ箱をもった奥村が、突然わたくしの宿を訪ねてきました。いま、[馬入川が海に流れ込む河口一帯の]「南郷」で描いたというスケッチ板の松林の絵を見せてもらいながら、わたくしはふと、『青鞥』一周年記念号の表紙をあらたに、この人にかいてもらいたい気になり、さっそく頼んだのでした。それから、二、三日した日の夕方近く、その表紙図案をもって見えました。わたくしは奥村を連れて、南湖院に行き紅吉と保持さんを誘って海岸に立ち並ぶ海気室に行き、蒼い海と美しい夕映え雲を眺めながら四人でしばらく話しました。紅吉が柳島に小舟を出そう……といいだしたのがもとで、保持さんは親しい友だちの小野さんという入院患者の……元気な青年を誘って、五人いっしょに舟に乗り込みました。……月夜の馬入川の舟遊びはみんなに時を忘れさせるほ

どでした。そして奥村は藤沢へ帰る汽車にのりおくれてしまいました。歩いて帰るという奥村を保持さんはしきりと引きとめ、自分がいつも寝起きしている病院の松林の奥にぼつんと建った一軒家……に奥村を泊めることにし、保持さん自身は病院のだれかの部屋へ、紅吉は自分の部屋へ、そしてわたくしは自分の宿である獵師の家へ、それぞれ別れて引き上げて行きました。こうしてみんなが寢床についたころ……またたく間に烈しい雷鳴となって……とても眠れそうにありません。……すさまじい稲妻と雷鳴に怯えているであろう気の弱そうな若者を想うと……いよいよ寝るどころではありません。とうとう起き出したわたくしは、宿のおかみさんに提灯をもって付き添ってもらい……奥村を迎えにいきました。……その夜、大きな緑色の蚊帳のなかに寢床を並べて朝を迎えたときから、奥村に対するわたくしの関心は、しだいに関心以上のものへと、急速に高まってゆくのでした。蒸し暑い夏の夜のしばしのまどろみのあと、東の空の明るみはじめた海岸に出て、指をからませながら二人で寄りそって……浜辺を歩くとき……満ちあふれた生命の幸福感でいっぱいになっていました。こうして、奥村がわたくしの宿で一夜を過ごしたことは、夜明けを待ちかねてわたくしの宿の様子を窺いにきた紅吉のいちはやく知るところとなり、わたくしの愛の独占をのぞんでいた紅吉に、大きな衝撃を与えないではいませんでした。〔100〕

五. 紅吉のらいてうへの未練と恨み〔語り手／尾竹紅吉〕

又私自身もよくあれだけの場所を押通したと感心してゐました。けれども私はそれだけにまだ充分未練をもつてゐた。……〔立派に育てようと誓った子供を養育院へ送ろうと計ったとき〕あなたは、其の時すでに私を捨てゝ、そして私を偽つてしまつたのです。そんな罪の深い無慈悲な言葉があなたの口から出たと云ふことを到底信じることが出来ません。自分獨りの満足の為めに、自分獨りのさもしい欲望の為めに、あなたは、誓つて育てゝ來た子供迄捨てると云ふ、そんな事がよく云へたものですね、……私があなたを歸へした後で少なからずあなたを可哀そうに思つたことだけ知つてゐて下さい、あなたが私を偽つてゐることもこの手紙で少しは反省して見て下さい。そしてそれでも私に對してあなたの下さる愛が眞實の愛であるかを最う一度考へて下さい。〔101〕

六. 紅吉から奥村に宛てた手紙（2）〔語り手／尾竹紅吉〕

あなたにはもちろん何の罪もないのです。罪はないがきっとこの復讐はするつもりです。私はあなたによって生きることの出来ない傷を受けたのです。私の前途は暗くなった。広岡〔らいてう〕を私は恋しています。あなたはあんまりよくも知らない女の家泊まった。それで平氣でいた。私は近いうちにあからさまにこの間のことをある場所で書き出すつもりです。きっと書きます……。〔102〕

七. この出来事についての奥村の感想〔語り手／奥村博〕

事実とすればしげり〔紅吉〕の立場は気の毒だと思った。だが、彼には女どうしの恋愛というものがどんなものか想像もつかなかつた。しかし……しげりは《あなたはよくも知らない女の家泊まって平氣でいた》などと人を責めるが……その^{もと}因を作つた者は結局しげり自身ではないか、と彼はそう考えるとき、それが自分ひとりの責任とばかりは思われなかつた。〔103〕

第一〇節 社内での人的交流

一. 江戸っ子の小林哥津〔語り手／富本一枝〕

青鞥社で最年少者は野枝さんと歌津ちゃん^{ママ}と私だつた。この三人はそんな意味でわりかた一緒になつてよく遊びもし、話合ひもした。歌津ちゃんは江戸ツ子だつた。黒襦子の襟をかけた黄八丈の着物に博多の意氣な柄の帯をしめることが得意でもあつたし、ぴつたり似合つてもゐた。……泉鏡花のものが一番好きで、永井荷風の作品も好きだつた。……いなせなところが有つて、どうかすると横ずわりになつて、たんかでも切りさうで、横櫛お富といふ仇名をつけて、私などその名で歌津ちゃんを呼んだことが多かつた。〔104〕

二. 図書館で伊藤野枝と出会う〔語り手／富本一枝〕

東京にきて上野の図書館に通うようになって見て女の人が多いので安心しました。伊藤野枝さんとは、偶然図書館で一緒になりました。その時代は図書館は女の人にとって勉強するのに大へんよい場所で、読みたいものがたくさん揃っていました。〔105〕

三. 野枝へ向ける競争心〔語り手／富本一枝〕

私は、小さい時から人に負けるのが嫌いでした、道を歩いていても人に先を越されるのが、とてもいやでした。……ちょうど、上野の図書館に通っていた頃です。私が歩いていると、反対側の道路をいつもきまって、足ばやに私を追ってくる女性が一人いるんですね。私も負けるのが癪ですから、一生懸命歩きました。あとで知ったのですが、その人が、私より少しあとで青鞥社に入った伊藤野枝さんでした。野枝さんも、なかなか気の強い負けず嫌いな人で、非常にライバル意識の強い女性^{ひと}でした。〔106〕

四. 野枝に「同性の恋」の顛末を打ち明ける〔語り手／尾竹紅吉〕

私は本当に、死んでしまはうと思ひました。えい、本当に死ぬ積りでした。……私の大切な愛にヒズが入つたんですもの、もう何うしたつて直りつこはないんです。〔107〕

五. らいてうに連れられて紅吉が田村俊子の家を訪ねる〔語り手／「編集室より」『青鞥』初対面の上野〔葉子〕氏と紅吉を連れてらいてうが萬年山を出たのは追分町の通りに綺麗に明りが入つてゐた時です。……田村〔俊子〕さんのお土産を梨に決めて友禅のきれいな風呂敷に買つて、林町の通りを真直に中谷の墓地に行きました。……田村さんの家は墓地の横なんです。……

いつか浪汗洞〔瑯玕洞〕でみたことの有る様な姿の「あねさま」が本箱と床の間に踊り出す様に飾つてあるのです。紅吉はいきなり「紅吉にあねさまを一つ作つて下さいね」と初めて會つた田村さんにねだり出したのです。〔108〕

六. 田村から送られてきた詩「逢つたあと」〔語り手／田村俊子〕

紅吉、／おまいはあかんぼ————だよ。／この————の長さは／おまいの丈の長さと、／おんなじ長さ、さ。

紅吉、／おまいの顔色はわるいね。／まるで、すがれた蓮の葉のやうだ。／Rのために腕を切ったとき、／それでもまつかな、／赤い血がでたの、紅吉。

紅吉、／おまいのからだは大きいね。／Rと二人逢ったとき、／どつちがどつちを抱き締めるの。／Rがおまいを抱き締めるにしては、／おまいのからだは、／あんまりかさばり過ぎてゐる。

紅吉／おまいの聲はとんきよだね。／けれど、金屬の摺れるやうな聲だ。／おまいの、のつけに出す聲は、／火事の半鐘を、／ふと、聞きつけた時のやうに人をおどろかせる。

紅吉、／でも、おまいは可愛い。／おまいの態のうちに、／うぶな、かわいいところがあるのだよ。／重ねた両手をあめのやうにねぢつて、／大きな顔をうつむけて、／はにかみ笑いをした時さ。[109]

七. 田村に連れられて長沼智恵子が紅吉の家を訪れる〔語り手／富本一枝〕

〔訪問後の長沼からの手紙には〕「あなたの画は、青草を嚙むような厭味なところがあるが、あなたは、俊子さんのいうとおり、大きな、邪気のない赤ん坊だ。」と書いてあつた。……長沼さんは見かけよりずっと強靱なものを内にしまつていた。童女のようにあどけなく、美しく澄んだあのつぶらな眼は、おのれひとりを愛した眼である。気質も肌合もまるでちがつてはいたが、田村さんにもおなじものが感じられた。[110]

八. 青鞥研究会の再開〔語り手／平塚らいてう〕

九月号から発行経営に関する一切の実務を東雲堂に一任することになったわたくしたちは、今までの雑務に注いでいた力を編集の充実にあてる一方、久しく休んでいた研究会を、十月から万年山の事務所で再開することにしました。「青鞥」研究会は、この四月からはじめたもので、内容は「モーパッサンの短編」生田長江先生、「ダンテの神曲」阿部次郎先生で、毎週火曜日と金曜日の二回講義が行なわれておりました。[111]

九. 『青鞥』創刊一周年の祝宴〔語り手／平塚らいてう〕

尾竹竹坡さんがこの家〔鶯谷の料亭「伊香保」〕の常連であつたことから、竹坡さんの御紹介でここを使ったのでした。そのため、竹坡さんからあらかじめ申しふくめられていたのでしょうか、会のあとでわたくしが支払いをしようとしても、どうしても受けとりません。竹坡さんがこうした好意をわたくしたちに示してくれたことには、紅吉との関係だけでなく、世間の非難のなかに立つ青鞥社を後援してやろうという、竹坡さんらしい気骨のあるお気持ちもあつてのことでしょう。[112]

一〇. 文展への出品ができず〔語り手／尾竹紅吉〕

描きたい、描け、描こうと、これだけの動きが今月の文展製作にピリピリしてゐたのです。今年の春からこつち私は描きたい氣分でそつちの神経はどれもこれも尖つてゐました。

文展なんか別段どうでもないのです。……未練と執着のあつたと云ふことは、あんなに緊張してゐた描きたい、描け、描こうと云ふ氣分が不意に病氣なんかの爲めに破壊されてしまつたからなんです。各段文展に出せなかつたからと云ふ理屈のもちやないのです。[113]

一一．思いがけなく長沼に会う〔語り手／尾竹紅吉〕

三〔、〕四日前でした、思いがけなく長沼〔智恵子〕さんに逢ったのです。その時長沼さんは近頃は只畫が描きたい、描きたい、今度はきつと描けるでしよつて、しきりに話してゐらした、私は其の時、それだけの氣分を倍の倍にして羨やましく思いました。

そんな様に凡てが充實しきつて、そして出来上つた作品はどんなに尊いものでしょう。

私達にしたつて、そうして出来上つた作品の前に面とむかつたら、どんなに氣持が好いでしょう。私は一人でも多く充實した、自分を信じた、そして露骨な「作品」を作り出す人が増して行くことを待つてゐます。〔114〕

一二．神近市子が入社し紅吉に会う〔語り手／神近市子〕

尾竹一枝は久留米^{くろみ}緋^{めがすり}にセルの袴で、おそらく子どものときは私のようなトム・ボーイだったろうと思われた。それがそのまま大きくなった感じで、顔色は浅黒く、よく太って背丈も高かった。私は一目でこの人が好きになり、彼女もいちばんよくみんなとの紹介の労をとってくれた。

この日以来、私たちは生涯の盟友になり、強い友情で結ばれた。彼女は当時から紅吉というきれいな号をもっており、まだ十八^{まは}〔一九〕歳だが、才氣に富み、親切な人だった。〔115〕

一三．神近の後年の回想〔語り手／神近市子〕

また、尾竹紅吉のことですが、平塚〔らいてう〕さんと同性愛だったというお話があります。それで奥村博さんの出現かなにかで、尾竹さんが平塚さんに反感をもつことがあるんです。そのときに、精神的な同性愛というようなものでしょうね、尾竹さんが私に密着していたことがあったのです。で、あそこに来いとか、あそこに移ってこいとか、だから私は彼女の家に、一ヶ月ぐらい泊まっていたことがあります。〔116〕

第一一節 社外での紅吉の姿

一．紅吉の姿が江口渙の目に止まる〔語り手／江口渙〕

婦人の自由と解放をさげんで青鞥社にあつまった平塚らいてう、伊藤野枝、尾竹紅吉（いまの富本一枝）など、当時のいわゆる新しい女が〔万年山勝林寺の〕本堂をかりて週一、二回ずつ近代欧州文学や、近代思潮、近代美術の講座をひらいていた。講師は生田長江、高村光太郎、阿部次郎などであった。そういう講座のおわったあとでもあったろうか。彼女たちが本郷の帝大前の大通りを三丁目へ向かって、まるで新しい女のデモンストレーションみたいに一団となって歩いていくのをよく見かけた。中でも、尾竹紅吉が、あの大柄のからだで、カンカンと日の照る中を高下駄でがらがら歩く姿を、いまでもはっきりおぼえている。〔117〕

二．宮本百合子も紅吉を目撃する〔語り手／宮本百合子〕

女子大学の生徒だの、文学愛好の若い女のひとたちの間に、マントを着てセルの袴をはく風俗がはやった。とともに煙草をのんだり酒をのんだりすることに女性の解放を示そうと

した気風があった。二つ三つのちがいではあったが、そのころまだ少女期にいた伸子は、おどろきに目を大きくして、男のように吉という字のつくペンネームで有名であった「青鞥」の仲間の一人の、セルの袴にマントを羽織った背の高い姿を眺めた。その女のひとは、小石川のある電車の終点にたっていた。[118]

三．小野賢一郎の後年の回想〔語り手／小野賢一郎〕

新しい女といふ言葉もその頃からやかましくなつた、平塚らいてう、尾竹紅吉等の青鞥社一派の運動は相當に珍しいものであつた。當時はカフェ、バーといふものも珍らしかつた、文士連中は鎧橋の近くに出来たメゾン鴻の巣でパンの會など開いてうれしがつてゐた頃で、バー、カフェの珍しいものに、青鞥社の人々が結びつけられて、五色の酒——即ち新しい女といふやうに世の中の人に見られて來た。私は、その頃根岸の御行の松の近くに住んでゐたので、尾竹紅吉氏の近所であつたから、よく行きもし、お父さんの越堂氏ともよく會つたものである、この人々もカフェ、バーにも相當に行つたには違ひないし、また私も一緒に行きましたが、今日から考へると何でもないことであるが、當時としては、婦人が堂々と思惑を發表したことが如何に世間を驚かしたのか、また五色の酒や紅茶コーヒーが如何に珍らしがられたのかを推しはかることが出来る。[119]

四．『近代思想』の創刊〔語り手／荒畑寒村〕

天皇の死とともに明治時代は終り、改元して大正となった。……大正元年〔一九一二年〕の十月一日にやっと初号を出した。誌名は『近代思想』……三十二ページ定価金十銭という薄っぺらなものであつたが、とにかく大逆事件以降、沈黙雌伏を強いられていた社会主義者が運動史上の暗黒時代に、^{かす}微かながら初めて公然とあげた声である。[120]

五．大杉栄と荒畑寒村が紅吉宅に上がる〔語り手／荒畑寒村〕

ある時、私〔荒畑寒村〕と上野から根岸の方を散策した際、青鞥社同人の尾竹紅吉の家を見つけると、彼〔大杉栄〕はいつもの流儀で臆面もなくこの未知の女性を訪問した。そして画室に迎えられた彼は、空腹を訴えて飯のご馳走になつた上、「あなたは知らぬ男にでも、空腹だといえ飯を出してくれるが、もし性欲に餓えていたと言ったらどうしますか」と質問した。彼女が返答に困っていると、食欲も性欲も生理的には同じじゃないかと追及して、^き生まじめな紅吉女史をからかって面白がつた。[121]

六．大杉から無政府主義の教授を受ける〔語り手／富本一枝〕

その頃大杉〔栄〕さんとおつきあいしていましたから大杉さんが尋ねてみえるたびに、無政府主義やクロボトキンのことをうかがつたりしていました。大杉さんは私のぼんやりさをなんとかしてやりたいとされたようです。幸徳秋水の大逆事件のことも、大杉さんからきいて……。そのとき、私たちの自由も、進歩も、それをはばんでいるものをとりのぞかない限りどうすることも出来ないのだときかされたことは、なんといつても、それからあとの自分の考えの基底となつてきているような氣がします。[122]

七．朝倉文夫と「新しい女」たち〔語り手／朝倉文夫〕

そのころ、青鞥社の新しい女性ともよく交際をしていたが、思えばおもしろい時代だった。私の住んでいた谷中の天王寺町には田村松魚君が住み、その夫人が有名な田村俊子さんだ。また私の隣りには尾竹竹坡、国観という日本画家の兄弟とその長兄の尾竹越堂の三人を育てた高橋大華という先生が住んでいたの、私は高橋家や尾竹越堂さんのところへもよく遊びに行った。その越堂さんの娘が一枝さんすなわち紅吉で、そこへ神近市子、伊藤野枝などという女史連が往来していて、自然知り合いになった。

ある日、越堂さんから招かれて『きょうは、“新しい女”に酌をしてもらおう』ということで、紅吉、市子、野枝の三女史が青鞥社の出版事務をしているのをつかまえて、越堂老が『青鞥社の事務は青鞥社でやれ、せっかく客を招いたからもてなせ』と大^{だいかつ}喝したもので、大いにご馳走になったのだが、越堂さんは『芸者の酌などというものはつまらんもので、“新しい女”のお酌で飲む酒は天下一品』だとひどくごきげんだった。おそらく、この人たちのお酌で飲んだ人はあまりいないだろう。[123]

第一二節 青鞥社退社の意向を表明する

一. 『東京日日新聞』の記者小野賢一郎の青鞥社への関心 [語り手／小野賢一郎]

ノラやマグダが問題になる、新しい女、覚めたる女、自覚した女、新時代の女、いろいろの言葉を以て一部の婦人と呼んでゐる、中でも青鞥社のお嬢さん達が一番世間の注目を惹いてゐる、夫れはお嬢さん達のあられもない鴻の巣で五色の酒を呑む、吉原へ遊びにいつて華魁と御馴染みになる、浅草十二階下の白首と御友達になると言ふやうな噂がパツと立つたから愈問題となつて同社の機関雑誌「青鞥」が俄に賣れ出す一方には古風な家庭で娘達に「青鞥」の購讀を禁ずるといふやうな有様となつた、青鞥の女と言へば毎日酒を呑んでブラブラやつて生意氣な事許り言つてゐるやうに聞えるが社則とも言ふべきものを讀むと「本社は女流文學の發達を計り各自天賦の特性を發揮せしめ他日女流の天才を生まむ事を目的とす」といふ極めて生眞面目なものである、處で現代の婦人の間に日毎勢力を伸ばしつゝある「青鞥」の女は如何に生活しつゝあるかそして其結社なるものは如何なる組織であるか是非とも調べてみる必要があると思ふ、先づ同社の後見人とも言ふべき文學士生田長江君の話を聞く。[124]

二. 小野の紅吉宅訪問 [語り手／小野賢一郎]

紅吉は號で本名を一枝といふ、紅吉との對話に移る前に室の模様を書いて見たい〔、〕玄關を入ると右が書齋で庭には菊が咲亂れてゐる、机の上には田村とし子から貰つたお人形さんが飾つてある、机の横の書棚には和洋の文學書類が詰込まれてオルガンも置いてある、紅吉が生れて始めて描いた油繪も立掛けてある、其他三色版や人形や花瓶やよろしくある、紅吉の姿と言つば五尺五寸三分〔約一六六センチメートル〕の身の丈にかてゝ加へて横も張つてゐるので宛として柔道師範役のやうである、ト言ふのは帯は角帯、袴はセルで下腹にグツと力を入れて腹式呼吸のお稽古と言つたやうな姿勢は甚だ恐れ入るが御婦人とは見えない……紅吉と語ること約五時間〔、〕生田長江君から其性格を前に聞いてはゐたが書いたものを見たのと本人に會つたのとはまるで違ふ、紅吉は無邪氣な又女としては珍らしい性格と頭をもつてゐる女だとしみじみ思つた。[125]

三．小野と紅吉の対話〔語り手／小野賢一郎と尾竹紅吉〕

記「吉原の榮山と大分親密だつて大變な評判ですが近頃もお通ひですか」

紅「往復はしてゐますよ、私は決して偽は申しません……らいてう（煤煙女史）は人に會へば直ぐ偽を言ひます、私は先達或る新聞の方がお出でたので本當な事を話したら夫れが變な風に紹介されて迷惑をしてゐます……」

記「榮山といふ花魁は餘程面白い女ですか」

紅「えゝ女學校出なのです……榮山は筆跡もなかなか上手ですが昨日も手紙を呉れました……三晩ばかり泊まりました、平塚なんかも酔つちやつてね……」

記「鴻の巣はドウです」

紅「鴻の巣は青鞥の廣告取にいつたのが大變な評判になつたのですよ、十二階下の銘酒屋でも吉原でも其時の氣分氣分で行くのですからね〔、〕ドウかつて問はれたツて其時の氣分次第といふより外にお答への仕様がございません」

記「平塚らいてう女史と始めて會はれた時の感じはドウでした」

紅「小説の煤煙を通じて平塚を知つてゐました、平塚は今まで未だ煤煙を讀まないさうです、煤煙を讀むと自分の事が餘り誤られてゐるから癪に障ると言つて自叙傳も讀みません……私が平塚と會つたのは今年の春ですが大阪に私がある時に色々自分の胸の中で平塚の性格を描いてゐたのです……」〔126〕

四．『東京日日新聞』を通じての紅吉の退社表明〔語り手／小野賢一郎〕

紅吉は自分等の行動が青鞥社に煩ひを為すのを大いに恐れてゐる、で、断然本月限り退社して了つた、これから一生懸命畫を勉強するさうである、平塚女史から大變怒られたのでモウこれから平塚の事は一切口にしないと云つてゐる、紅吉は其時の氣分氣分で話したのだが平塚から私を賣つたのだとか探偵のやうだとか言つてキメつけられた、全く何と言つてよいか判らなくなつて泣いたさうである。〔127〕

五．紅吉の退社表明についてのらいてうの述懐〔語り手／平塚らいてう〕

前の『国民〔新聞〕』の記事ほど荒唐無稽のものではありませんでしたが、〔『東京日日新聞』において「新らしがる女」の連載がはじまると〕そのことでわたくしやまわりの者が紅吉の輕率な態度を少しきつくたしなめたことが、退社の決意（？）を一挙に押しすすめたようにも思えます。（中略）

わたくしにしても、紅吉が退社したところで、紅吉との個人的な關係にどう変化が起こると思われませんし、やめるという紅吉を、なにも無理に引きとめて社員にしておくこともありません。

それに、紅吉の存在が、本人自身は意識しないでも、青鞥社全体をひっかき廻していることはたしかでしたから、今後の「青鞥」のためには、ここで一応距離をおきたいという気持ちも十分ありました。そして、なおもう一つ、わたくしとしては、この機会に紅吉を本来の画業に進ませたいという願いが強くありました。〔128〕

六．紅吉の退社の弁〔語り手／尾竹紅吉〕

私は今、あらためて私を紹介します。私は偽と知らずに偽を知つてゐた人間でした、正直だと思つて不正直なことをしてゐた人間でした。まるつきり責任と云ふものを考へて見ない、人と云ふものを見もしない、僭越な、我儘な奴だつたので御座います。……それで今度拾一月號の編輯が終ると同時に私は青鞥社を退社致すことになりました。……この青鞥は私にとって最終の編輯にあたつたので御座います。……私は涙と光りでこの原稿をかき終へます。ぢや左様なら、私は今もう歸へつて行きます。〔129〕

七. 退社に際しての紅吉の詩〔語り手／尾竹紅吉〕

冷たき魔物は／今ここに、／赤裸な人世の前に／生膽とられた子供の肉軀は／只消へて逝くよな響をたてて／びくりびくりと動いてゐる。

……

秘密から生まれた／お前と云ふ魔物冷たい魔物／虚偽から生まれた／わたしと云ふ子供、
赤裸の子供。

不可思議の思ひ出は／眞赤にむかれた子供の肉軀の陰にかくれて／恐ろしい顔して黒燐石のなかからぞのく。

……

さようなら／さようなら／破られた調子と／亂された調子、／葬はれた調子で／丸裸の子供は死んで逝く。

さようなら、／さよなら／赤裸な人世の前に／虚偽から生れた私と云ふ／その赤ん坊は死んで逝く／さようなら。〔130〕

八. 紅吉から記者の小野賢一郎へ（その1）〔語り手／尾竹紅吉〕

活字になつて現はれて来る自分の姿、言葉、心や頭、あんなに迄、あんなに迄自分の知つてゐない自分の忘れてゐる自分が出てゐるのが不思議でなりません。私は實申しますと、あす出る自分、翌日出て来る自分が全く案じられてならなかつたので御座います。……それから又私はあの記事について或る友人の二〔、〕三から私の想ひもかけなかつた話を聞きました、それはあの記事に出てゐるものに依つて如何にも私が卑劣だ、そして自己辯護の上手な奴だ、正直を看板にして偽をつく子供だ、友を賣つて平然としてゐる人間だ、と。私は、私にはそんな心がそりや全くなかつたのです。〔131〕

九. 紅吉から記者の小野賢一郎へ（その2）〔語り手／尾竹紅吉〕

全体通じて私はあんまり自分を知らずに饒舌り過ぎました、只平塚さんのことを私が悪くばつかり話してゐたと思はれてゐますから〔、〕それが記事の終り迄心苦しく思つてゐました。平塚さんに迄いろいろのことを思はれてゐるかと思ひますと〔、〕つくづく自分乍ら自分が痛ましい様な可哀そうな馬鹿の様な赤ん坊の様な氣になつてしまひました。〔132〕

第一三節 特異な自己のセクシュアリティをほのめかす

一. 「苦しい苦しい心の病氣」〔語り手／尾竹紅吉〕

私は悪い身體を無理に無理して、勝ちやんと出た、何處に、何處に、私は苦しい苦しい心

の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にゐつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの様に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その氣持のいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た。私は元気だつた。[133]

二. 「自分たつた一人で大切にしてみゐる面白い氣分」[語り手／尾竹紅吉]

私は誰も知らない、自分たつた一人で大切にしてみゐる面白い氣分があるのです。

よく考えて見ると、その氣分は幼い時からずっと今迄續いて來てゐたのです。これから先きもどんなにそれが育つて行くことか楽しむでゐます。人が知つたら恐らく危険だとか狂人地味な奴だとか一種の病的だろうとか位いで済ましてしまうでしょう。

私のその事が世間に出ると不眞面目なものに取扱はれて冷笑の内に葬らはて行くものだと考へてゐます。私が銘酒屋に行つたとか、吉原に出かけたとか酒場に通つて強い火酒に酔つたとか云ふことは其の大切にしてみゐる氣分の指圖になつた悪戯^{わるふざけ}なのです、薄つ片らな上づつたあれらの幼稚な可哀い氣分を世間の人達は随分面白く解釋してゐます。

私は自分を信じてゐます。それだけに自分以外の人達には平氣で偽をついてゐます。

そのくせ私は人の言葉を妙に心配したり氣に懸けるのです。[134]

三. 「死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」[語り手／小野賢一郎と尾竹紅吉]

紅「煤煙を通じて平塚の性格をみますと或る微妙な點が私と似通つたところがあるので、世間の人から見ると一寸不思議に思へるやうな興味を持つてゐるやうですから會つて見ると果たしてさうでした」

記「その興味といふのは例へばドンナものです」

紅「それは今は言へません、私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」[135]

第一四節 『青鞥』の表紙絵「アダムとイヴ」の製作

一. 青鞥社への未練[語り手／平塚らいてう]

それで、「絵が出来上ったらいらっしゃい」というようなことで、紅吉は一応十月かぎりで編集室から姿を消すことになりました。むろんそのまま引込むはずはなく、それから後も相変わらず、編集室やわたしの部屋にも姿を見せ、みんなの邪魔をしたり、また少しは手伝つたりしたのでした。[136]

二. 安堵村に再び富本憲吉を訪ねる[語り手／富本一枝]

青鞥でのいろいろな事件のあつたあと、当時、私は『青鞥』の表紙など描かされそれがたまたま木版刷りだったものですから、教えてもらうために一人でたのみに行きました。『青鞥』の表紙のなかに、アダムとイヴを描いたものがありますが、あれは富本が下絵を描いてくれたものを、私が彫つたのです。[137]

三. 『新潮』の記者（一青年）が紅吉宅を訪れる〔語り手／『新潮』の記者（一青年）〕

紅吉は愛す可き女だ。天真で、卒直で、無邪氣で、素朴で、單純で、正直だ。彼女の色は黒く、髪は硬く、顔も、鼻も丸く、謂ふところの美人ではない。けれども見よ！其の眼と、頬と、唇のあたりには、彼れのそれ等の性質の總ゆる美點が雲の如くに漂つて、接する人々に、一種の親しみを感ぜしめる。新聞の三面記事や、人々の噂に創造された尾竹紅吉と、尾竹紅吉其の人の實體とは全然別個のキャラクターであることを、親しく紅吉の實體に接した余は断言する。〔138〕

四. 「謂ゆる新しき女との対話」〔語り手／尾竹紅吉と一青年〕

青年 貴方はあゝ云ふ〔大坂毎日や東京日日のような〕記事を承認することが出来ますか。

紅吉 いゝえ、全然——私の實際とは全きり違つて居ります。初めの中は腹も立ちましたし、辯解もしようと思ひましたけれども終ひには寧ろ滑稽になりました。……今では辯解しようなどゝは思ひません。……長い將來を期して、眞面目な仕事を以て本當の私と云ふものが了解されるのを待つより外ありません。

青年 しかし、あゝ言う記事が出ましても、家庭の方は別に貴方の一身に對して干渉されませんか。

紅吉 初は随分詰問を受けましたけれども、何分事實が違ふもんですから、今では何ともありません。

青年 貴方は青鞥を退社したんださうですね。

紅吉 えゝ、私が居ますと、私一個のことがいろいろ不眞面目に書かれる時に、青鞥と云ふものにまで累を及ぼしますものですから、それで退社いたしました。

青年 それで貴方は、貴方自分を世間の云ふ「新しい女」と自認して居ますか。

紅吉 いゝえ、——世間で云ふ新しい女と云ふものは、よく分りませんけれども、不眞面目と云ふ意味が含まれて居るやうですね〔。〕私は不眞面目と云ふことは大嫌ひです。……私自身はどちらかと云ふと昔の女で、私の感情なり、行為なりは、道德や、習慣に多く支配されて居る事を感じます。〔139〕

五. 「アダムとイヴ」が一九一三年の新年号の表紙に登場〔語り手／平塚らいてう〕

すでにおもて向きは退社となっていながら、紅吉は編集室へもわたくしの円窓の部屋へも、相変わらず顔を見せていますし、三巻新年号からの表紙絵——それはアダムとイヴを描いたすぐれたものでしたが——を、自分で木版を彫るなど、たいした骨のおり方でした。〔140〕

六. 女性論「藝娼妓の群に對して」〔語り手／尾竹紅吉〕

人世を具體的に表現してゐる今日迄の歴史は男性の性格と天職を述べて來てゐるに過ぎぬ。……今日の文明は獨り男性の舞臺であつて、……換言すると今日の文明は男性の文明にして女性の混入することの出来ない文明であると。……その男性的文明のなかに生れた女性が全くとりえのないものとせられ人格あるものとして尊敬されないのは當然である。……彼等藝娼妓の群の存在、増加は男性の野獸的情慾の人類記録に一層の光彩を放つものと見てもさしつかへはないと思う、……これらの群の存在は女性にとって完全なる女性を男

性にも又同じく知得さし得ぬことを悲しむのである。女性の解釋が眞實に出来ないことを悲しみたいのである。人格あるものとして尊重されないのを悲しむものである。……男性に女性の所謂暗黒面のないのと同じく女性みづからも暗黒面の女性を壊碎してしまいたいのである。……今日の文明から暗黒面の女性を消滅せしめたなら今日の男性は如何に表面の女性に男性自身を示すであろう。……暗黒面の女性是要するに藝娼妓をさすべきものである。曾て吾人は暗黒面の女性と表面の女性を單に女性として彼の奇矯に瀕する男尊女卑論から打破し相互の人格を尊重し尊卑を排して優劣を以つて女性の標準を定めたいと思う、即ち赤裸な原始に歸り作られたる性格の本質にとつて尊重仕合いたいと考える。〔141〕

第一五節 第一三回巽画会絵画展覧会への出品作《枇杷の實》

一. 《枇杷の實》の総見準備〔語り手／『多都美』〕

青鞥社を退いた尾竹紅吉女史は殆と一ヶ月の間寢食を忘れて本郷西須賀町の生田長紅^{ママ}氏の二階に閉ち籠り畫導を揮つてゐたが、殊に出來得るや本會出品した。畫は六曲屏風一雙にて藤原時代の人物を描き『枇杷の實』と題せるが落款は本名の『一枝』で感じのいい作である。されば別記の如く紅吉の知己はち大連の總見をなさんとて其準備中である。〔142〕

二. 《枇杷の實》の総見当日〔語り手／『多都美』〕

青鞥派の一人として新らしい女の名を天下に馳せた尾竹紅吉氏の丹青の花が麗しく本會の展覧會場に咲いたので、春の上野は去年に増して人目を集めた。中にも文士、畫家、女優の面々が同氏のために總見をやつたのは振つてゐた。時は四月一日正午である。文士の生田君を始めとして新聞記者畫家女優等數十名韻松亭から會場へ繰込むで熱情を罩めた紅吉氏の六曲屏風一雙と云ふ大作「枇杷の實」の前に立つて讚美の聲を漏らす。……嚴君越堂氏や、伯父國觀氏は其娘姪の今日の譽れに一種のプライドを感じたらしい面持ちであつた。……因に紅吉氏の繪は福島於菟吉氏が買つた。〔143〕

三. 「巽會展覧會を見て」〔語り手／津田青楓〕

近頃、新聞や雑誌で馬鹿に持て囃やす所謂新らしき女の一人に尾竹紅吉と云ふがある。其人の作も出てゐるのでニヤケた三文蚊士や青鞥派のお轉婆連が總見をやつたと云ふ騒ぎ、如何な名作かと見れば昔の繪卷物からとつて來た構圖に何等の新奇も、創意もない古い古いものである。新らしい女ならばコンベンションを破壊したものを描きさうなものだ。あんな下らない模倣的なものを出して新らしい女が呆れて了ふ。名作に旨いものがないとは眞理である。僕は失望した。〔144〕

四. 「清水町より 巽畫界展覧會を觀て」〔語り手／黒田鵬心〕

この繪は所謂新しい女たる紅吉女史の作だと云ふので注目されてゐるが、繪としても注意すべきものである。殊に婦人の繪としては今までの婦人か多く華美な風俗畫を描いてゐたのと代りこれは男の畫家の題材と少しも違ひがないので珍らしい、實は去年の此の展覧會では男とも女とも知らず、越堂氏の子とも知らずに可なりうまいと思つて觀た、併し竹坡氏の模倣のうまいのだと云つた。その言に就いて女史は後で大に怒つて余の友人に詰問し

たと聞いたが、今年の繪も亦大體に於いて竹坡氏の模倣を出ないと思ふ。金と銀と黄とあまり違はぬ繪具を用ひて全體の調子を纏めたところは此の繪の第一の佳い所である。〔145〕

五. 「紅吉の畫が賣れる——三百圓で花魁身受の噂」〔語り手／『讀賣新聞』〕

新らしい女の標本の様に伝はれてゐる尾竹紅吉は見様見真似で繪筆を弄ぶことが上手な上に巖父越堂氏の仕込で一通り物になつて居るが、今回一枝といふ畫名で巽畫會に出品したのは「枇杷の實」と題する六曲屏風で、大枚三百圓と札がつけてある、世間は妙なもので、新しい女のやる事なら、何に限らず大騒ぎをする、この畫の總見なども馬鹿騒ぎの一つだろう……その畫は開會間も無く物好きな福島於菟吉氏が買取つたので、紅吉はホクホクもの、サテ其の三百圓は何うなるのかと云へば、今度紅吉が出す雑誌の保證金に充てるのだそうだ、花魁身受などと評判を立てゝ置いて、陰でペロリと舌を出す紅吉も女ながら人が悪い。〔146〕

第一六節 妹の福美への佐藤春夫の恋心

一. 福美が見初められる〔語り手／平塚らいてう〕

生田家にいる姉のもとへ、家からのおつかい役で出入りする紅吉の妹、福美^{ふくみ}さんを、佐藤春夫が見そめたのもこのころでした。福美さんはその名のように、大柄なからだながら、姉さんとは違って女らしい、やさしい感じの関西ふうな美しい人でしたが、たいへんな姉思いで、何ごとにつけ、「姉さん、姉さん」と、紅吉を大事にするのでした。〔147〕

二. 父の越堂がその恋を認めず〔語り手／富本一枝〕

「あんな、片方の手を懷に入れたままものを書く奴には、どうせ碌なのがない……」という父の反対で、お互いに心を引かれながらも、結局この二人の淡い恋は実を結ばなかった。

そのころ、私が佐藤さんの恋文を妹に手渡す役をしたわけなんです、^{あいだ}間にはいつて私が邪魔をしているんじゃないかと、佐藤さんは大分邪推していたようです。〔148〕

三. 詩「泉と少女」〔語り手／佐藤春夫〕

泉よ、泉よ、水の舞踏よ、
杯にあふれ出づる山の酒よ、
奏づる妖精の歌にあはせて、
よき花かげにをどりいでつつ、
汝はメルヘンのなつかしさもて
しばしば少年の夢をいざなふ。〔149〕

四. 「泉と少女」の詩風について〔語り手／島田謹二〕

その心境は、「泉と少女」と題する詩の中に直寫されている。……詩風はこれまでのものにくらべて、まるで一變しているのではないか。ここに表われる「少女」は……當時名を知られた日本畫家の令嬢であつた。……彼は改めてわが身の在り方を省み、清らかな少女にふさわしい清純な魂の人に立ち戻ろうとした。……尾竹ふくみとの戀を契機にして、彼は或る

意味で人間がかわつた。生活もかわつた。これから、彼は一種のどん底のなかをさまよい歩いて、詩筆を捨てた。[150]

第一七節 青鞥社からの最終的な退場

一. 人物批評「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」[語り手／尾竹紅吉]

いゝにしろ、わるいにしろ、人一人をあらたまつて評をすると云ふことは随分責任のある、そしてむづかしいものです。……私が一番最初平塚さんを知つたのは[森田] 草平氏の自叙傳を讀んだ時なんです。その時私は随分、様々の好奇心を自叙傳を通して平塚さんの上に描いておりました。そしてどうも不思議なすばらしい人だとも考え、恐ろしい人のようにも考え、女として最も冷つこい意地の悪い人のようにも思つてをりました、……そして讀み終つた日などは、すぐにでも東京に出て面會して私の解釋がどうかみきはめたいとまで好奇心を一ぱいもつてをりました。……平塚さんの門の前に連れてこられたその時、私は右の手に自叙傳でも持つて一々讀んでゐるかのやうに、舞臺監督のやうな心持で私はそら芝居が始るのだと云ふ風で門をあけました。……私が再び上京してから、私と平塚さんはよく逢ふやうになつたんです。私が自叙傳をよんだときに握つてしまつた好奇心をどうにかしてはつきりしてしまひたいと云ふ私の行為は、又いつの間にか平塚さんからもいぶかしい不思議な奴だなあ、どんな奴かと云ふそこに起きてくる自然の好奇心がいつの間にか、かち合つて、そうした中から、いつの間にか眞實が生れそして私と平塚さんは、一步ふみ込んだ場所に愛と云ふものを結びつけて立つてゐるやうになつたのです。……私はかつての私と平塚さんの間の感情や行為を思ひ出しますと、とてもこの原稿がかけません。平塚さんは、私達よりも、どれだけ涙もろかつたでせう。私はあらゆる我儘をしてみたゞけ平塚さんを困らせたものです。今考えると全くお氣毒です。……なんだかばらばらになりましたが、私はこれより以上かくことを好みません。……この記事はかへつて平塚さんの今の位置なり、名譽なりを傷つけたかも知れませんが、しかしその邊のことはどうぞしかるべく御許し下さい。私がこの原稿をかくに對して、充分の好意をもつてゐることは、全く實際だと云ふことを信じてゐますから。[151]

二. 紅吉への最後の退社勧告[語り手／「編輯室より」『青鞥』]

尾竹紅吉氏がまだ本社の社員であるかのやうに思つてゐる方もあるやうですが、同氏が自分から退社を公言されたのは昨年の秋の末だつたかと思ひます。……同氏の特殊な性格を知つて居ますから社は大抵は黙許して参りました。けれども今日はもう社とも、社員とも全然何の關係もありません。従つて同氏の言動に就ては……社にとつてもらいてうにとつても誠に迷惑なものであります。[152]

（第二章完／二〇二三年三月）

あとがき——ある批判に関連して

いま私は、「本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯」を脱稿しました。この拙稿は、これまでの富本一枝の伝記や小説に見られた、著者の多弁と能弁に基づく書法とは完全に異なり、「本人と仲間たちの語り」だけで構成される、独自に用意された新しい伝記書法の形式によって構成されています。その理由は、いうまでもなく、実在した人間の歴史が、執筆者の一方的な思い入れから生じる歪曲や曲解によって貶められてきた過去の経緯を憂い、動かしがたい証拠（歴史に残る一次資料）にそのすべてを語らされることにより、全き客観性と真実性を担保しなかったからです。したがって、いま「まえがき——新しい伝記書法の試み」において書いていますように、私の本稿における役割は、「本人と仲間たちの語り」の編集のみにありました。決して私は、自身の富本一枝像を読者のみなさまに押し付けるつもりはありません。そのことは、「本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯」には一定の結論のようなものではなく、読者お一人おひとりの、人生観や家族観、女性としての生き方に照らし合わせて、結論が導かれてゆくことを意味します。みなさまには、どうか、本稿を成り立たせています「動かしがたい証拠」の全容から、ご自身の富本一枝像をそれぞれにつくっていただきたいと思います。ここに編纂した歴史的言説の一つひとつが、その目的に沿って機能することになれば、それこそ、編集者としての私の望外の喜びになるにちがいありません。

それでは最後に、「付録」として、すでに著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』第三編「伝記書法私論——批判と偏見を越えて」に所収の前編「私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）」と後編「私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）」をここに再録して、「おわりに」を閉じたいと思います。「まえがき——新しい伝記書法の試み」において書き記しました、私の本稿執筆の意図が、より鮮明にご理解いただけるものと、確信いたします。

（二〇二五年三月）

語りの出典と注記

第一章 生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）

一八九三（明治二六）年～一九一二（明治四五）年

第一節 富山での出生と幼児期

〔1〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、172頁。

富本家に残されている家系図によれば、一枝の父は尾竹熊太郎（画号は越堂）、母はウタ。熊太郎の両親は、尾竹倉松（画号は國石）とイヨ（旧姓小飯田）。熊太郎は長男で、次男に駒吉（北海道にて行方不明）、三男に染吉（画号は竹坡）、四男に亀吉（画号は國観）、そして長女に美香がいる。熊太郎、竹坡、國観は、尾竹三兄弟として、当時の画壇に名を刻む。

熊太郎とウタは、一枝（のちに陶工の富本憲吉と結婚）、福美（のちに画家の安宅安五郎と結婚）、三井（のちに画家の野口謙二郎と結婚）、栞（國観の養女となるも、家出により消息不明）、そして貞子（のちに武田家から婿養子を迎える）の五人の子女を儲ける。それ以外の四人は早逝。

〔2〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、234頁。

母の嫁入り道具は、一枝の結婚の際に引き継がれる。一枝はこう述べている。

「結婚します時、私の母は、母が結婚の時に母の母から貰って来た先祖伝来の九寸五分の短刀を私に渡して、“帰りたくなれば、これで死ぬ”と言いました」。（富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、177頁。）

なお、本書『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』の著者の尾竹親は、尾竹倉松とイヨの三男（事実上の次男）染吉（竹坡）の息子で、一枝にとっては、いどこに当たる。

〔3〕出典／富本一枝「愛者——父の信仰と母の信仰」『大法輪』第25巻第9号、1958年、59頁。

〔4〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、234頁。

引用文にあつては、一枝の生年月日は、「明治二十六年四月二十日」となっているが、私が行なった調査では、一枝が在籍した根岸尋常高等小学校の生徒明細簿（尋常科ノ部）には、一枝の生年月日は「明治二六年三月二〇日生まれ」と記載されており、「三月二〇日」であった可能性が全くないわけではない。

〔5〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、234頁。

海藤隆吉は、富本憲吉と一枝の次女である陶の息子であるが、彼の「尾竹一枝とその家族」は、次の文ではじまる。

「尾竹一枝は一八九三年（明治二十六年）四月二十日に、富山県富山市越前町総曲輪郵便局前で生まれた。現在の国際会議場前、市電（路面電車）が大きくカーブするあたりらしい。道路の拡張で現在はその場所を特定することはできないということだ。私は富山を訪ねる

とき、国際会議場の隣のホテルの、お堀と路面電車の見える部屋に宿泊することになっているが、この辺りで祖母が生まれたのだと思うだけでなんとなく嬉しくなる」。(海藤隆吉「尾竹一枝とその家族」『とやま文学』第36号、富山県芸術文化協会、2018年、172頁。)

〔6〕出典／富本一枝「母親の手紙」『女性』、1922年12月号、150頁。

この文は、一枝がふたりの娘に語りかける手紙の形式をとっている。長女の陽は、一九一五（大正四）年八月二三日に生まれ、この文が発表されたとき、満七歳になっていた。次女の陶は、一九一七（大正六）年十一月八日の生まれで、このとき満五歳。

引用文のなかで一枝は、「母さんの故郷が大火事で半分焼けて仕舞ひ、母さんは死なれた大おぢいさんや大おばあさんにつれられて東京に出た年です」と書いている。これは、一八九九（明治三二）年八月に富山市を襲った大火事を指しているものと思われる。このとき一枝は満六歳になっており、本人の語りから、父方の祖父母である尾竹倉松とイヨに連れられて上京したことがわかる。

第二節 離郷後の東京での学童期

〔7〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、172頁。

東京都台東区立根岸小学校から与えられた情報によると、学年別男女別で入級日順に生徒に関する基本事項が記載された生徒明細簿が残されており、尾竹一枝に関しては、明治三二年と明治三三年の生徒明細簿（尋常科ノ部）にその記載が認められる。まず、明治三二年の生徒明細簿には、「明治三三年四月二日入級、明治二六年三月二〇日生まれ」と記載されている。このことは、明治三二年の年度末である明治三三年の三月ころに保護者から入学の意向が示されたことをおそらく意味するのであろう。次に、明治三三年の生徒明細簿には、同じく「明治三三年四月二日入級、明治二六年三月二〇日生まれ」と記載されているほかに、「退」の印が書かれている。退校年月日は未記入ながら、成績が一学期分のみ記入されていることから判断して、二学期が終了する前までに転校ないしは休学したものと考えられる。なお、保護者については「祖父の尾竹倉松」、その職業については「画工」、住所は「中根岸三七番地」と記されている。

東京都台東区立根岸小学校から与えられたさらなる情報によると、一枝は、一九〇二（明治三五）年二月二四日に、大阪市東区北久寶寺小学校から、この根岸尋常高等小学校へ転入している。届けられている住所は「下谷区中根岸町壱番地」であった。この二度目の東京滞在が、どのような理由から行なわれたのかはわからない。しかし、「父の仕事の都合で、小学校三年まで、東京にいた父の祖父母に預けられていました」と、一枝が回想しているところから判断すると、このときの東京滞在には、何か「父の仕事の都合」が関係していたのかもしれない。大阪への転居のために、一枝が再びこの学校を退学するのは、保存されている記録によると、一九〇三（明治三六）年九月三〇日のことであった。これは、一枝にとって、尋常科四年の在学途中の出来事ではなかったかと思われる。しかし一方で、この学校の尋常科を卒業し高等科一年に当時在籍していたことをうかがわせる記述がなされた別の関連資料も残されており、一枝の退学時の在籍学年については、現時点では必ずしも明確にすることはできない。

以上のことをまとめると、一枝は、一八九九（明治三二）年の富山市の大火災のあと、「中

根岸三七番地」の祖父母のもとに預けられ、一九〇〇（明治三三）年の四月からその秋まで、その家から根岸尋常高等小学校に通う。その後大阪に居を移すものの、一九〇二（明治三五）年二月二四日に再び根岸尋常高等小学校へ転入し、そこで約一年半を過ごしたのち、一九〇三年（明治三六）年九月三〇日に退学して大阪へ再度転居する。こうした経緯を経て、ここから一枝にとっての本格的な大阪での学童期がはじまる。このとき一枝は、満一〇歳になっていた。

〔8〕出典／『創立百十周年読本「根岸」』東京都台東区立根岸小学校、1985年、5頁。

祖父母に預けられ東京で過ごした期間、一枝が通った小学校は根岸尋常高等小学校であった。この学校は、現在の東京都台東区立根岸小学校で、一八七四（明治七）年二月に第五中学区五番小学根岸学校として開校していた。引用文は、それ以降明治末年に至るまでの発展の経緯である。

〔9〕出典／富本一枝「母親の手紙」『女性』、1922年12月号、150頁。

〔10〕出典／富本一枝「愛者——父の信仰と母の信仰」『大法輪』第25巻第9号、1958年、57-58頁。

引用文中に「私と妹は」とあるが、妹とは、あまり年の離れていない次女の福美だったものと思われる。そうであれば、祖父母に預けられていたのは、一枝と福美のふたりだったことになる。

第三節 転居後の大阪での学童期

〔11〕出典／富本一枝「愛者——父の信仰と母の信仰」『大法輪』第25巻第9号、1958年、56頁。

〔12〕出典／富本一枝「愛者——父の信仰と母の信仰」『大法輪』第25巻第9号、1958年、56-57頁。

〔13〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、172頁。

〔14〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、234頁。

〔15〕出典／『「青鞥社」のころ（二）」『世界』第123号、岩波書店、1956年3月、137頁。

〔16〕出典／富本一枝「愛者——父の信仰と母の信仰」『大法輪』第25巻第9号、1958年、57頁。

〔17〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、173頁。

〔18〕出典／富本一枝「母の像——今日を悔いなく」、日本子どもを守る会編『子どものしあわせ』6月号（第121号）、草土文化、1966年、3頁。

〔19〕出典／『「青鞥社」のころ』『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、130-131頁。

〔20〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、234頁。

第四節 夕陽丘高等女学校時代

〔21〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、173頁。

一枝が入学した女学校は、正確には、一九〇六（明治三九）年三月に設立認可された大阪府立島之内高等女学校（現在の大阪府立夕陽丘高等学校）で、南区千年町の元千年小学校を仮校舎として四月二五日に一四七名の生徒を迎えて入学式が行なわれている。その後一九〇八（明治四一）年五月に南区天王寺夕陽丘の地に新校舎の建設が開始され、一一月末には四日間臨時休業して新校舎へ移転した。そして翌年の一月に校名を大阪府立夕陽丘高等女学校に改称し、四月八日に新築本校舎が完成すると、同月二七日に新校舎落成式が挙行された。一枝はこのとき、最上級の四年生になっていた。

〔22〕出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、173頁。

〔23〕出典／尾竹一枝「Cの競争者」『番紅花』第1巻第3号、1914年5月、106-139頁。

「Cの競争者」の「C」は、ほぼ間違いなく一枝本人で、内容は、美しい新任の女性音楽教師を巡っての競争相手との奪い合いの顛末記となっている。自身の女学校時代の体験が率直に語られている一種の独白としてみなしてもいいのではないか。また、書かれている内容から判断して、意識的か無意識的かは別にして、暗に自分の特異な性的指向を「カミング・アウト」している文として位置づけることも可能かもしれない。

なお、掲載誌の『番紅花』は、青鞥社を離れたのち、一枝本人が創刊した月刊文芸雑誌である。

〔24〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、237頁。

〔25〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、82頁。

〔26〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、83頁。

〔27〕出典／「『青鞥社』のころ」『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、128頁。

〔28〕出典／『創立80周年記念誌』大阪府立夕陽丘高等学校、1986年、84頁。

引用文は、初代校長の伊賀駒吉郎が書き記した「新築落成記念帖」のなかの一節。

〔29〕出典／「文藝會と運動會」『大阪毎日新聞』、1909年11月7日、日曜日。

文芸會が開催されたのは、一九〇九（明治四二）年の十一月六日。『大阪毎日新聞』が伝える、この日「來會者を驚嘆せしめた」朗読対話とは、二年生による対話「二つの家庭」（演目八番）、三年生による朗読「乳母浅岡」（演目一二番）、そして、一枝が出演した四年生の朗読「酒匂の吹雪」（演目一七番）であったことが当日のプログラムから確認できる。（『夕陽丘百年』大阪府立夕陽丘高等学校、2006年、88-89頁。）

〔30〕出典／「春浅き夕陽丘——高等女学學校の運動會」『大阪毎日新聞』、1910年3月21日、月曜日。

同じ日付の『大阪朝日新聞』においても、この運動会の様子は取り上げられた。記事の大半は、割烹着を着て頭に手拭いを巻いた、いわゆる世話女房姿で四年生が行なった「簇張りの競技」の模様についてであり、写真入りで紹介されている。（「簇張りの競技」『大阪朝日新聞』、1910年3月21日、月曜日。）

運動会が挙行されたのは、一九一〇（明治四三）年の三月二〇日で、『創立 80 周年記念誌』（66 頁）によれば、「観客二千を超え非常の盛況」であった。運動会の五日後の三月二十五日に第一回の卒業式が行なわれ、九七名の卒業生のひとりとして、一枝はこの夕陽丘高等女学校をあとにする。

〔31〕出典／『創立 80 周年記念誌』大阪府立夕陽丘高等学校、1986 年、94 頁。

卒業証書の授与と卒業生学事報告のあと、学校長の式辞、大阪府知事の告辞、生徒総代の三年月組の吉原春江による祝辞朗読が続き、そして最後に、卒業生総代の牧こむめが答辞を読み上げた。引用文はその一節である。

〔32〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、83 頁。

〔33〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、84 頁。

〔34〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、84 頁。

第五節 女子美術学校入退学

〔35〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、84-85 頁。

一枝が入学した女子美術学校（現在の女子美術大学）は、一九〇一（明治三四）年に本郷弓町において開校するも、一九〇八（明治四一）年に校舎を焼失し、翌年、本郷菊坂町に新校舎が完成し、弓町校舎からこの地へ移転する。

私が、女子美術大学の歴史資料室に確認したところによれば、一枝は一九一〇（明治四三）年七月二〇日に入学している。籍を置いたのは日本画科であった。

〔36〕出典／『女子美術大学八十年史』女子美術大学、1980 年、48-49 頁。

〔37〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、85 頁。

〔38〕出典／「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第 3 巻第 13 号、1914 年 12 月、34-35 頁。

題にあるように、この文は、一枝が富本憲吉と結婚するに際して公開された、いわゆる「暴露記事」である。目次に記載されているこの文の執筆者名は「深草の人」。つまり「匿名」ということになるだろうか。しかし、この文には、一枝の幼少期の写真や婚礼の写真が併載されており、それらは、確かな情報源から得られたものと推量される。そのことを勘案すれば、書かれている内容もまた、信憑性は高いのではないか。

なお、この文において「紅吉」のルビはすべて「こうきち」。一箇所のみが「かうきち」となっている。

〔39〕出典／「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第 3 巻第 13 号、1914 年 12 月、38 頁。

〔40〕出典／尾竹一枝「C の競争者」『番紅花』第 1 巻第 3 号、1914 年 5 月、107 頁。

〔41〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第 20 巻、1935 年 2 月、85 頁。

私が、女子美術大学の歴史資料室に確認したところによれば、一枝は、「家事の都合」を事由に一九一一（明治四四）年十一月一日にこの学校を退学したになっている。これが、一枝からの申し出による自主退学だったのか、「風紀良俗」を乱したことを理由にした学校側からの強制退学だったのかは定かではない。

一方『讀賣新聞』は、一枝が「紅吉」を名乗り、青鞥社に在籍していたところに発刊された特集記事のなかで、一枝が女子美術学校を離れるようになった理由について、こう書いてい

る。

「又自ら少年と稱し『らいてう』の美少年と云はれ、頻りと鴻の巣の洋酒に浮れて可愛らしい氣焰をあげる紅吉^{こうきち}も一時、此校の寄宿舎にゐたが、窮屈さに我慢が出来ず遂に逃出したものださうだ」。(「卒業後(十一) 結婚と就職 女子美術學校」『讀賣新聞』、1912年7月10日、水曜日。)

なお、この文においても、「紅吉」のルビは「こうきち」となっている。

第六節 『青鞥』の創刊を知る

[42] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、85頁。

[43] 出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、247頁。

[44] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、85頁。

[45] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、85-86頁。

小林清親は明治時代の浮世絵師で、その娘が哥津。以下は、尾竹親が書く小林哥津である。

「一枝の青鞥入社に口添えした小林歌津^{マツ}氏は、かの有名な小林清親氏の娘さんで、その後一枝の仲立ちで、当時竹坡の門生だった小林祥作氏と結ばれた。そんな関係もあってか、青鞥同人のなかでもことに親しく、いかにも心を割った知己のごとくに、私に語るにも「歌津ちゃん、歌津ちゃん……」と呼んでいた」。(尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、239頁。)

また、平塚らいてうは、小林哥津について、こう書いている。

「のちの富本一枝さんが大阪から上京して、曙町のわたくしの円窓の部屋に……一枝さんを案内してきたのは、社員の小林歌津^{かづ}さんでした。小林さんは、発起人の一人の木内錠子^{きうちていこ}さんと学校がいっしょだった関係で、木内さんの紹介で創刊の年の十月に社員になった人でした。そのころ仏英和専攻科に在学中で、細おもての中高な浅黒い顔からうける印象は、きりっとした東京の下町娘といった感じ、書くものにも下町趣味が色濃く出ている人でした。……小林さんの遠縁にあたる早稲田^{ちくは}の学生と一枝さんが知り合いだったことから、前に一枝さんが大阪から上京して、尾竹竹坡氏^{ちくは}の家に寄寓していたときに、二人を紹介したのでした。そんなことから、二人は手紙のやりとりをするようになったのだそうです」。(平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、23-24頁。)

なお、上記のふたつの引用文において、小林の名について「歌津」と「哥津」のふたつの表記が用いられている。『青鞥』における小林自身の執筆者名には「歌津」が使用されている。

[46] 出典／富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』講座女性5、三一書房、1958年、174頁。

第七節 一時帰阪と新境地の幕開け

[47] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、86頁。

[48] 出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、24-25頁。

この手紙の末尾には、「四十四年十一月三十日夕方」(26頁)とある。これが、らいてう

に宛てて出された最初の一枝の手紙である。差出人の名は、「尾竹一重」や「尾竹紅吉」ではなく、おそらく「尾竹一枝」となっていたものと推測される。

〔49〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、26-27頁。

「紅吉」につけられているルビ「こうきち」は原文のママ。これからもわかるように、青鞥社時代の一枝は、決して「べによし」ではなく、明らかに「こうきち」を自称していたのである。

〔50〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、233頁。

この引用文中二箇所の一枝の発話部分に着目すると、その箇所には、「紅吉」の「紅」が生物学上の（身体上の）性を、「吉」が自己認識上の性を含意していることを暗にいわんとしている可能性が残る。男性装を好み、男子名を通り名に使用する性表現から判断すれば、一枝の性自認は、ほぼ間違いなく「男」だったものと思われる。このあとに続く、「五色の酒」や「吉原登楼」といった男性的な性行動の発露が、さらにそのことを裏づける。

他方、その箇所以外はこの引用文中の親の記述部分に着目すると、親のインタビューに応じて一枝は、「紅吉」の呼び名を「べによし」と語ったようである。最晩年にあって、なぜ事実とは異なる受け答えをしたのか、このことは、自分のセクシュアリティにかかわっての自己認識の転向、つまりは、男性性の削除という問題を提示する。

〔51〕出典／『青鞥』第2巻第1号、1912年1月、172頁。

一九一二（明治四五）年の『青鞥』一月号の「編輯室より」において、「新に入社せられし方は」のひとりに、「尾竹一重^{フタツ} 大阪南區笠屋町五一」の文字を確認することができる。「重」が「枝」の誤植でなければ、このとき一枝は、「一重」の名も使用していたことになる。いずれにせよ、氏名と住所が掲載されたこのときまでに、平塚らいてうは、入社許諾の返事を尾竹一枝（あるいは尾竹一重、さもなくば尾竹紅吉）宛てに出していたことになる。

〔52〕出典／『南薫造宛富本憲吉書簡集』（大和美術史料第3集）奈良県立美術館、1999年、85頁。

引用文中の「私信往復」とは、南薫造が、一九一二（明治四五）年の一月号（第三巻第一号）の『白樺』に寄稿した「私信往復」と題する文を指す。内容は、個展の開催を夢見て上京したものの、東京の美術家たちや美術界に失望し、安堵村へ帰っていった富本憲吉を慰める南の往信と、それへの富本の返信である「友よりの返事」とで構成されている。「友よりの返事」は、以下のとおり。これを読んで、一枝は、富本に会うことを決意したものと思われる。

「[一九一一（明治四四）年一〇月] 二拾八日夜、御親切なお手紙有りがたう、……個人展覽會は誰れにも解かりさうにもなかつたから止した、……今は東京人に（美術家にも）僕のやつたものを見せる時期で無いと云ふ事である。……東京で見るもの聞くものは皆な僕の感じ易い精神に針を差す様なものであつた、……製作欲があつて仕事の出来ない時、胃病患者が物を喰い度いが喰へなくなつた時、コウ云ふ場合は誰にもある事と思ふ。……製作欲……暗い恐ろしい穴から逃げる様な氣持……年老つた祖母や氣の毒な母が僕獨りの心がけで世間體は泣かずに涙を流がして居るのが見へる……兎に角く安堵村へ歸つて自然を見た時、總てが美しい秋の光線に包れて自分の眼に映つた。精神がトゲトゲの様になつても、美

しいものは美しく見へると思つた、嬉しかつた。此れで如何なる場合も死ぬ迄僕は如何んな迫害が有つても美しいものを見る僕の眼に變化は來ないと考へた。一日此の新らしい發見を試るために野に出たが實に聲を擧げて泣き度い程美しく見えた、此の新しき幸福を神に感謝する。……僕の展覽會は來年にならうが五年延び様が一向に平氣だ」。(南薫造「私信往復」『白樺』第3巻第1号、1912年1月、67-68頁。)

[53] 出典／山本茂雄「富本憲吉・青春の奇跡——出会い・求愛・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、73頁。

一枝が憲吉に出した面会を求めるはがきは、残されていないようである。一方、憲吉から出されたこの返信には、一九一二（明治四五）年二月八日の消印がある。

[54] 出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、252-253頁。

引用文中、「英国の留学から帰った人」と、富本憲吉は記述されている。以下は、それまでの憲吉の大まかな足取りである。

富本憲吉は、一八八六（明治一九）年六月に大和の安堵村の旧家に生まれ、東京美術学校で図案（現在の用語法に従えばデザイン）を学び、ウィリアム・モリスの思想と実践に魅了され、卒業を待たずして英国に渡る。その地で親しく交わったのが、画家の白滝幾之介と南薫造。一九一〇（明治四三）年に帰国すると憲吉は、エイマ・ヴァランスの『ウィリアム・モリス——彼の芸術、彼の著作および彼の公的生活』を参照しながら「ウィリアム・モリスの話」を執筆。擱筆後それは、一九一二（明治四五）年の『美術新報』第一巻第四号（二月号）および第五号（三月号）に分載される。これが、憲吉にとっての帰朝報告であり、工芸家モリスを紹介する日本における最初の評伝となる。一枝が憲吉を訪問するのは、「ウィリアム・モリスの話」が発表されるこの時期と重なる。

[55] 出典／Bernard Leach, *Beyond East & West: Memoirs, Portraits & Essays*, Faber & Faber, London, 1978, pp. 113-114.

[56] 出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、252-253頁。

[57] 出典／山本茂雄「富本憲吉・青春の奇跡——出会い・求愛・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、73頁。

この返信の日付は、一九一二（明治四五）年二月一五日。

憲吉が数日前の一枝の来訪を、不安定な精神状態のなか夢中になって受け入れていたことは、この文面からも明らかであろう。さらにその日、指輪をプレゼントしていることから判断して、憲吉の暗澹たる心の闇に一条の光が差し込んだのではないかと察することも、十分にできよう。憲吉にしてみれば、もっと多くを一枝に伝えたかったし、それをとおしてもっと自分を理解してもらいたかったであろう。そうした憲吉の切なる気持ちがこのとき一枝に伝わったかどうかはわからないが、少なくともそれを受け止めるだけの余裕はもはやなく、一枝の気持ちは、何ものにも代えがたい東京の待つ自由へとすでに向かっていたようである。憲吉二五歳、一枝一八歳の早春というにはまだ少し早い明治末年二月の安堵村での出来事であった。

[58] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、87頁。

第二章 青鞥社を舞台に（大阪・東京）

一九一二（明治四五）年～一九一三（大正二）年

第一節 ロダンの作品鑑賞とらいてう宅訪問

〔59〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、87頁。

〔60〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、88頁。

小林哥津子の案内で一枝が平塚らいてうを訪ねたのは、一九一二（明治四五）年の「からッ風が烈しく吹いた二月十九日の午後だった」。（らいてう「一年間（つづき）」『青鞥』第3巻第3号、1913年3月、9頁。）

〔61〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、29頁。

〔62〕出典／らいてう「一年間（つづき）」『青鞥』第3巻第3号、1913年3月、13-15頁。

Kは一枝あるいは紅吉のイニシャルで、S社は青鞥社のイニシャルに間違いないだろう。さて、しばらくして、例の時計が一枝から送られてきた。それについてらいてうは、こう記している。

「私はうれしくないではなかつたけれど、そのうれしさには何處か快くない不安が添つてゐた。第一私にこんなものを送ってくる先方の氣が知れない。……物品で御機嫌を取らうとするのならば私はちつとばかり侮辱されたといふものだ。けれどそんなことは考へたくない。只私にくれたくてくれたんだと思つてよろこべるものならよろこんでゐたいとも思つた。……或日私はKのことをぼんやりと心に浮べながら、我れ知らず、その〔時計の〕音に耳傾けてゐる自分を見出した。ちつと見詰めて居ると、心の影と音とが妙に絡みあつて、溶け合つて、一つのものゝやうになつて行く。……久振りで詩でも出来さうな氣分になつて來た。……氣分ばかりで思うように出来なかつた。で、私は其筆でKに時計の御禮を出した。そして近い中に時計に關聯した詩を御目にかけるかもしれないと書き添へた」。（らいてう「一年間（つづき）」『青鞥』第3巻第3号、1913年3月、18-21頁。）

もらった時計の音に誘發されて詩情が湧き出たということは、らいてうの心が一枝に傾いたことを意味するのであろうか。

第二節 大阪での『青鞥』の手伝いと《陶器》の受賞

〔63〕出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、86-87頁。

すでに一九一二（明治四五）年の『青鞥』新年号は、イブセンの『人形の家』を取り上げ、「附録ノラ」と題して「社員の批評及感想」を掲載していた。この引用文から、その後の大阪公演についての取材が紅吉に依頼されたことがわかる。紅吉がらいてう宅を訪れたのち帰阪してまもなくのことであつたと思われる。

このときの劇評を、その年（一九一二年）の『青鞥』五月号に掲載された「赤い扉の家より」のなかに見ることができる。これは、三月号に掲載された「最終の靈の梵鐘に」に続く、尾竹紅吉の筆名をもつ、一枝にとって『青鞥』誌上二作目になるものであつた。

〔64〕出典／尾竹紅吉「赤い扉の家より」『青鞥』第2巻第5号、1912年5月、48頁。

前号の四月号の表紙絵が、紅吉の描いた「太陽と壺」に差し替えられている。引用文は、この表紙絵についての紅吉の解説である。そのなかの **BLUE-STOCKING** の日本語訳が実は「青鞥」なのである。平塚らいてうは『青鞥』という雑誌名の由来について、次のように述べている。

「生田[長江]先生も熱心にあれこれと考えて下さって、思いつく名を挙げているうちに、はたと膝を打って『いっそブルー・ストッキングはどうでしょう。こちらから先にそう名乗って出るのもいいかもしれませんね』ということになったのです。わたくしは、このときはじめてブルー・ストッキングという言葉をしりましたが、そのときの生田先生の御説明や、あとでエンサイクロペディアで調べたところでは、ブルー・ストッキングという言葉の起こりは、十八世紀半ばごろ、ロンドンのモンタギュー夫人のサロンに集まって、さかんに芸術や科学を男たちといっしょに論じた婦人たちが、黒い靴下が普通であった当時青い靴下をはいていたことから、なにか新しい、いわゆる女らしくないことをする婦人にたいして、嘲笑的な意味で使われた言葉ということでした。それでわたくしたちの場合も、女が仕事をやり出せばきっと世間からなにかいわれるに違いないから、こちらから先に『ブルー・ストッキング』を名乗って、先手と打っておこうというわけでした。……わたくしたちは生田先生と相談して、これに『青鞥』の訳字を使うことにしました」。(平塚らいてう自伝『元始、女性に太陽であった』第1巻、大月書店、1992年、326-327頁。)

この表紙絵のタイトルは「太陽と壺」である。もし「太陽」を平塚らいてうに、そして「壺」を富本憲吉になぞらえるものであったとするならば、たとえ、そのときの紅吉のささやかな愛の心象を映し出していたにすぎなかったとしても、それが本当に現実のものとなってしまうことがわかれば、そういつてしまうには余りあるものがこの作品にはあったと人は考えるのではあるまいか。

[65] 出典／黒田鵬心「巽畫會展覽會を觀る（下）」『多都美』第6巻第10号、1912年5月20日。

『多都美』第6巻第8号（1912年4月20日）に、第一二回巽画会絵画展覽會審査委員長の河瀬秀治による「審査報告」に加えて、受賞者の名前と作品名が掲載されている。これによると、この展覽會の受賞者は、二等賞銀牌八名、三等賞銅牌一名、褒状一等一六名、褒状二等二〇名、褒状三等二五名であった。

表紙絵「太陽と壺」の製作や劇評「赤い扉の家より」の執筆に先立って、すでに一枝は、第一二回巽画会の展覽會に出品する二曲一双の屏風《陶器》の製作に邁進していたものと思われる。これが、父とのある種の和解を意味するものなのか、あるいは、らいてうの論しの言葉に従うものなのか、一枝は多くを語ってはいないが、この作品は三等賞銅牌に輝き、父越堂の作品はその下の褒状一等に止まった。こうして一枝は画壇への初登場を見事に果たしてみせた。黒田鵬心は、「巽畫會展覽會を觀る（上）」（『多都美』第6巻第9号、1912年5月5日）および「巽畫會展覽會を觀る（下）」（『多都美』第6巻第10号、1912年5月20日）の二回に分けてこのときの展覽會についての批評文を『多都美』の「畫壇時評」に書いている。引用文は、黒田鵬心による一枝の作品評である。

この父と娘の受賞の結果が公表される数日前のことであったのではないかと思われるが、越堂は、妻のウタと次女の福美を大阪に残したまま、一枝と貞子連れ立って東京に上り、下根岸に居を構えた。ウタと福美の上京は、その数箇月後になる。

第三節 大阪から東京への転居

[66] 出典／雑報「尾竹越堂氏東京に轉ず」『多都美』第6巻第9号、1912年5月5日。

越堂たちが転居したのは、一九一二（明治四五）年の四月九日であった。そしてすぐにも一枝のもとに福美からの手紙が届く。姉の《陶器》の受賞を大阪の地で知ったのであろう、そこには、「御立派な御成績をお喜びいたします」（尾竹紅吉「赤い扉の家より」『青鞥』第2巻第5号、1912年5月、51頁）というお祝の詞がしたためられていた。受け取ったのは、『青鞥』五月号に投稿するつもりで書いていた「赤い扉の家より」をちょうど脱稿した四月一五日のことであった。

[67] 出典／山本茂雄「富本憲吉・青春の奇跡——出会い・求愛・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、73頁。

新居に落ち着くとすぐにも一枝は、転居を知らせるはがきを憲吉に出したものと思われる。するとさっそく、東京での展覧会を終えて安堵村に帰っていた憲吉から、春の大和に咲き乱れる野の花の美しさを告げる返信の手紙が届いた。日付は、四月一三日となっている。

[68] 出典／尾竹紅吉「或る夜と、或る朝」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、116頁。

しかしながら、南薫造宛ての一九一二（明治四五）年四月七日付書簡には、富本は、この「黒い壺（木版）」をこの時点で一枝に送ったとは書いていない。以下のような文面から察すると、富本はまだ、一枝のことを南に知らせたくなかったのかもしれない。

「それで昨夜大いにカンズッてやった壺を此の手紙と一處に送る。これで先づ壺を刻む事も一段落とする。此の試作は第一に材料を送って呉れた榮公、最も大き感化を呉れた長原先生と君に送ったぎり」。（『南薫造宛富本憲吉書簡集』（大和美術史料第3集）奈良県立美術館、1999年、49頁。）

[69] 出典／田澤操「雨の日」『青鞥』第2巻第5号、1912年5月、61頁。

越堂と一枝が上京する少し前、三月一五日から三一日まで上野の竹の台陳列館で美術新報主催の展覧会が開催され、富本にもひとつの部屋が与えられた。「美術新報主催第三回美術展覧会第三部富本憲吉君出品目録」によると、主として英国滞在中に描いたと思われる、時代と地域を越えた図案、金物、染織陶器、彫刻に関する大量のスケッチないしは模写と、帰国後に製作された木版や更紗やエッチングなど、総計一五一点の作品が富本の部屋に展示された。これが、本人のいうところの「モリスの気持ちでイッパイにしたもの」（『南薫造宛富本憲吉書簡集』（大和美術史料第3集）奈良県立美術館、1999年、47頁）であり、評伝「ウィリアム・モリスの話」とともに、事実上、英国留学の帰朝報告に相当するものであった。

第四節 青鞥社同人のある夜のミーティング

[70] 出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、29頁。

[71] 出典／「編輯室より」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、121-122頁。

[72] 出典／尾竹紅吉「或る夜と、或る朝」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、115-116頁。

この日のミーティングは泊まりがけになった。そしてその日の夜、らいてうと紅吉とのあ

いだに烈しい愛の衝動が走る。そのことを紅吉は、「或る夜と、或る朝」のなかで、誰にはばかることもなく率直に告白したのであった。

〔73〕出典／らいてう「圓窓より」『青鞥』第2巻第8号、1912年8月、93頁。

〔74〕出典／らいてう「圓窓より」『青鞥』第2巻第8号、1912年8月、93-95頁。

この手紙には、末尾に「四十五年六月三日」の日付が記されている。

第五節 「メイゾン鴻の巣」で「五色の酒」を飲む

〔75〕出典／「編輯室より」『青鞥』第2巻第7号、1912年7月、110頁。

これは美少年（紅吉）とらいてうの恋について、紅吉自らが書いた文章であろう。同号に掲載されている紅吉の『『あねさま』と『うちわ繪』の展覧會』という記事やその後の当事者たちの書き残したものをあわせて読むと、事情はおおよそこうだったようである。六月下旬のこと、紅吉は、『青鞥』の広告を取るために、当時若い文士や美術家のあいだで知られていた「メイゾン鴻の巣」（『青鞥』誌上の広告にみられる正確な店名）というレストラン兼バーへ行き、見学した展覧会のことを思い出しながら、出された「五色の酒」の鮮やかさに無邪気にも心を躍らせた。「五色の酒」とは、色の異なる五種類の酒を順次比重の重いものから注ぎ足してできる、虹のような色彩豊かな一種のカクテルだったようである。果たしてこれをそのとき紅吉が実際に飲んだのか、また、その晩らいてうの自宅の書斎である「円窓」を本当に訪れたのかまでは定かでないが、どうやらこの一文は、そのような事実に基づいて書かれたというよりもむしろ、青鞥社の仕事に自分も参加しているという高揚感、あるいは、憧れのらいてうに愛されているという充足感のようなものがない交ぜになって膨れ上がり、その結果、こうしたたわいもない、現実から遊離した表現になったものと推測される。

〔76〕出典／「所謂新らしき女（二）」『國民新聞』、1912年7月13日、土曜日。

〔77〕出典／Bernard Leach, *Beyond East & West: Memoirs, Portraits & Essays*, Faber & Faber, London, 1978, pp. 114.

第六節 吉原「大文字楼」にて花魁と遊ぶ

〔78〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、229頁。

〔79〕出典／『『青鞥社』のころ』『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、129頁。

引用文中、吉原には「五、六人で参りました」と、一枝は述べているが、これは、事実かどうかは疑わしい。というのも、注〔80〕の『國民新聞』の書くところによれば、登楼したのは、「雷鳥の明子と尾竹紅吉（數枝子）中野初子の三人」となっているからである。

〔80〕出典／「所謂新らしき女（二）」『國民新聞』、1912年7月13日、土曜日。

この引用文は、一九一二年七月一三日付の『國民新聞』に掲載された「所謂新らしき女（二）」の一部であるが、副題は「明子と美少年、紅吉と西洋酒」となっている。らいてうの本名が「^{はるこ}明」。

〔81〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、37-39頁。

引用文中、「彼女〔花魁の「栄山」〕はお茶の水女学校を出ているということでした」という文言があるが、これが事実であったとすれば、らいてうと同窓だったことになる。

〔82〕出典／「女文士の吉原遊」『萬朝報』、1912年7月10日、水曜日。

「吉原登楼」は、ジャーナリズムの知るところとなった。すぐにも、一九一二年七月一〇日付の『萬朝報』の「女文士の吉原遊」と題された記事が登場する。副題は「榮山は可愛い人」。引用文は、その記事の書き出しである。

〔83〕出典／「女文士の吉原遊」『萬朝報』、1912年7月10日、水曜日。

この引用文から明らかなように、「吉原登楼」については、自ら竹坡に「是非伴れてつて下さいと頼んだ」と、紅吉は述べている。しかしながら、注〔79〕における文意は決してそうではなく、竹坡の好意による招待であったことを示唆している。発言内容のぶれは、明らかである。

他方で、この引用文において、一枝の性自認が「男」であった可能性を示す事例が語られている。ひとつは、「私は少い時叔父（竹坡）に伴れられて吉原に泊った事がありました」と述べている点である。このことは、一枝にとって今回の登楼が最初の体験ではなかったことを示す。もうひとつは、「私は眞實に身受がしたくなり茶屋へ歸つてから聞きますと千兩は掛かると云ふんです……若し男だつたらと男が羨ましくなりました」という発話である。「身受（身請け）」は、芸妓や遊女にかかわって、前借金を肩代わりしたうえでその仕事を止めさせ自身の「女」にする、典型的な「男」の行為である。

第七節 青鞥社内外からの非難の嵐

〔84〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、32頁。

〔85〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、40頁。

〔86〕出典／『『青鞥社』のころ』『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、128頁。

〔87〕出典／『『青鞥社』のころ（二）』『世界』第123号、岩波書店、1956年3月、136頁。

引用文中、「五色の酒の美しさを編輯後記にかいだけで、のんでいないのです」と、一枝は述べているが、これは、事実がどうか疑わしい。というのも、注〔75〕にみられるように、「編輯室より」（『青鞥』第2巻第7号、1912年7月）には、「其美少年は鴻の巢で五色のお酒を飲んで今夜も又氏の圓窓を訪れたとか」と、書かれてあるからである。

第八節 ある日のらいてうと紅吉の愛の再燃

〔88〕出典／らいてう「圓窓より」『青鞥』第2巻第8号、1912年8月、78頁。

手紙の差出人である「白雨」は、保持^{やすも}研子^{よしこ}の雅号ではないと思われる。保持は、五人の青鞥社発起人（平塚明子、中野初子、木内^{てい}錠子^{もずめ}、物集数子、保持研子）のひとりで、日本女子大学校での平塚の先輩。在学中吐血し、それ以降、茅ヶ崎の結核療養施設である南湖院での生活を繰り返す。俳句と短歌を得意とし、『青鞥』に寄稿する。この手紙からしばらくして紅吉が南湖院に入ったときは、「伯母さん役」を務める。『青鞥』一〇月号の「編輯室より」に、次の一文がある。

「長い間茅ヶ崎にみた白雨もいよいよ今年で切り上げて歸京するそうです。我儘者の紅吉を二カ月もお守りした伯母さん役もさぞ疲れたことでしょう。」（「編輯室より」『青鞥』第2

巻第 10 号、1912 年 10 月、137 頁。)

〔89〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、80 頁。

らいてうの書くところによれば、「下根津の紅吉の家を訪づれたのは十日の夜の九時過ぎだつた。(中略)『あした朝、行つてもいいでせう。其時見せます。』と云つて紅吉は左腕の繻帯の上を押へた」(らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、77 と 79 頁)。そこから判断すると、「ある日のらいてうと紅吉の愛の再燃」は、七月一日の出来事だったことになる。

〔90〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、81-82 頁。

〔91〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、82-83 頁。

〔92〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、83-85 頁。

〔93〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、85 頁。

〔94〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、86-88 頁。

〔95〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、88-89 頁。

引用文中の「茅ヶ崎」とは、肺結核の療養施設として有名な南湖院の所在地。

〔96〕出典／らいてう「圓窓より」『青踏』第 2 巻第 8 号、1912 年 8 月、89 頁。

第九節 ふたりの「同性の恋」の末路

〔97〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第 2 巻、大月書店、1992 年、43-48 頁。

〔98〕出典／奥村博史『めぐりあい 運命序曲』現代社、1956 年、35 頁。

引用文は、奥村博（その後博史へと改名）がのちに上梓する自伝小説『めぐりあい』のなかに記されている一文である。広岡昭子^{てろ}がらいてうで、佐々しげりが紅吉であることは容易に想像がつく。どのような経緯で初対面の浩（奥村）の住所をしげり（紅吉）が聞き出していたのかなどの不明な点も残されてはいるが、前後の記述内容からして、この手紙の存在はほぼ間違いないもののように思われるので、ここに、そのまま浩に宛てたしげりの手紙の内容を引用しておきたいと思う。

〔99〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第 2 巻、大月書店、1992 年、49 頁。

もし、らいてうからの伝言ではなかったとするならば、どのような意図があつて紅吉は、「[らいてうが] ぜひあなたに来るようと、そして泊まりがけです。待っています」と、偽ってまで書かなければならなかったのだろうか。いま一度両者を再会させることで、このふたりの愛が真実なものか、自分の目で確かめてみたかったのだろうか。それは紅吉にとって、危険を伴う大きな賭けを意味していた。影に隠れたこのような伏線のなかで、実際に奥村は二度目の訪問をし、さらにその数日後、紅吉が恐れていたとおりに、このふたりは雷鳴のなか一夜をとともに過ごすことになるのである。

〔100〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第 2 巻、大月書店、1992 年、49-52 頁。

注〔92〕の引用文において、らいてうは、紅吉を表わす代名詞として「彼女」ではなく「彼」を用いている。同じくらいてうは、次の注〔93〕の引用文中で、紅吉のことを「私の少年」と呼んでいる。このふたつの事例から判断して、らいてうは紅吉を「男」と同定し

ていたことがわかる。

それでは紅吉は、一方のらいてうのセクシュアリティをどう見ていたのであろうか。以下は、『東京日日新聞』の記者（小野賢一郎）と紅吉との会話の一部である。

紅「煤煙を通じて平塚の性格をみますと或る微妙な點が私と似通つたところがあるのです、世間の人から見ると一寸不思議に思へるやうな興味を持つてゐるやうですから會つて見ると果たしてさうでした」

記「その興味といふのは例へばドンナものです」

紅「それは今は言へません、私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」（『東京觀（三二） 新らしがる女（三）』『東京日日新聞』、1912年10月27日、日曜日。）

このように紅吉は、「或る微妙な點が私と似通つたところがある」と、述べている。もしこの段階で紅吉の性自認が「男」で、性的指向が「女」であつたとするならば、紅吉は、自分と同じような性自認と性的指向をらいてうもまた具有していることに気づいていたことになる。しかし一方で、らいてうの性自認は資料的にははっきりしないが、愛の対象は、「私の少年」として存在する紅吉へと向かった。そのことは、らいてうの性的指向が「女」ではなく、微妙にも「男」であつた可能性を示す。

その後らいてうは、高群逸枝の存在を知る。らいてうは、「高群さんを発見したよろこびのあまり、そのころわたくしが手紙形式で描いた文章——それは名前は出していませんが、宛名に富本一枝さんを想定したものでした——のなかで、こんなふうに言っています」と書き、続けてその内容を、こう告白する。

「わたしはまあなんと高群さんを知ることが遅すぎたのでせう。この国に、しかも同性の中にかういふ人がゐられたとは。わたしの心はまるで久しく求めて、求めて求め得なかつた姉妹を今こそ見出したやうな大きな悦びに波打つてゐます。そしてそれはどうやら十数年前、あなたをはじめて知った時のわたしのあの悦びと好奇心とにどこか似通うもののあるのを感じます」。（平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であつた』第3巻、大月書店、1992年、305-306頁。）

ここにおいてらいてうは、高群逸枝に寄せる思いが、かつて紅吉に向けた思いの再来であることを言明するのである。ここから見えてくるのは、根底にあるらいてうの性的指向は、いわゆる「男性らしい男性」（多数派の男性）ではなく「男性のごとき女性」（少数派の疑似男性）だったのではないだろうかということである。

しかしながら、紅吉との「同性の恋」の発芽以降、それよりのちに起こる出来事から明らかになるのは、らいてうが恋愛の相手として見出すのは、実際には「女性のごとき男性」（少数派の疑似女性）であつた。注〔97〕において、らいてうは、その男性を「異様な、大きな赤ん坊のような、よごれの無い青年」と表現し、注〔100〕においては、「気の弱そうな若者」と形容する。心配のあまりに稲妻と雷鳴がとどろく夜中、「男性のごとき女性」を迎えに行くのではなく、「女性のごとき男性」を迎えに行き、そうして「わたしの宿で一夜を過ごした」。このことは、らいてうが、昨日まで愛していた「男性のごとき女性」のもつ生の源泉としての幻影性を捨てて、いま現われた「女性のごとき男性」のもつ性の現実としての俗世性を選択したことを意味する。明らかにらいてうは、ともに少数者であることには

変わらないものの、「男性のごとき女性」から得られるものと、「女性のごとき男性」から得られるものとを一瞬のうちに峻別したのである。かくして、「男性のごとき女性」（紅吉）との「同性の恋」は、らいてうの面前に「女性のごとき男性」（奥村博）が出現したことにより、あっけなく、ある意味で必然的な結果として、もろくも終局を迎えたのであった。そこから判断すると、らいてうの性自認は、「男」に近いものだった可能性が残るし、性的指向を構成するのは、男性性と女性性の双極のあいだにあつて揺らめく不可思議なセクシュアリティーのもつ、本人にとっての真実なる「悦びと好奇心」だったことになる。

[101] 出典／尾竹紅吉「その小唄」『青鞥』第2巻第9号、1912年9月、126-130頁。

[102] 出典／奥村博史『めぐりあい 運命序曲』現代社、1956年、60頁。

[103] 出典／奥村博史『めぐりあい 運命序曲』現代社、1956年、60-61頁。

第一〇節 社内での人的交流

[104] 出典／富本一枝「痛恨の民」『婦人公論』第20巻、1935年2月、89頁。

紅吉、哥津、野枝の三人は、順に一歳違いで若かった。野枝の入社については、『青鞥』（第2巻第10号、1912年10月、133頁）の「編輯室より」に、「新に入社せられし人」として伊藤野枝の名が掲載されている。

[105] 出典／『『青鞥社』のころ』『世界』第122号、岩波書店、1956年2月、127頁。

[106] 出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、237頁。

[107] 出典／『伊藤野枝全集』第1巻、學藝書林、2000年、156頁。

紅吉と野枝は、双方競争心をもつ間柄ではあったが、紅吉は、不安におののきながら、あのと時の一夜をどのようにして過ごしたのかを、その後野枝に涙ながらに打ち明ける。引用文は、そのとき紅吉が野枝に漏らした言葉である。

[108] 出典／「編輯室より」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、134頁。

おそらくこのとき、大文字樓の栄山の部屋で、田村がつくった「あねさま」を見たこともまた、話題になったことであろう。

なお、引用文中の浪汗洞〔瑯玕洞〕は、欧米遊学からの帰朝後、高村光太郎が神田に開店した画廊。

[109] 出典／「編輯室より」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、135-136頁。

[110] 出典／富本一枝「一つの原型」、草野心平編『高村光太郎と智恵子』筑摩書房、1959年、289頁。

長沼智恵子は、『青鞥』創刊号の表紙絵を担当していた。一方紅吉は、『青鞥』七月号において田村敏子の「あねさま」と長沼智恵子の「うちわ絵」を取り上げた『『あねさま』と『うちわ絵』の展覧會』という批評文を書いていた。しかし、智恵子と紅吉が顔を合わせるのは、このときがはじめてであった。

紅吉宅訪問から二年後の一九一四（大正三）年に、智恵子は高村光太郎と結ばれる。智恵子と死別すると、一九四一（昭和一六）年に光太郎は、亡き妻に思いを寄せた詩集『智恵子抄』を発表する。

[111] 出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、58頁。

この引用文では、「毎週火曜日と金曜日の二回講義が行なわれておりました」とあるが、『青鞥』(第2巻第10号、1912年10月、132頁)の「青鞥研究會」の社告には、「毎週水、金、午後一時より三時迄」と、記載されている。

[112] 出典／平塚らいてう自伝『元始、女性に太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、49頁。

一方尾竹竹坡は、この年の「新年の所感」を『多都美』に寄稿し、そのなかで自分の酒の飲み方をこう告白していた。

「僕は獨り好むで遊ぶものではない。友人や、知己の交際で酒も飲み、亦遊ぶのである。此の様にして人にも馳走をし、人からも饗を受ける」。(『多都美』第6巻第2号、1912年1月20日。)

それとは別に、らいてうは、この日のことを、こう記述している。これにより開催日と神近の参加が確認できる。

「わずか一年の間に、じつにさまざまな経験をしながら一周年を迎えたわたくしたちが、その記念の集まりを開いたのは十月十七日のことでした。……ここで神近市子さん、瀬沼夏葉さん、生田花世さんらに、はじめてお会いしたように思います」。(平塚らいてう自伝『元始、女性に太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、63頁。)

なお、『青鞥』創刊一周年を記念する九月号(第二巻第九号)の表紙絵は、奥村博が描いたものへとすでに差し替わっていた。

[113] 出典／紅吉「歸へつてから」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、130頁。

「歸へつてから」というのは、南湖院を退院して東京に「歸つてから」の意味。紅吉は、「入院してから丁度二ヶ月目、九月の拾四日に……退院を許可された」(同「歸へつてから」、129頁)。

それでは、尾竹三兄弟のこの年の文展の結果はどうであったか。前年(一九一一年)の第五回文展では、越堂の《韓信》が入選し、竹坡は《水》で二等賞を、そして國觀は《人まね》で三等賞を得ていた。それに比べて、この年(一九一二年)の尾竹三兄弟は、実に低調な成績に終わった。青鞥社一周年を祝う宴席からちょうど一週間後、この年の第六回文展の受賞者が、一〇月二四日の官報で発表された。尾竹三兄弟のうち、竹坡は《にはかあめ》で、また國觀は《勝鬃》で、ともに何とか褒状は得たものの、しかし長兄の越堂の名は見当たらなかった。とりわけ越堂の出品作が落とされたのは、どのような理由からだったのか。國觀の孫である尾竹俊亮は、その経緯について、次のように説明する。

「最終的に三兄弟をおとしたいのが[横山]大觀らの本心であった。その前段として文展歴のあさい越堂をおとしてみたわけだ。大正元年[一九一二年]、彼の全作がおとされ國觀らの出品画が褒状へさげられる。この年の文展で他評も高かった越堂、祝いのビールを飲もうとするとき落選の電報が文部省からとどく。六尺・二二貫の大男が身を屈し情けなさをかみしめたのだった」。(尾竹俊亮『闇に立つ日本画家——尾竹國觀伝』まろうど社、1995年、186-187頁。)

そして三兄弟へのこの冷遇は、翌年(一九一三年)の第七回文展でさらに決定的なものになる。

[114] 出典／紅吉「歸へつてから」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、130頁。

[115] 出典／『神近市子自伝 わが愛わが闘い』講談社、1972年、102頁。

[116] 出典／神近市子「雑誌『青鞥』のころ」『文學』第33巻第11号、1965年11月、64-65頁。

第一一節 社外での紅吉の姿

[117] 出典／江口渙『わが文學半世紀』（青木文庫）青木書店、1953年、84-85頁。

[118] 出典／『宮本百合子全集 第六巻』新日本出版社、2001年、298頁。

当時の紅吉が、宮本百合子の小説「二つの庭」のなかに登場する。この小説のモデルとなっている伸子が宮本本人であることは、ほぼ間違いない。紅吉が「小石川のある電車の終点にたっていた」のは一九一二（明治四五）年の青鞥社時代だったと思われる。そのとき、宮本百合子（旧姓は中條）は一三歳、尾竹紅吉は一九歳だった。

[119] 出典／小野賢一郎『明治・大正・昭和——記者生活二十年の記録』萬里閣書房版、1929年、158-159頁。復刻版は、小野賢一郎『明治大正昭和——記者生活二十年の記録』大空社、1993年、158-159頁。

[120] 出典／荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975年、347頁。

[121] 出典／荒畑寒村『寒村自伝』上巻、岩波書店、1975年、377頁。

[122] 出典／「『青鞥社』のころ（二）」『世界』第123号、岩波書店、1956年3月、138-139頁。

[123] 出典／『私の履歴書』（文化人6）日本経済新聞社、1983年、34-35頁。

若き日の彫刻家の朝倉文夫は、越堂をはじめ、紅吉や田村俊子などとも近所付き合いをしていたらしく、引用文はそのころの回想である。その後朝倉は、一九一三（大正二）年秋の第七回文展に、越堂の父親の倉松をモデルにした《尾竹翁》を出品することになる。そのことを考えると、ちょうどこのころから、しばしば朝倉は越堂宅を訪れていたのかもしれない。数年前の二〇代半ばという早い時期に、すでに彼は、「アルバイトで得た金で、その後ずっと住んでいる谷中天王寺の地にアトリエを新築」（『私の履歴書』（文化人6）日本経済新聞社、1983年、29頁）していた。

第一二節 青鞥社退社の意向を表明する

[124] 出典／「東京觀（三十） 新らしがる女（一）」『東京日日新聞』、1912年10月25日、金曜日。

小野賢一郎が、一〇月二八日を除く一〇月二五日から三一日まで『東京日日新聞』の「東京觀」に「新らしがる女」と題して六回にわたって連載記事を書くことになるが、引用文は、「新らしがる女（一）」の書き出しである。らいてうとの最後の確執、そしてさらに青鞥社退社へと進む、紅吉にとって、感情の横溢で塗り染められた悲劇の一週間が、いよいよこうしてはじまる。

[125] 出典／「東京觀（三一） 新らしがる女（二）」『東京日日新聞』、1912年10月26日、土曜日。

[126] 出典／「東京觀（三一） 新らしがる女（二）」『東京日日新聞』、1912年10月26日、土曜日。

引用文中、「三晩ばかり泊りました」と、紅吉は述べているが、これは、事実かどうかは疑わしい。というのも、注[81]によれば、らいてうは、「翌朝帰りました」と書いてい

るからである。

さらに加えれば、引用文中、「私は決して偽は申しません」と、紅吉は述べているが、これも、事実かどうかは疑わしい。というのも、同じ時期に、「自分以外の人達には平気で偽をついてみます」（紅吉「歸へつてから」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、131頁）と書いているからである。これほどの欺瞞に満ちた明白な虚偽はないであろう。

それぞれの該当箇所の注記においてすでに指摘しているように、実際に五色の酒を飲んだのか、それとも飲んでいないのか（注記〔87〕参照）、大文字楼には、三人で行ったのか、それとも五、六人でいったのか（注記〔79〕参照）、さらには、大文字楼には一泊だけしたのか、それとも三泊くらいしたのか（注記〔126〕参照）、それどころか、そもそも吉原登楼のきっかけは、紅吉が竹坡に願い出た結果なのか、それとも、竹坡自身が進んで青鞥社の社員を案内しようとした善意的な行動だったのか（注記〔83〕参照）、加えれば、自らを、うそをつく人間として認識していたのか、いや、そうではない自分を確信していたのか（注記〔126〕参照）、紅吉（一枝）の書く文や発話には、明らかに、多くの矛盾や齟齬が見受けられる。

〔127〕出典／「東京観（三五） 新らしがる女（六）」『東京日日新聞』、1912年10月31日、木曜日。

実は、「東京観（三五） 新らしがる女（六）」における退社表明に先立って、『東京日日新聞』は、紅吉の退社の意向を記事にしている。というのも、「東京観（三三） 新らしがる女（四）」に目を向けると、別稿のかたちをとって、前回の記事のなかの文言に対する二点の訂正が記載され、それに続いて最後に、「紅吉は今月限青鞥社を退くようです」（「東京観（三三） 新らしがる女（四）」『東京日日新聞』、1912年10月29日、火曜日）と書かれてあるからである。おそらく、前号を読んだ紅吉が、小野に連絡をとって修正の申し出をし、あわせて自分の退社の意向を伝えたのではないかと推量される。

〔128〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、75-77頁。

この夏の奥村博の出現以来、らいてうと紅吉の「同性の恋」には、すでに亀裂が入っていた。したがって、「距離をおきたいという気持ち」の内実は、らいてうにとって、もはや紅吉がお荷物に感じられるようになったことを意味するのであろう。そうであれば、この「新らしがる女」の連載は、紅吉に青鞥社からの引退を勧告し、さらには「同性の恋」の清算を告知するうえでの絶好の口実をらいてうに与えたのではないだろうか。

〔129〕出典／紅吉「群集のなかに^{まご}交つてから」『青鞥』第2巻第11号、1912年11月、97-99頁。

〔130〕出典／尾竹紅吉「冷たき魔物」『青鞥』第2巻第11号、1912年11月、ノンブルなし。

この『青鞥』一月号には、「群集のなかに^{まご}交つてから」と同じく、「冷たき魔物」と題された詩も掲載されており、事実上この詩も、紅吉の青鞥社退社の辞となるものであった。注〔102〕の引用文に認められる、「罪はないがきつとこの復讐はするつもりです。……広岡〔らいてう〕を私は恋しています」と書かれた、しげり（紅吉）から浩（奥村博）へ宛てた手紙の末尾の差出人名は「モンスター」となっている。一方、詩のなかの「冷たき魔物」は、らいてうのように読める。そうであるとすれば、茅ヶ崎での悲劇の一夜以来、紅吉のな

かには、「モンスター」である自分と「魔物」であるらいてうとが同時に住み着いていたことになる。「モンスター」は、「魔物」によって産み落とされた「赤ん坊」であり、不実なことに最後には、「魔物」は自分の「子供」の生贄を食いちぎろうとしている。「冷たき魔物」という詩は、一四の連から構成されているが、引用しているのは、最初の連、第三連と第四連、そして最後のふたつの連である。

この詩の最後には、「拾月二拾九日文祥堂の二階で」と付け加えられている。それから推測すると、『青鞥』一二月号の最後の編集作業のさなかに、そしてまた、『東京日日新聞』の「新らしがる女」の連載のさなかに、この詩はいつきに書かれたことになる。注〔93〕の引用文にみられるように、らいてうは紅吉のことを「私の少年」と呼んだ。一〇月二九日の祥文堂の二階には、ほかの男性（女性のごとき男性）に心を奪われたことに由来する母親（父親のごとき母親）の残忍さと、それに加えて、その母親から自分の行為を無分別なものとしてなじられた際に被った傷心とに耐えかねて、黒燐石のなかに身を隠す母親に「さようなら」といいながら死んでゆく少年が無残にも横たわっていた。

注〔96〕の引用文にあるように、らいてうは、紅吉との恋愛を「同性の恋」という表現でもって理解しようとした。おそらくこの「同性」とは、女性間の同性を指すだろう。らいてうは、「同性の恋」という用語を使う一方で、紅吉を「私の少年」と呼ぶ。かくして、らいてうの紅吉に対する同定は、「男」と「女」のあいだを揺れ動く。

他方で、紅吉の視点に立ってこの「冷たき魔物」と題された詩を読むと、明らかに紅吉は、自分自身を赤子に、らいてうをその母親に見立てている。そうであれば、紅吉にとってのふたりの愛は、対等な同性同士の愛というものではなく、血を分けた親と子に存在するような「母子愛」ということになるだろう。おそらくここに至って、らいてうの認識と紅吉の認識との齟齬が顕在化した可能性がある。らいてうの視点にとってみれば、確かに「同性の恋」の破局であろう。しかしながら、紅吉の観点に立てば、「母子愛」の崩壊を意味するのである。

ここでさらに、もう一步踏み込んでみよう。注記〔100〕で考察しているように、らいてうの性自認が「男」に近いものであり、他方、注記〔83〕において指摘しているとおり、紅吉の性自認が「男」であったとするならば、どうであろうか。この「同性の恋」の当事者は、外見上は女性間の同性愛者（レズビアン）のように見えるが、実質的には、男性間の同性愛者（ゲイ）を無意識のうちにも演じていたことになる。つまり、この詩のなかで主題化されている「母子愛」は、表面的には、日常にみられる観念的な虚構の産物としての姿をもつも、実のところは、それを反転した「父親と息子の愛」を構成していた可能性が残る。そうであるならば、「秘密から生まれたお前」である父親の「魔物」と「虚偽から生れた私」である息子の「モンスター」の生と死をかけた闘いが、この「冷たき魔物」の深層部分における主題だったということになる。ひとことでは表現しがたい、両者のセクシュアリティが奏でる複雑さと混沌さが、ここに横たわる。

すでに注記〔100〕において述べているように、「男性のごとき女性」（紅吉）との「同性の恋」は、らいてうの面前に「女性のごとき男性」（奥村博）が出現したことにより、あっけなく終局を迎えた。そして、らいてうは、その後奥村との安定したパートナーシップを構築していった。一方、その後の紅吉（一枝）はどうか。同性へ向かう一枝の関心は、決して一過性のものではなかった。結婚後も、さらにはそののちの別居後も、その生涯において、

女性の美しさや才能に魅了されてゆく。しかし、そうしたなかにあつて一枝は、母親的（父親的）存在の女性を愛することは二度となかった。あくまでも「男」として、美貌の若い才女を愛した。このことからいえることは、らいてうとのあいだに見出していた性愛の形式は、決して自己の本来的なセクシュアリティを満たすものではなかったということであろう。

結果的にこの出来事は、自己のセクシュアリティに関する内省の機会を、その後のふたりにもたらすことになった。らいてうの端書きが付けられた、訳文「女性間の同性恋愛——エリス——」が『青鞥』に掲載されるのが、一九一四（大正三）年の四月号（第四巻第四号）においてであり、その端書きのなかでらいてうは、自身の関心がこの問題へと至った経緯を披歴する。他方、富本憲吉との結婚後、最初に発表した本格的な一枝のエッセイが、一九一七（大正六）年の「結婚する前と結婚してから」（『婦人公論』一月号）であった。そのなかで一枝は、結婚する前の青鞥時代の生活を懺悔する。

〔131〕出典／「東京観（三六） 紅吉より記者へ（上）」『東京日日新聞』、1912年11月1日、金曜日。

〔132〕出典／「東京観（三七） 紅吉より記者へ（下）」『東京日日新聞』、1912年11月2日、土曜日。

第一三節 特異な自己のセクシュアリティをほのめかす

〔133〕出典／「編輯室より」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、124頁。

引用文中の「勝ちやん」とは、小林哥津のことか。この引用文の前に、編集者による、「紅吉と勝ちやんは此の頃浅草の銘酒屋の女にのぼせてゐる。昨日も二人で出掛けたのだそうだ。今朝もこんな葉書を受取つた」という文言がつく。

この引用文でとくに着目しているのは、「私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にゐつた」と述べている点である。セクシュアリティに関する違和感を、紅吉（一枝）は「心の病氣」としてとらえているのである。今日の心理学や医学の見地においては、これをもって「病氣」とみなされることはほばない。

加えて、この引用文で着目しているのは、「私は立派な男で有るかの様に、懐手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その氣持のいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た」と述べている点である。この告白により、紅吉（一枝）の性自認が「男」であり、性的指向が「女」であったことは、ほば疑いを入れないであろう。そしてまた、この開陳をもって、無意識下の間接的な「カミング・アウト（coming out）」行為とみなすこともできよう。

〔134〕出典／紅吉「歸へつてから」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、131頁。

この引用文でとくに着目しているのは、「その氣分は幼い時からずっと今迄續いて來てゐたのです」と述べている点である。いつのころから特異な自己のセクシュアリティにかかわる「その氣分」が自覚され出したのかについては、一枝は何も述べていないので特定はできないが、資料的には、注〔23〕においてすでに指摘しているように、夕陽丘高等女学校時代に美しい女性の音楽教師を好きになった出来事に、「その氣分」の最初の発現を見ることができると述べている点である。資料的には、注〔24〕において見ることができるよう、夕陽丘

高等女学校時代に、「うちにオルガンある」と、友人たちにうそをついた出来事が、その最初の事例となる。この行為は、一枝の性格を構成するひとつの要素として、生涯を通じて折に触れ発露する。

[135] 出典／「東京観（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』、1912年10月27日、日曜日。

この引用文でとくに着目しているのは、「それは今は言へません……死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」と述べている点である。この発話部分から、紅吉（一枝）は、特異な自己のセクシュアリティについて、今後生涯にわたって「カミング・アウト」するつもりはないことを心に刻んでいたことがわかる。

以上に述べた注記[133][134][135]の三つの根拠から、紅吉（一枝）は、身体的には女性であるも性自認においては男性であるような、今日的用語法に従えば、FTM（Female to Male）のトランスジェンダーの人間であったと推断できる。当時は隠語として「男^{おとこ}女^{おんな}」あるいは「おめ」が使用されていた。

他方、女性間の同性愛（レズビアン）は、この国にあつては当時、「といちはいち」「おめ」「でや」「おはからい」「お熱」「御親友」といった隠語で呼ばれていた。しかし、注[40]の引用文のなかにおいて認められるように、確かに一枝の性的指向は小さいころから常に美しい女性に向かっているものの、異性装の着用や男性名の使用、さらには酒場通いや遊郭での享樂などから判断すると、一枝の性自認はほぼ間違いなく「男」であった可能性があり、その場合、一枝とその女性との愛は、決して女性と女性のあいだに生じた同性愛ではなく、見まごうことなく、男性と女性との結び付きを示す異性愛を構成することになる。そうした一枝の「異性愛」は、結婚後も相手を替えながら晩年まで続く。

しかし、一枝自らが、「男女」ないしは「おめ」であること（つまりはトランスジェンダーの人間であること）を公表すること（つまりは正式に周囲にカミング・アウトすること）はなかった。したがって、本人以外の者がはっきりとそのように決めつけることはできない。それでも、上に挙げた幾つもの関連する資料の分析結果から、そのように推断するには十分な合理性があり、逆に、何らかの配慮が働き、そのことを隠蔽してしまうようなことがあれば、正しい一枝像は勢い遠のき、それに代わり、人の手によって捏造された虚偽の一枝像が出現する結果を招く。そこで、これ以降の一枝がたどる人生（つまりその人の言動および書き残したものの総体）を見てゆく場合には、ともに本人が明確に自覚するところである、「自分以外の人達には平気で偽をついてゐます」という性格上の働きと、「苦しい苦しい心の病氣」としての心身の動きとに十分に注意を払ったうえで、慎重にも読み解く必要がある。

それではついでながら、蛇足は承知のうえで、紅吉（一枝）のセクシュアリティに関連して、以下に三点、この場において紹介しておきたいと思う。

一点目は、「男女」や「おめ」という用語の使用例に関してである。

紅吉（一枝）のセクシュアリティを、「男女」や「おめ」（あるいはトランスジェンダー）といった用語でもって描写された事例は、現時点において、史的資料においても学術論文においても、見出すことはできない。しかし、小説という形式においては存在する。富本一枝に魅せられた吉永春子は、一枝をモデルにした小説『紅子の夢』を上梓する。そのなかの以下の引用文中の湯浅の発話部分に「男女」の用例を見出すことができる（吉永春子『紅子の夢』講談社、1991年、13-14頁）。場面設定は、昭和二九年に開催された「世界婦人大会」

の受付ロビー。登場人物は、夏子が、当時女子学生であった吉永春子で、会場の受付を手伝っている。大竹紅子が尾竹紅吉（富本一枝）、富田龍彦が、その夫の富本憲吉であろう。湯浅芳子は実名で登場する。

「あの大柄な方は、どなたですか」

夏子は近くに坐っている、一見男とも見間違いうロシア文学者の湯浅芳子にたずねた。

「なんだい、君、知らないのかい」

彼女は断髪のをゆすり、懷手をしたまま、タバコの煙を天に吐いた。

「あの女はね、明治のブルー・ストッキング、“青鞥”の大竹紅子だよ」

「大竹紅子」

夏子は、思わず小さな声をあげた。

「男のような緋と、袴をはいて、さっそうとして生きたあの人ですか」

「そうだよ。彼女は、“青鞥”、〈ブルー・ストッキング〉のマスコット・ガール。いや、違う。そんなもんじゃあない。台風の眼だった」

湯浅芳子は、続けざまに、タバコの煙をプカプカと吐いた。

「紅子は、変っていた。もっとも“青鞥”の女達は皆変っていた。明治というと、箸の上げ下げ一つまで、うるさくいわれ、女は女中か、子供を産む道具ぐらいにしか思われていなかったんだ。そんな中で女がね、“自立”とか“解放”とか叫ぶなんて大変なことなんだ。そんなことを口走ろうものなら、狂ってるとか、^{おとこおんな}男女とか言われてね、社会から抹殺されたもんなんだ」

「男女？」

「そう、女の格好をしているけど、本当は男だろうって、失礼な話さ。“青鞥”の女達は、そんな陰口を山と言われ、面と向って、石も投げられ、罵倒もされたもんだ。中でも紅子に対しての攻撃は、ひどかった。紅子は、天真らんまん、行動的だった。好奇心も強かったし。一度、浅草のバーに足を踏み入れたんだ。それを新聞記者に見つかって、“女だてらに、毎晩、五色の酒を飲み干し、あげくの果、遊郭に行つて、女を買った”と書かれちゃって、そりゃあ、ひどいもんだった」

「先生、その時、お幾つでした？」

「十五歳で、女学生だった。遠くから“青鞥”に憧れていたんだ」

「それで紅子さんは」

「うん」

湯浅芳子は、一寸声をつまらせた。

「その後、陶芸家の富田龍彦と結婚してね。……。もっとも今は別居中だ。可哀想に捨てられたんだ」

彼女は言い終ると、男物のステッキをついて、プイと席をたった。

「遠くから“青鞥”に憧れていた」、当時一五歳だった湯浅は、京都市立高等女学校に在籍し、自分のセクシュアリティと重ね合わせるかのようにして、東京での紅吉の言動を注視していたにちがいがなかった。

二点目は、湯浅芳子の自己のセクシュアリティを巡る違和感についてである。

湯浅芳子と中條百合子（のちに結婚により宮本姓へ改姓）が野上彌生子の家ではじめて会って一箇月と少しが過ぎた、一九二四（大正一三）年の五月二一日と二二日にまたがって書かれた、湯浅から中條に宛てて出された手紙（黒澤亜里子編『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』翰林書房、2008年、41頁）には、このようなくだりがある。

私の性格のかなり複雑なことはあなたも御存じですが、そのあなたのご存じよりももっとも私にはこみ入った矛盾だらけの不幸な生れつきがあるのです。生理的には一通り何の欠点もない女ですが、しかも女でいて女になりきれないというところ、（まだまだ言い足りないが）すべての不幸がまず一番ここにあるのではないかとおもいます。

人生にとって一番意義のある得難く尊いものは何ですか？あなたはなんだとおもいます。芸術ですか、愛ですか。

その何れにも見離された人間は何を目的に生きるのです。まして私は愛を知らないんじゃない！

もうやめ、やめ、こんなこと。

湯浅が告白（カミング・アウト）しているのは、明らかに、女が女になりきれない女性の心の性にかかわる精神的苦痛についてであろう。トランスジェンダーを、のちになって「選択」したものではなく、生まれながらにして本人が備え持つ「本性」であるという立場に立つならば、これを自分の意思や努力によって変更したり、捨て去ったりすることはもはやできず、何を目的に生きればいいのかを、自問するも、答えはない。その苦しみを湯浅は率直に中條に訴えているのであろう。

この手紙から九年後、官憲の手により一枝は連行される。一九三三（昭和八）年八月一三日の『週刊婦女新聞』は、「富本一枝女史檢舉——警視廳に留置、転向を誓ふ」という見出しをつけて、次のように報じた。

青鞥社時代の新婦人として尾竹紅吉の名で買った現在女流評論家であり美術陶器製作家富本憲吉氏夫人富本一枝女史は過日來夫君と軽井澤に避暑中の處、去る五日單身歸京した所を警視廳特高課野中警部に連行され留置取調べを受けてゐるが、女史は先週本欄報道の女流作家湯浅芳子氏と交流關係ある所から、湯浅女史を中心とする女流作家の左翼グループの一員として約百圓の資金を提供した事が暴露したもので、富本女史は野中警部の取調べに對して去る七日過去を清算轉向する事を誓つたと。

一枝と湯浅芳子が、面識をもつようになったのは、ほぼ間違いなく『女人藝術』を通じてのことであつたろうと思われる。当時、『女人藝術』は、文学を志す女たちのマルクス主義を介する人間關係の構築の場となつてゐた。資料上には何も根拠となるものは現われていないが、一枝と湯浅のふたりが運動資金を巡って政治的友好關係にあつたことを踏まえるならば、ふたりに共通してゐたであろうセクシュアリティの問題について、兩人が胸を開いて語つてゐた可能性は否定できない。

最後の三点目は、FTMのトランスジェンダー男性の性行為に関連してである。

紅吉（一枝）は、らいてうとの性愛について、注〔72〕の引用文にあるように、「抱擁と接吻のみ消ゆることなく與えられたなら、満足して、満足して私は行かう」と述べている。一方のらいてうは、注〔95〕の引用文にみられるように、『『淋しい？どうした。』と言ひざま私は両手を紅吉の首にかけて、胸と胸とを犇と押し付けて仕舞つた」と書く。

一生涯紅吉（一枝）は、自分のセクシュアリティの特異性について、正式に周囲にカミング・アウトすることはなかったが、この間たびたび注記において論証しているように、FTM のトランスジェンダーの人間であった可能性は極めて高い。そこで参考になるのが、杉山文野の言説である。『ダブルハピネス』の著者の杉山は、自身が FTM のトランスジェンダー男性であることをこの本のなかで広くカミング・アウトし、自己の性的行動についても率直に告白している。紅吉（一枝）が、「栄山」のような紅灯のちまたの遊び女と、あるいは、愛の対象としていた月岡花子や大川茂子のような女学生と、どのような性行為を楽しんでいたのかは、資料上、具体的には何も正確にわからない。しかし、以下の杉山の自己体験が、推量するためのひとつの示唆的素材を提供する（杉山文野『ダブルハピネス』講談社、2006 年、178-181 頁）。

肌と肌が触れ合う気持ちよさ、好きな人と心がつながる安心感、あんなに楽しくて、気持ちいいものは他にない。しかし、セックスをすればするほど、自分の体が男ではないという現実を痛いほどつきつけられる。体が女だという、いまだに信じられない信じたくない現実を実感する。ところが、彼女を求める僕の気持ち、性欲は間違いなく男性的なものであり、自分の内側の男性的な部分を再確認するのだ。（中略）

最初は服を脱ぐことすらできず、とてもセックスなんて呼べないようなものだった。たとえ彼女であっても……いや、彼女だからこそ、自分の「女」である部分、こんな恥ずかしい体をさらすことなんてできなかったのだ。自分は服を着たまま、一方的に相手を脱がせ、一方的に攻めるだけ。彼女がイッてしまえばそこで終わり。相手に体を触られるのは苦痛だった。彼女さえ満足なら自分も満足だと思っていたし、そう自分に言い聞かせていた。けれど、もちろん満足できるはずがない。（中略）

大学に入る頃になってやっと服が脱げるようになった。最初はお酒の力を借りたり、電気が消えていたりしなければダメだったけど。触られるのにも、少しずつ耐えられるようになった。

何が一番苦痛なのか？

気色悪い自分のオッパイの存在もそうだが、やはり、一番辛いのはペニスがないということだろう。彼女たちの多くは「ペニスに頼って男の勝手なセックスなんかより全然いい」と言ってくれた。しかしそうは言われても、やはりペニスがなければ満足できないのではないかとってしまう。立たなくなってしまうという男性の機能障害は、男としてだけでなく人間としての自信も失ってしまうほどショックなことだと聞くが、もともとペニスのない僕に自信なんてものはかけられない。自分の男としてのアイデンティティなんてズタズタだし、存在自体がコンプレックスなのである。

気持ちが高まってくると、あそこが勃起するような感覚になる。今まで一度も体験したことがないはずの「男体」のイメージが鮮明になってくる。しかし、そこにはペニスではなく、彼女と同じものが存在する。触れられるのにも慣れてきたとはいえ、やはり

いまだに体の気持ちよさよりも心の気持ち悪さが先行して、気持ちよくなれない。ところがそんな時、彼女以上に濡れていたりすることがある。そうになると、もうただただ自分の体に呆れるしかない。いったいなんなんだこの体は……どんなシステムでできているんだ？自分が「人間」として不良品であり、その存在が間違っていると思えない。

自分は欠陥商品なのか？

でなければこの矛盾や苦しみの意味がわからない。セックスをしている時ほど自分が嫌いになることはない。いろんな「壁」を乗り越えようと頑張っている自分がバカらしく思えてきて、もうすべてをあきらめたほうがよいと思ってしまう。生きる意味を失う。死にたい……。セックスをするたびに衝動にかられる。

僕のセックスは、気持ちが高まるだけ高まっても、終わりが来ない。高まった気持ちの行き場がない。相手に求めれば求めるほど手に入らず、すればするほど欲求不満になる。不満を満たそうとすればさらに不満はつり、そんなことの繰り返し。それでも僕は手に入るはずのない「何か」を求め、またセックスをする。

以上が、杉山文野の自らの性体験に関する言説である。一方、紅吉（一枝）の言説をいま一度、思い起こしてみよう。

「私にはちいさな時分から美しい女の人をみるのが非常に心持のよいことで、また、大變に好きだったのです。それで私の今迄の愛の對照になつてゐた人のすべては悉く美しい女ばかりでした」（注〔40〕の一部）。

「〔吉原での〕私の花魁は榮山さんと云ふ可愛い人でしたよ……私は眞實に身受がしたくなり茶屋へ歸つてから聞きますと千兩は掛かると云ふんです……若し男だったと男が羨ましくなりました、浅草の銘酒屋もよう御座いますネ、今度は呼れたら上つて見やうと思ひます」（注〔83〕の一部）。

「私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にゐつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの様に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その気持ちのいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た」（注〔133〕の一部）。

「私は誰も知らない、自分たった一人で大切にしてみゐる面白い氣分があるのです。……人が知つたら恐らく危険だとか狂人地味な奴だとか一種の病的だろうとか位いで済ましてしまふでしょう」（注〔134〕の一部）。

「私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」（注〔135〕の一部）。

自らが語る自身のセクシュアリティーにかかわる上記五つの言説の陰に隠された紅吉（一枝）の性行為の實際をあえて推量するとするならば、どのような図が描けるだろうか。時代も違い、個人差もあろう。しかし、杉山が告白する性体験と重なる部分も決して少なくはなかったのではなかろうか。

少し先走ることになるが、「冷たき魔物」の執筆からちょうど二年後に、そうした性自認と性的指向をもつ性的少数者（ほぼ間違いなくトランスジェンダー男性）である一枝が、富

本憲吉という多数者に属する男性と結婚する。一枝は、自身の特異なセクシュアリティを夫たる憲吉に告白するのだろうか。それとも、当時強固な社会規範となっていた「良妻賢母」という「女」に徹そうとして、そのなかに身を隠すのであろうか。その場合、果たして自己認識とは異なる性になりきることができるのだろうか。もしできなければ、どのような事態が待ち受けることになるのだろうか。一方の憲吉は、イギリスの地で触れた近代思想を、自分の「新しい芸術」のみならず、一枝との「新しい家庭」にも投影しようとする。憲吉は、一枝のセクシュアリティをどう理解するのであろうか。そしてまた、一枝の「旧い女」の本質部分とどう向き合うのであろうか。一枝と憲吉の結婚には、実はそうした複雑で解決が困難そうに見える問題群が最初から内包されていたのである。

第一四節 『青鞥』の表紙絵「アダムとイヴ」の製作

〔136〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、77頁。

〔137〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、252-253頁。

この再会がいつだったのかを正確に特定することはできないが、一九一三（大正二）年の『青鞥』一月号の表紙絵から「アダムとイヴ」に差し替えられていることから判断すると、青踏社を退社すると、すぐにも紅吉は、憲吉に面会の手紙を出し、その年（一九一二年）の遅くとも暮れまでには安堵村を再訪し、表紙絵の依頼をしたものと思われる。紅吉にとっても、またらいてうにとっても、この表紙絵の製作は、暗黙のうちにふたりの関係を何とかつなぎ止めておくためのわずかに残された唯一の手段だったのかもしれない。

〔138〕出典／「謂ゆる新しき女との対話——尾竹紅吉と一青年」『新潮』、1913年1月、104頁。

『新潮』の記者である「一青年」が下根岸の紅吉の自宅を訪ねてきたのは、一九一二（大正元）年一二月一〇日の午前一〇時のことであった。この引用文で注目されてよいのは、「新聞の三面記事や、人々の噂に創造された尾竹紅吉と、尾竹紅吉其の人の實體とは全然別個のキャラクターである」という、「一青年」が観察する、紅吉の性格についての記述箇所であろう。

他方、このころ一枝は、『青鞥』一月号の表紙絵のために「アダムとイヴ」の製作に入っていたものと思われる。

〔139〕出典／「謂ゆる新しき女との対話——尾竹紅吉と一青年」『新潮』、1913年1月、105-107頁。

この引用文でとくに注目されてよいのは、「貴方自分を世間の云ふ『新しい女』と自認して居ますか」という青年の問いかけに対して、紅吉は、「いゝえ、——世間で云ふ新しい女と云ふものは、よく分りませんが……私自身はどちらかと云ふと昔の女で、私の感情なり、行為なりは、道徳や、習慣に多く支配されて居る事を感じます」と、答えている箇所である。この発話により、紅吉自身、自らを「新しい女」ではなく、「昔の女」として認識していたことがわかる。母親の影響が大きかったものと思われる。

〔140〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、99頁。

一九一三年一月号の『青鞥』は、紅吉の「アダムとイヴ」に表紙絵が差し替えられた。他方、画像のみならず内容においても、「新しい女、其他婦人問題に就て」を「附録」として巻末に組み、創刊以来の文芸雑誌としての性格を保ちながらも、女性解放運動へ向けての機関誌的存在へと、この号から徐々に舵が切り替わることになる。

〔141〕出典／尾竹紅吉「藝娼妓の群に對して」『中央公論』1月号、中央公論社、1913年、186-189頁。

『青鞥』において発表されたものが主として詩、ないしは日記や手紙の形式をとった散文であったことを考えれば、この「藝娼妓の群に對して」は、それまでにみられなかった論説文であり、しかも、内容的には、はじめて婦人問題への関心を表出するものであった。半年前の吉原見学が下地となっているものと考えられる。

引用文の最後の「赤裸な原始に歸り作られたる性格の本質にとつて尊重仕合いたいと考える」という語句には、平塚らいてうの『青鞥』発刊の辞「元始女性は太陽であつた」を思い起こさせるものがあるが、他方、『青鞥』の表紙のなかに、アダムとイヴを描いたものがありますが、あれは富本が下絵を描いてくれたものを、私が彫ったのです」という一枝の回想と重ね合わせてみると、この最後の語句は、人間相互の原初的關係を、つまりは、一枝と憲吉のあいだにあって求められるべき男女の交わりの基本となる形式を、無意識的に先取りしたものとして読むこともできよう。そのような意味において、『青鞥』を飾った表紙絵「太陽と壺」のみならず、この「アダムとイヴ」も、らいてうと憲吉へ向けられたこの時期の一枝の自覚なき心象を直截的に投影し視覚化したものだったといえなくもない。

第一五節 第一三回巽画会絵画展覧会への出品作《枇杷の實》

〔142〕出典／「紅吉の繪の總見——畫界に珍らしい催し」『多都美』第7巻第7号、1913年4月5日。

『青鞥』の新年号の表紙絵のために「アダムとイヴ」を彫り、一方で『中央公論』の新年号の特集「閨秀十五名家一人一題」のために「藝娼妓の群に對して」を書き終わると、紅吉は、この年（一九一三年）の第一三回巽画会絵画展覧会へ出品するために《枇杷の實》と題された六曲屏風一双の製作に本格的に取りかかったものと思われる。この作品は褒状一等に入選した。昨年度の作品《陶器》が三等賞銅牌であったことを考えると、ひとつ下の受賞ではあったが、その間新聞にあって「五色の酒を飲み、吉原に遊ぶ新しい女」といったイメージでセンセーショナルな話題をふりまっていた紅吉の作とあって、世間の関心は高かった。そうしたなか、四月五日付の第七巻第七号の『多都美』は、紅吉の繪の總見が準備中であることを報じる。この作品の落款には本名の「一枝」が使われた。「紅吉」からの変身が意図されていたのか。あるいは、『青鞥』からの離脱が意識されていたのか。

〔143〕出典／「紅吉氏の繪」『多都美』第7巻第8号、1913年4月20日。

〔144〕出典／津田青楓「巽會展覧會を見て」『多都美』第7巻第8号、1913年4月20日。

〔145〕出典／黒田鵬心「清水町より 巽畫界展覧會を觀て」『多都美』第7巻第9号、1913年5月5日。

〔146〕出典／「紅吉の畫が賣れる——三百圓で花魁身受の噂」『讀賣新聞』、1913年4月8日。

この引用文では、「[絵の代金である] 三百圓は何うなるのかと云へば、今度紅吉が出す雑誌の保証金に充てるのだそうだ、花魁身受なぞと評判を立てゝ置いて、陰でペロリと舌を出す紅吉も女ながら人が悪い」という文言に、とくに注目されるがよい。「今度紅吉が出す雑誌」とは、その後一枝が創刊する『番紅花』を意味するであろうし、「花魁身受なぞと評判を立てゝ置いて」は、注〔83〕にある「私は眞實に身受がしたくなり茶屋へ歸つてから聞きますと千兩は掛かると云ふんです……若し男だつたらと男が羨ましくなりました」という文言に対応する。

第一六節 妹の福美への佐藤春夫の恋心

〔147〕出典／平塚らいてう自伝『元始、女性は太陽であった』第2巻、大月書店、1992年、101頁。

一枝は、根津神社に近い生田長江宅に寄寓し、「殆ど一ヶ月の間寢食を忘れて」、《枇杷の実》を製作した。すでにこのときまでに母親のウタと妹の福美も大阪を離れ、下根岸の地に合流していた。一枝が生田宅の一室をなぜそのとき間借りしていたのか、その理由はよくわからないが、家族の上京に伴い手狭になり、製作に集中できる部屋が必要とされたのかもしれない。あるいは、「紅吉の今の家は大變家相が悪くて長女が病死する」（「編輯室より」『青鞥』第3巻第1号、1913年1月、136頁）らしく、そのことを気に病んでのことであつたのであろうか。もっとも、その少し前、立ち退きを迫られていた生田は、次の借家として、根津権現上の高台に大小九室もある立派な二階建ての家を見つけると、その家賃の八〇円の支払いについて、当時慶応義塾の学生であつた佐藤春夫に、「無理をして六十円は出すが、あとの二十円のところを五円は[生田] 春月君に出させる。あとの十五円で君はその家の一番気に入った一室に来て住む気はないか」という相談（佐藤春夫『詩文半世紀』読売新聞社、1963年、60頁）をもちかけ、佐藤はそれに同意している。この新たに賃貸された生田家の豪邸に一枝が同居するにあたって、そうした事情がひょっとしたら隠されていたのかもしれない。

〔148〕出典／尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、256頁。

〔149〕出典／「泉と少女」『佐藤春夫全集』第1巻、講談社、1966年、55-56頁。

〔150〕出典／島田謹二「解説」『佐藤春夫全集』第1巻、講談社、1966年、629-630頁。

第一七節 青鞥社からの最終的な退場

〔151〕出典／尾竹紅吉「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」『中央公論』臨時増刊婦人問題号、1913年7月、174-181頁。

らいてうは、これをどう讀んだであろうか。ここに至って紅吉は、ふたりの愛に向う様相を内省的に位置づけると同時に、破局に際してのらいてうの忍従の姿に思いを馳せる。何か、母親（あるいは父親）をいたわるかのような、かつての無邪気な少年の、成長ののちに現われる大人びた気配が、この一文「自叙傳を讀んで平塚さんに至る」には漂っている。しかしながら、こうした紅吉のらいてうに対する冷静で理性的な距離の置き方と、そのときの『青鞥』が発信した距離の置き方とでは、大きく異なっていた。翌月に刊行された『青鞥』八月号の「編輯室より」の記述に、それを見ることができる。たとえらいてうの筆になる記述で

はなかったとしても、あまりにも形式的で事務的であり、その分紅吉に冷たかった。

[152] 出典／「編輯室より」『青鞥』第3巻第8号、1913年8月、195頁。

こうして、表紙絵「太陽と壺」と異画会への出品作品《陶器》にはじまり、「五色の酒」「吉原登楼」「同性の恋」そして「恋の破綻」を経て、表紙絵「アダムとイヴ」の製作と異画会への《枇杷の實》の出品をもって、紅吉の青鞥社時代は最終的に幕を閉じ、七月の下旬、紅吉いや一枝は、長野、新潟、そして秋田への旅に出るのである。

中山修一著作集 17

ふたつの性——富本一枝伝

本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯

付録

目次	一
付録一 私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）	二
付録二 私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）	三一

凡 例

- 一．本文中『 』は書名、雑誌名、新聞名を示し、「 」は論文や詩、記事等の表題を表わしている。また、強調すべき固有の事象についても「 」が用いられている。
- 一．本文中《 》は作品名を示し、〈 〉は建物の名称を表わしている。
- 一．本文中の【 】は図版の参照番号を指し示している。
- 一．引用文および引用語句内の〔 〕は本著作集の著者による補足である。

付録一 私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）

はじめに——私の著述に向けられたある批判とは何か

「ある批判」とは、二〇二三（令和五）年二月刊行の『大東文化大学紀要 人文科学』（第六一巻）に所収されている、渡邊澄子執筆の「富本一枝におけるセクシュアリティ」と題された「論文」のなかにおける次の言説です。

一枝におけるレズビアニズムを辻井喬の『終りなき祝祭』、時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の「著作集 3・4・11 巻」は一枝を性的墮落者と決めつけて猥褻に描いているが、一枝は中山が決めつけているような猥褻な「性的転倒者」だったろうか¹。

この渡邊澄子の「富本一枝におけるセクシュアリティ」は、大東文化大学機関リポジトリにおいても公開され、以下のとおり、オンラインで読むことができます。

<https://opac.daito.ac.jp/repo/repository/daito/54259/AN00137137-20230228-025.pdf>

他方、批判の対象とされている「著作集 3・4・11 巻」は、以下のとおり、神戸大学学術成果リポジトリにおいて閲覧が可能となっています。

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476416>

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476417>

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492136>

それではこれより、渡邊澄子「富本一枝におけるセクシュアリティ」の一文に関しまして、批判的に検討してゆきたいと思います。

第一節 「論文」の構成要件に関する私の見解

私の著述に対しましての、上記の批判的文言が含まれる、渡邊澄子の「富本一枝におけるセクシュアリティ」の最初の頁の上部には、見てわかりますように、「論文」という文字が印字されています。これは、この文が研究論文（学術論文）であり、形式と内容とにかかわってそれにふさわしい作物として、掲載誌の編集委員会において査読ののち、受理されたことを意味します。

それでは、「研究論文」とは、一体どのようなものなのでしょうか。以下に、その要件につきまして私見を述べます。一般的にいて、とりわけ人文系の主として文献や資料に根拠を置いて過去の事象を考究しようとする研究論文は、形式上「はじめに（導入／意図）」、「本論（実証／分析）」、「おわりに（結論／考察）」の三つの要素から構成されます。「はじめに」において、取り扱う主題にかかわってその背景や問題の所在などを明確化し、次に、同じ主

題を扱った過去の論文を時系列に沿ってリビューし、最後に、本論文がどのような歴史上の文献や資料等に則り、いかなることを明らかにしようとするものであるのかを、つまりは、研究の手段や目的にかかわる新規性等について明示することになります。「本論」にあっては、全体的構成を念頭に幾つかの論点に分節化したうえで、証拠（根拠）となりうる一次資料を使って、主題の内容や構造や意味などを対象に論証なり実証なりを進めてゆき、「おわりに」において、明らかになった事柄をまとめて結論としたうえで、それに依拠して、その含意するところや、その主題に備わる将来的意義などを考察します。そして末尾において、引用に使用した一次資料の出典（検証に際して必要となる、たとえば、著者名、論文名、掲載雑誌名、発行所名、発行年、引用頁などにかかわる正確なデータ）を「注」として一覧にするとともに、あわせて、関係する、あるいは根拠となる視覚資料である図版を一括して整理することになります。こうして、より精緻な科学的手続きをとることにより、次に来る研究者はみな等しく、同じ主題について同じ一次資料に基づいて分析した場合には、ほぼ同じ結論に達することが予見され、研究者間にあってその後共有されることになるであろう、検証可能な学術的知見なり普遍的眞実なりの産出が可能となるのです。いうまでもなく、以上概略的に述べた研究論文の執筆上の手法は、おおかた大学における卒業論文の段階から適応されます。

第二節 渡邊澄子「富本一枝におけるセクシュアリティ」の「論文」としての不備

それでは、渡邊澄子の「富本一枝におけるセクシュアリティ」が、そうした「論文」の要件を満たしているかどうかを見てみたいと思います。結論からいえば、渡邊の文は、私が考える「論文」の要件から大きく逸脱した、単なる作文か感想文の類になっているといわざるを得ません。それでは、渡邊の文の弱点につきまして、ふたつの観点から少し検証します。

まず一点目の弱点は、「はじめに」「本論」「おわりに」という、論文に不可欠な構成要素が、はっきりと分けられていないことです。そのため、この研究の目的と方法が判然とせず、本論も、漠然と一枝の生涯をなぞったにすぎず、したがって、そこから得られる結論も、極めてあいまいなものとなっています。具体的に見てみます。渡邊は、この「論文」をこのような言葉で書き出します。

尾竹紅吉から富本一枝となって流さねばならなかった涙について「ジェンダー・セクシュアリティ研究」における「クイア研究」の視点を視野に収めながら考えてみたい²。

一般的にいつて、一枝の「流さねばならなかった涙」の分析をこれから執筆する「論文」の目的に選び、それについて論究しようとするのであれば、「流さねばならなかった涙」について一枝は、実際にどう告白しているのかを、つまりは、これから分析に供しようとする研究対象を、著者はまずもって特定し明示しなければならないと、私は考えます。しかし渡邊は、それについて何も書いていません。つまり、「涙」の存在を明らかにしないまま、明らかに「涙」があったかのごとくに、それを身勝手にも前提として、延々と一枝の生涯を書き継いでいるのです。一言でいえば渡邊の文は、研究対象なき、ただの漫然とした散文となっているのです。

しかしながら、一枝が書き残したものを私が調べる限りでは、一枝は、以下のとおり、一箇所において、自分の流す涙について語っています。

あきらめてあきらめてたそこから生まれてくるよろこびを見ると、自分ひとりの心に深くしりぞき、しづかに、あつい涙をながします。若い頃に比べて、なんと云ふちがつた心のもちかたか、思いかへしてみると不思議なものです³。

一枝が書いた最初の小説である「貧しき隣人」が、一九二三（大正一二）年の『婦人公論』三月号に掲載されます。「貧しき隣人」が公表されてから間を置くことなく、同年の五月二十九日に、一枝は、「あきらめの底から」という題をもつ短いエッセイを書き上げ、同じ『婦人公論』が企画する特集「生の歡びを感じずる時」へ寄稿します。上の引用文は、その文のなかの一節です。明らかに、この「涙」は、「あきらめの底から」小説が書けたことに対する「生の歡びを感じずる時」に流した「涙」でした。渡邊は、この「涙」について、いっさい触れていません。

もっとも、私の知る限りでは、一枝は、別の次元での「涙」と対峙していました。それは、生涯抱え持っていた自身のセクシュアリティーにかかわるものでした。「涙」という文字は使われていませんが、それに関連する深刻な言及が、一枝について書き残されたもののなかや、一枝本人の書き残したもののなかの、至るところに表出されています。ここでは、そのうちのふたつの例を紹介します。

最初の事例は、一九一四（大正三）年一〇月二七日に、富本憲吉と尾竹一枝（青鞥社時代に使用した雅号は「紅吉」）は結婚しますが、その直後に雑誌に掲載された暴露記事です。これは、一二月一日発行の『淑女畫報』一二月号に掲載された「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」という題がつけられた記事で、そのなかで、ふたりの結婚の陰にあって、紅吉に愛された月岡花子と大川茂子のふたりの女性が悲しみの涙を流していることが暴露されます。その経緯を詳述したあと、その記事は、「紅吉女史は女か男か」という見出し語に続けて、このように、紅吉のセクシュアリティーを描写するのです。

紅吉女史は女か男か？この質問ほど世に笑ふべき、馬鹿らしい、不思議な質問はありません。然しそれ程紅吉といふ女は不思議な女とされてゐるのです。彼女は勿論女である、而も立派な女性であることは争はれない事實です。然し彼女の一面に男性的なところのあるのも事實です。先づ第一にその體格の如何にもがつしりとして、あくまでも身長の高い所に『男のやうだ。』と云ふ感じが起ります。セルの袴に男ものゝ駒下駄を穿いて、腰に印籠などぶら下げながら、横行闊歩する所に、『まるで男だ。』と云ふ感じが起ります。太い聲で聲高に語るところ、聲高に笑ふところ、其處にやさしい女らしさと云ふ點は少しも見出すことは出来ません。男のやうに女性を愛するところ、その女性の前に立つて男のやうに振舞ふところ、それは彼女が愛する女と楽しい食卓に就いた時のあらゆる態度で分ると云つた女がありました。甘い夜の眠りに入る前に男のやうに脱ぎ棄てた彼女の着物を、彼女を愛する女が、さながらいとしい女房のやうにいそいそと畳んだと云ふことを聞いたこともありました。

実際彼女は男のやうに我儘で、男のやうにさつぱりとして、男のやうに無邪氣で粗野な一面を持つてゐるのです。それがやがて彼女を子供のやうだとも云はしめ、新しい女といふ皮肉な名稱を彼女に與へた動機ともなつてゐるのです。そしてまた彼女が同性を惹き付ける點もおそらく其處にあるのです⁴。

この暴露記事が世に出て数箇月後、ふたりは東京での生活を切り上げ、憲吉の生家のある大和の安堵村に居を移すのでした。若くて美しい女性に向かう一枝の「落ち着きのない心」を二度と惹起させないための転居だったものと思われます。

ふたつ目の事例は、一枝が書く自身のセクシュアリティについての描写です。以下の引用文は、一九二七（昭和二）年一月刊行の『婦人之友』に掲載された「東京に住む」のなかの一節です。一枝の「落ち着きのない心」が再燃して、その結果、富本一家は、安堵村から東京の千歳村への転地を余儀なくされます。

かつて若かつた頃、なにかにつけて心の轉移といふ言葉を使つたものであるが、まことの轉移といふものは、並大抵の力では出来るものではなく、身と心をかくまでも深く深く痛め悩まして、身をすてゝかゝつてはじめて出會ふものであり行へるものであることを沁染と知ることが出来た⁵。

一枝は「心の轉移」という言葉を用いています。一枝が女性同性愛者（レズビアン）であったとすれば、彼女にとってこの言葉は、同性愛から異性愛へと性的指向を「轉移」させる試みを示唆する心的な用語法だったのかもしれませんが。それとは違って、一枝が、肉体的には明らかに女性でありながらも、心の性を男性として自己認識するトランスジェンダーであったとするならば、一枝の女性に向かう性的欲求や恋愛感情は当然異性愛ということになり、したがってこの言葉は、心の性を体の性へと「轉移」させることを意味する彼女の内に秘められたキーワードであったにちがいません。しかし、どちらにしてもそれは、「並大抵の力では出来るものではなく」、過度の心身の葛藤と衰弱を伴うものでした。一枝の、生涯を通じての「涙」は、ここに存在していました。そしてまた、その「涙」にかかわって、東京から大和へ、そして大和から東京への移転はなされてゆくのです。

しかしながら渡邊は、これについても完全に言及を避けています。これでは、研究対象が闇に隠され、「尾竹紅吉から富本一枝となって流さねばならなかった涙」を分析しようにも、分析できるはずもないのです。そしてまた、一枝と憲吉の生涯にとって極めて重要な意味をなす二度の転居の、その理由もまた、分析の対象から遠ざけられてしまうことになるのです。

一枝は本当に「涙」を流したのかどうか、そうであるとすれば、それは、いつ、どこで、何ゆえなのか、研究の対象にしようとする「涙」の所在そのものが明確にされていないこと、つまりこれが、渡邊の文の、一点目の大きな弱点であり、「論文」の体を成さない理由なのです。

次に、二点目の弱点を挙げてみます。渡邊の文においては、何を明らかにしようとするものなのか、その目的もさることながら、それをどのような方法で達成しようとするのか、その方法もまた明示されていません。そのことは、この文の主題であると思われる「富本一枝におけるセクシュアリティ」に関する分析にとって、大きな問題をはらむことになります。

実際本文を見ますと、主題の分析に当たって、文献も資料もいっさい使用されることなく、ただの思弁的な自身の思い込みの羅列となっているのです。これでは、書かれていることの検証はできず、真偽の判断が不可能となります。この文は、一枝の生涯を描いた一種の伝記の様相を呈しています。伝記とは、実在したひとりの人間の生涯を扱った歴史書であり、書かれる内容は、あくまでも真実に肉薄しなければならず、決してフィクションなどであってはなりません。つまり、そこに書かれていることが真実であってこそ、人はそれを信じ、安心して一枝の人生を追体験する喜びを得ることができるのです。ところが、渡邊の「富本一枝におけるセクシュアリティ」は、いかなる一次資料にも根拠を置かないまま、断定的な論述が全編を覆います。まさしくこの文は、あたかも、自分の心情が吐露されたエッセイなり、あるいは、おもしろおかしく描かれた小説なりの領域に属するかのような、単なる読み物と化しているのです。

以上、ふたつの観点から、渡邊の文の重大な弱点を指摘し、したがって、その文が「論文」と呼ぶに値しないことを論じました。それでは次に、そのような性格をもつ渡邊の文のなかにおいて書かれてある、私の既存の論述への批判内容について検討します。

第三節 果たして私の論述は一枝を「猥褻」に描いているのか

いま一度以下に、「富本一枝におけるセクシュアリティ」と題された渡邊澄子の「論文」のなかに現われている、私への批判箇所を引用して、確認します。

一枝におけるレズビアニズムを辻井喬の『終りなき祝祭』、時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の「著作集 3・4・11 巻」は一枝を性的墮落者と決めつけて猥褻に描いているが、一枝は中山が決めつけているような猥褻な「性的転倒者」だったのだろうか。

私がウェブサイトで公開しています「著作集 3・4・11 巻」は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」の先行研究に相当しますので、本来であれば著者は、「論文」の冒頭に「はじめに」を起こし、そのなかで批判的に検討すべきであったと思量します。他方、「時代錯誤ぶりに呆れ哄笑する」といった、自己の感情の横溢を制御できないような猥雑な文言や、「猥褻」といった、実態が明瞭に把握できないような極めて情緒的で主観的な文言は、研究論文にはふさわしくなく、むしろ本来的になすべきであったことは、具体的な頁を示して、そこに書かれてある内容を特定したうえで、自身独自の批判の根拠を明らかにし、その観点に立って論理的に吟味することであったと愚考します。そうしたあるべき手続きがとられていないことは、極めて遺憾なことでありますが、この際そのことは横に置き、述べられている当該箇所に見受けられる「猥褻」の一語に着目して、以下に少し検討してみたいと思います。

渡邊は「猥褻」の語を定義していませんので、その意味するところは定かではありません。そこで、どの場面にあつて渡邊は「猥褻」という語を使っているのか、その使用例を見てみたいと思います。それに先立ちまして、まず、辻井喬の『終りなき祝祭』のなかの一節を、以下に引用します。

床まである上部がガラスの戸が開いたままになっている。善吉は留守のあいだに草がずいぶん伸びたと思った。部屋のなかには中空に上った月の光の奥になってよく見えない。蚊帳が吊ってあるのが分った。夜具が白く浮上ってくる。人が浴衣を着て寝ている姿がぼんやりと見えてきた。声を掛けようと一歩踏み出して善吉は思いとどまった。彼女の動きが不自然なのだ。と、腕のようなものが、白い浴衣の肩を捕えた。寝ているのは一人ではない。小さい呻き声が聞え、それを制止するような囁きが続いた。……「誰ですか、あんたは」文の怯えた声があがった。……隣の部屋から誰かが起きたらしく、そっと、部屋の奥に入ってきた。壮吉らしかった⁶。

ここに登場する「善吉」が富本憲吉、「文」が富本一枝、「壮吉」が、ふたりの実の息子の富本壮吉であることは明らかです。著者の辻井喬と壮吉は、少年時代から大学時代に至るまで信頼できるみずかな友人同士でした。映画監督を職業とする壮吉は、自身の両親を映像化することを望んでいましたが、その夢はかなわず他界します。その遺志を継いで書かれたのが、『終りなき祝祭』です。引用の場面は、勤務していた美術学校の生徒を連れて飛騨高山に疎開していた善吉が、途中で一度東京の自宅にもどり、そっと庭先に回ってみたときの場面です。

上で引用した、まさしくこの箇所ではないかと思われませんが、これを、自著の『青鞥の女・尾竹紅吉伝』において渡邊は、「辻井喬が『終りなき祝祭』に猥褻をにおわせる描きかたをした場面」⁷と書き、ここに「猥褻」という語の用例が認められます。このことから判断しますと、渡邊にとっての「猥褻」とは、女性同士の性的関係を指すものと思われます。しかし、『終りなき祝祭』は、壮吉が死に向かう病床で書き残した手記が土台になっていますので、小説といえども、書かれているこの描写は、おそらく決して虚偽ではなく、ほぼ真実に近いものではないかと思われ、したがって、これが「猥褻」であるかどうかの判断は、決して一般性はなく、ひとえに渡邊個人のあいまいな主観に帰されるものとしきれないようがありません。

それでは、私の「著作集 3・4・11 巻」は、どうでしょうか。私は小説家ではありませんので、こうした性描写は、自分の文のなかでいっさい行なっていません。他方、渡邊は、「一枝は中山が決めつけているような猥褻な『性的転倒者』だったろうか」と書きますが、私自身は、一枝に対しまして一度も「性的転倒者」という用語を使ったことはありません。これは、平塚らいてうが、一枝のことを「私の近い過去に於て出逢った一婦人——殆ど先天的の性的転倒者とも思われるやうな一婦人」⁸と称して書いた文を引用した際に、使用した文言なのです。それでは、渡邊の目に映っている「中山が決めつけているような猥褻な『性的転倒者』」は、何に由来するのでしょうか。それは、そう書いている本人しかわからないことですが、先に指摘した「猥褻」の用例から類推しますと、私が過去のさまざまな資料から引用した、一枝の性自認と性的指向に関する、本人あるいは他者による記述についての箇所ではないかと推量されます。その事例は多数ありますので、ここでは、それに該当する箇所を、結婚に先立つ青鞥社時代のころの本人の口によって語られた数例に限って、以下に引用します。

私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にみつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの様に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その気持のいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た⁹。

〔吉原での〕私の花魁は榮山さんと云ふ可愛い人でしたよ……私は眞實に身受がしたくなり茶屋へ歸つてから聞きますと千兩は掛かると云ふんです……若し男だつたらと男が羨ましくなりました、浅草の銘酒屋もよう御座いますネ、今度は呼べたら上つて見やうと思ひます¹⁰。

私は誰も知らない、自分たつた一人で大切にしてゐる面白い氣分があるのです。……人が知つたら恐らく危険だとか狂人地味た奴だとか一種の病的だろうとか位いで済ましてしまうでしょう¹¹。

私は子供の時分から面白い氣分を持つてゐますが夫れは自ら獨り楽しむ氣分であつて決して口に出して話す氣分ではないのです、死ぬる時に遺言状の中には書くかしれません¹²。

私にはちいさな時分から美しい女の人をみるのが非常に心持のよいことで、また、大變に好きだつたのです。それで私の今迄の愛の對照^{ママ}になつてみた人のすべては悉く美しい女ばかりでした¹³。

おそらく渡邊にとりましては、こうした引用文が「猥褻」に映り、どうしても認めることができなかったのではないかと思料します。こうした資料に残る文を引用した私をもって、「時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない」と、渡邊は批判しますが、むしろ、眞実に率直に向き合うことができない、渡邊の硬直した偏見的差別精神が、問題なのです。

以上の引用文から見えてくるのは、一枝はレズビアンではなく、トランスジェンダー男性だったのではないかということです。「トランスジェンダー」というのは、今日的用語で、当時は「男^{おとこ}女^{おんな}」や「おめ」という隠語で呼ばれていました。また一枝は、「死ぬる時に遺言状の中には書くかしれません」といっていますが、これは、生きているうちはカミング・アウトしないということを言い表わしているのかもしれませんが、しかし、「カミング・アウト」という用語も今日的なものであり、上の五つの引用文が實質上の「カミング・アウト」を構成しているとも受け取ることができます。それでも、「男女」や「おめ」という用語を使って、本人が明確に意識してカミング・アウトしていない以上、一枝をして決してトランスジェンダー男性であつたと断定することはできません。しかしながら、だからといって、上の引用の事例を隠蔽してしまえば、一枝のセクシュアリティは完全に闇に閉ざされ、ひいては、一枝の眞実の生涯そのものも永遠に見えなくなってしまう。ところが渡邊は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」において、上に挙げた引用文はおろか、一枝の性自認や性的指向に関する、歴史に残るすべての資料から目を遠ざけ、いっさい口をつぐんでしまったのでした。

渡邊は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかで、一枝のセクシュアリティについて、以下のように結論的に書いています。

女を愛するとはどういうことか。同性愛には性的墮落を伴う「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」があり、「真っ当な愛」は女性解放思想に結びつく。一枝における女同士の親密な関係を検証するとどの場合も精神性が重視された「真っ当な愛」で女性の能力発揮、換言すれば女性の地位向上に結びついている¹⁴。

渡邊は、「一枝における女同士の親密な関係を検証するとどの場合も精神性が重視された『真っ当な愛』であったごとくに書きますが、見てのとおり、「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかで、そのことが、妥当な一次資料を使って検証された形跡は何ひとつ残されていません。つまり、渡邊がいうところの、一枝が女性間の同性愛者であったことも、同性愛には「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」との二種類があることも、そのなかで一枝の同性愛は「真っ当な愛」であったことも、そして、一枝の「真っ当な愛」が「女性の地位向上に結びついている」ことも、動かしがたい証拠（エヴィデンス）に基づいて実際に証明されているわけではないのです。したがって、渡邊の「富本一枝におけるセクシュアリティ」から引用した上の言説は、こうあってほしいと思う、単なる渡邊の恣意的な思い込みによる虚妄的決めつけでしかないのです。こうした過程のなかにあって、虚飾された富本一枝像が「論文」という名を借りて捏造されてゆくのでした。

そこで、蛇足になることは十分承知のうえで、渡邊が強調する、同性愛にかかわる「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」の二分法と、同性愛が「女性解放思想に結びつく」とする所見との二点に関しまして、ここに私見を書き残しておきたいと思います。

まずは、同性愛にかかわる「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」の二分法に関しての私見です。

私は、ウェブサイト上で公開しています著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」におきまして、一九〇一（明治四四）年八月一日の『婦女新聞』に掲載された第一頁（一面）の社説を部分的に引用しました。「同性の愛」という表題がつけられ、女性間の「不可思議な」セクシュアリティについて論じていた、その社説の書き出しの部分を、いま一度ここで、以下に引用します。

『女同士の情死』と題して、二人の女工が手を携へて投身したりし新聞紙に報せられたる事あり。最近に一博士の令嬢と、一官吏の令嬢とが共に高等女學校卒業の教育ある身にして、同じやうなる最期を遂げたるあり。新聞紙は之を同性の愛、世俗に所謂オメの関係なりとして審しまざる様子なるが、同性間に、果たして異性間の如き愛の成立し得るものなりや否や。容易に信じ難けれども、若し眞に成立し得るものとせば、娘持つ母及び女子教育家は、最愛なる子女の監督法に就て新なる警戒を加へざるべからず。かゝる問題は人生の機微に關し、紳士淑女の輕々しく口にすべき事にあらざれども、又それだけに重大な問題なるを以て、眞面目に研究する必要あり¹⁵。

この社説では、女工の例と令嬢の例を、ともに「オメ」の関係とみなしながらも、前者に

については、女性相互の「熱烈な精神的友情」に基づく関係とし、後者については、男性的な女と女性間の「肉的墮落」との烙印を押します。社説は、二種類の「同性の愛」の内的違いを、このような文言を使って解説するのです。

後者の所謂オメなるものは、實に不可思議の現象にして、今日の生理學心理學にては殆んど説明しがたし。然り、説明はせられざれども、事實の存在は否定すべきにあらず。恐らくは是れ病的現象ならん。……前者に於ては、關係ある二人の境遇年齢性格等が相似たるを要するに反し、後者は、一人が必ず男性的性格境遇の女子にして、他を支配するを要す。前者は熱烈なる精神的友情に因て成立するに反し、後者は不可思議な肉の接觸を俟ちて成立するが如し。前者は死を共にするまで互い同情すれども、後者は、元來が肉的墮落なれば、さまでに双方の精神が一致せず。即ち一方的男性的の女は、常に巧なる一種の手段を弄して他を操縦するなり。されど、いかにしても不可思議なるは、操縦せらるゝ女が、全然對手の術中に陥りて、眞の戀愛状態に陥ること、異性に對すると殆んど差違なき事なり¹⁶。

一九一一年（明治四四）年八月という早い段階にあつて、『婦女新聞』の社説において、すでに二種類の「同性の愛」についての指摘がなされていたのです。著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』に所収されている第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」において私が引用していた、上のふたつの文を、渡邊が読んでいることは、明白でしょう。であるならば、渡邊が指摘してみせた、同性愛にかかわる「遊戯的な愛」と「真つ当な愛」の二分法の根拠が、ここにあったことは、もはや疑いを入れません。もっとも渡邊は、それについて全く口を閉ざします。しかし、いずれにせよそれは、何と一〇〇年以上も前に述べられていた過去の古い言説だったのです。

今日にあつては、性的少数者を指して、LGBTQ の表現が一般に使用されます。L がレズビアン（Lesbian）、T がトランスジェンダー（Transgender）を表わします。トランスジェンダーの人は、生まれたときに割り振られた性別に違和感をもち、社会・文化的には、それとは反対の性別において生きることを求めようとします。そして、身体的には女性でありながら、性自認（Gender Identity）においては男性である人を FTM（Female to Male）、逆に、身体的には男性でありながら、性自認においては女性である人を MTF（Male to Female）という語でしばしば言い表わされます。一方、性的欲望や恋愛感情の対象が、異性なのか、同性なのか、その指向を示す呼称として、性的指向（Sexual Orientation）という用語が使用されます。たとえば、レズビアンの場合は、当事者双方は、身体的に「女」であり、性自認も「女」であるものの、性的欲望や恋愛感情の対象である性的指向が、異性ではなく、同性である「女」へと向かいます。そこで問題なのが、FTM のトランスジェンダーの性的指向が「女」だった場合です。外見上は、女性間の同性愛者（レズビアン）のように見えるものの、実際には、「男」を性自認する者が「女」を愛することからして、したがってこの場合は、「同性愛」ではなく、「異性愛」とみなされることになるのです。

見てきましたように、渡邊は、同性愛にかかわって「遊戯的な愛」と「真つ当な愛」のふたつに分類します。この二分法は、一方の「遊戯的な愛」が FTM のトランスジェンダーの愛を、もう一方の「真つ当な愛」がレズビアンの愛を指しているように読めます。ここで問

題になるのは、自身の口から自分は「男女」であるとか「おめ」であるとかは公言していないものの、資料的にはっきりしていることは、一枝の愛は、レズビアン¹⁶の愛ではなく、FTM¹⁷のトランスジェンダーの愛であり、決して「同性愛」などではなく、「異性愛」であるということです。そして、渡邊の言説でもうひとつ問題となるのは、「性的墮落を伴う『遊戯的な愛』」という表現を使っていることです。トランスジェンダーの愛は、決して医学上病例として認定されるものでもなく、まして、「性的墮落を伴う遊戯的な」ものでもなく、この地に生きる人間の紛れもない自然な愛の一形態であり、誰ひとりとして、そのことに疑念を挟む余地は残されていません。もし渡邊が、トランスジェンダーの愛を「猥褻」とみなしているのであれば、その視点は、トランスジェンダー人間の排除につながりかねない不当な偏見を生み出す温床となりかねず、性差別にかかわる重大な問題をはらんでいることを、あえてここで指摘しておきたいと思います。

それでは次に、同性愛が「女性解放思想に結びつく」とする所見に関しての私見を書きます。

この『婦女新聞』が発行された翌月の九月に、平塚らいてうの手によって『青鞥』創刊号が世に出ます。それからおよそ二年半後の一九一四（大正三）年四月に、「女性間の同性戀愛——エリス——」が『青鞥』に掲載されました。私は、同じく著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」におきまして、この「女性間の同性戀愛——エリス——」と題されたハヴロック・エリスの抄訳について、論評しています。その一部は、次に引用するとおりです。

エリスが描写する、「女は家の中の陰気な倉の内で嘆息しながら、決して来る事のない男を待たねばならないと云ふ様な舊い教へに對する嫌惡」——これが、女性の解放や独立を叫ぶ、近代の婦人運動の原点となる思いであろう。エリスはいみじくも、この近代運動が「間接な原因」となって「性的轉倒を惹起した」とみなす。であれば、近代日本の婦人運動の原点に位置づく青鞥社の運動には、これ自体に、「性的轉倒」を招来せしめる力が必然的に最初から内在していたことになる。そして、その歴史的主人公が、まさしく、紅吉、その人だったのである¹⁷。

「紅吉」は、尾竹一枝（結婚後「富本」に改姓）が青鞥社時代に使用していた雅号です。ご覧のとおり、すでに私ははっきりと、「女性の解放や独立を叫ぶ、近代の婦人運動の原点」に位置する「歴史的主人公が、まさしく、紅吉」であることを論じているのです。しかしながら渡邊は、同性愛が「女性解放思想に結びつく」ことを指摘するに当たっては、いっさい私の言説には触れていません。あたかも自分の独創的着想であるかのごとくに、自説として語っているのです。渡邊は、何の根拠も示さず、「時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の『著作集 3・4・11 卷』」という表現を使って、私を批判しました。しかし、渡邊が強弁する、同性愛にかかわる「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」の二分法にしても、同性愛が「女性解放思想に結びつく」とする所見にしても、元をただせばそれらは、私の著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』に、すべてその根拠を置いているのではないのでしょうか。

第四節 果たして私がかつて行なった渡邊批判は生かされているのか

一九二六（大正一五）年の秋、富本憲吉と一枝の家族は、大和の安堵村から東京の千歳村へ転地します。このことに関しまして、私はかつて、渡邊澄子が自著の『青鞥の女・尾竹紅吉伝』のなかで記述していた箇所を取り上げ、以下のように批判しました。長くなりますが、引用させていただきます。

最後に、渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（不二出版、2001年）についても、言及しておきたい。安堵村から東京への移転の理由について、著者の渡邊は、折井がすでに示した憲吉の「女性問題」をそのまま踏襲したうえで、こう述べる。

「一家は一九二六年一〇月、東京へ移住することになるが、それには、晩年にまで水面下で尾を曳き、結局、二人の間を離隔させることになったが、その根に憲吉の女性問題をみることができる。私が紅吉に魅せられ、紅吉の生涯を書きたいと願って準備に入ってからすでに二〇年になる。私はこの間、生前の二人を知る人を訪ねては聞き書きをとる作業を仕事の合間の折々に続けてきたが、憲吉の女性問題の相手は井出秀子が世話したお手伝いさんだった、と複数の方の証言を得た。子どもも生まれていてこの子は里子に出されたはずと明言した人もいた。しかし一方で、そんな事実はない、田舎は狭いのでもしそのようなことがあったら、誰知らぬ者なく広まってしまうはずだ、という人もいた。しかし、夫である男性が妻とは別の女性と特別の関係を持つ例は、ほとんど日常茶飯事としていわば公認されていた時代状況下では、事実があってもそれは大問題にならないということもあるのではないだろうか。夫を愛している妻である女性がそのことでどれほど傷つくか、その痛みの深さを感じ取れない男性社会だったのだ。」
(210-211 頁)

残念ながら、この本にも注などは存在せず、そのように断言するうえでの根拠となる証拠も何ひとつ示されていない。「生前の二人を知る人を訪ねては聞き書きをとる作業」をしているのであれば、いつ、どこで、誰に、何を聞き、その聞き取った内容を相手に確認してもらったうえで公表の了解を得て、そのすべてを開示すべきであったと思考されるものの、そのような学問的配慮に欠けるため、このままでは、単なる風聞か噂話の域を出ない状態に置かれているといわざるを得ない。井出秀子とは、丸岡秀子のことを指しているのであれば、紹介者としての当事者である丸岡に、事の真相を直接問い合わせるべきだったのではないだろうか。「紅吉の生涯を書きたいと願って準備に入ってからすでに二〇年になる」というが、この本が出版されたのが二〇〇一（平成一三）年、そこから逆算すれば、一九八一（昭和五六）年ころから聞き取り調査をはじめていたことになる。丸岡が亡くなるのが一九九〇（平成二）年であることを勘案すれば、著者の渡邊は、その意思さえあれば、丸岡本人へのインタビューを試みることも、あるいはまた、書簡による問い合わせも可能だったはずである。

丸岡秀子自身は、生涯、憲吉の生き方に強い共感を示し、敬愛の念を持ち続けた。晩年に至ってまでも、丸岡はこういった。「いま、若い人たちにとって、二人〔憲吉と一枝〕は名前さえ知られてはいないであろう。だが、京都、奈良めぐりの旅行の中に、“世紀の陶工” 富本憲吉美術館を入れてもらいたいと、私は願う。法隆寺からすぐなのだから

ら」（丸岡秀子『いのちと命のあいだに』筑摩書房、1984年、28頁）。

もし、「憲吉の女性問題の相手は井出秀子が世話したお手伝いさんだった」のであれば、紹介者自身も深い傷を負い、憲吉に強い怒りと不信を向けたにちががなく、晩年のこうした丸岡の憲吉に寄せる信頼と讃美の言葉を目にするとき、著者の渡邊の言説をそのまま受け入れることには、大きな違和感が生じ、もし仮に、それが真実であると主張するのであれば、どうしても、それを裏づけるにふさわしい証拠となる資料を明示すべきものと思われる。とりわけ、「井出秀子が世話したお手伝いさん」が、いつどのような経緯で富本家へ入り、いつ妊娠し、いつどこで出産し、いつどのような経緯でその子が里子に出されたのかを明確な根拠に基づき実証すべきであろう。またその情報を提供した複数の人物とは誰と誰なのか、これについても、歴史的証人として本人たちの了解を得たうえで、明らかにするべきではないだろうか。「生前の二人を知る人」と渡邊はいうが、「女性問題」が持ち上がった一九二六（大正一五）年前後のあいだの安堵の富本家の生活の様子を日常的に知ることができ、渡邊が「聞き書きをとる作業」をする時期まで存命していた人物は、そう多くはないはずである。この時期一枝も妊娠していた。丸岡秀子の奈良女高師の先輩で友人と思われる若い女性教師が円通院で教鞭をとっていた。そうしたこととの混同や取り違えはないのか、あるいは、どこかの段階で誰かが、一枝の「女性問題」を憲吉の「女性問題」と聞き違えたり、伝え違えたりしているようなことはないのか、慎重な対応と吟味が必要とされるところであろう。もし、以上に述べてきたような学問上の基本的手続きに立ち返ることができなければ、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』に対してはすでに上で指摘しているが、そこでの指摘と同様に、反論することも、弁明することも、真実を語ることも、何もいっさいできないまま、憲吉の「女性問題」は永久に歴史のなかに刻印され、かくして「虚偽の歴史」ないしは「歴史上の冤罪」が構成されかねない事態にいまや立ち至っているのである¹⁸。

ここで私が指摘した内容は、今回の渡邊の「富本一枝におけるセクシュアリティ」において、どう反映されているのでしょうか。見ることができるとおり、あれだけ明白に、家族の東京移転の原因を憲吉の「女性問題」に帰し、「憲吉の女性問題の相手は井出秀子が世話したお手伝いさんだった、と複数の方の証言を得た。子どもも生まれていてこの子は里子に出されたはずと明言した人もいた」と書いていた渡邊でしたが、この文にあっては、それが後退し、いっさい触れられていません。これを証左として、渡邊が『青鞥の女・尾竹紅吉伝』で書いていた憲吉の「女性問題」は、虚偽であったと断定しても差し支えないかもしれません。しかし、「何度もの話しあいでは一枝は憲吉を許す気になったのだろうか」¹⁹という曖昧模糊とした表現によって、それでも執拗に、東京移転の原因に憲吉の「女性問題」があったかのごとくほのめかすのでした。

渡邊の「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかに見出される、憲吉の「女性問題」に触れた言辭が三つあります。しかし、いかなる証拠（エヴィデンス）も示されていません。前後の文脈からも逸脱しています。そしてまた、実体にかかわる、それ以上の記述もありません。それでは、本文に挿入されている三箇所の文言を、以下に引用します。

夫の女性問題を知ったのは何時だったのか²⁰。

一枝が愛し信じきっていた憲吉の裏切りを知ったのは何時だったろうか²¹。

信頼の度や愛が深ければ深いほど裏切りから受けた傷の痛みに時効はなく深い²²。

ここから判断できますように、結局のところ、『青鞥の女・尾竹紅吉伝』で憲吉にまともせた、「虚偽の歴史」も「歴史上の冤罪」も、「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかにおいて書き改められ解消されるようなことはなく、それどころか、完全に上書きされ保存されたのでした。

実際渡邊は、憲吉の「女性問題」が、いつ、どのような経緯で発生し、どういうかたちで終息し、その間一枝は、それに対して、どのような態度を示したのか、「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかで具体的に何も書いていません。いうまでもなく、私の調べる限り、それを例証するにふさわしい、信頼できる一次資料は、何も存在しないのです。

渡邊が、その文の冒頭書いていた、「尾竹紅吉から富本一枝となって流さねばならなかった涙」とは、渡邊にとって、「裏切りから受けた傷の痛み」に時効はなく深い」という文言と重なるのかもしれませんが。しかしそれは、論証も実証も、完全に置き去りにされている独断的な言説である以上、実態を離れた、単なる渡邊の絵空事といわざるを得ません。つまり、換言すれば渡邊は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」と題された「論文」にあつて、一方で、自分の論稿の「主題」を「富本一枝におけるセクシュアリティ」の分析に見せかけでは、一枝の同性愛を、女性解放思想に結び付く「真つ当な愛」と一方的に断じ、そのまた一方で、自分の論稿の「目的」を、一枝が「流さねばならなかった涙」の解明のごとくに装っては、その「傷の痛み」を「憲吉の裏切り」によるものと一方的に決めつけ、実に巧妙に、二重螺旋の虚構空間を練り上げたのでした。

上記内容が、決して絵空事でも虚構なるものでもない、どうしても主張したいのであれば、研究者の真の責務として進んで渡邊は、事実関係を立証すべく、証拠となる一次資料をすべからず明示し、他の研究者の検証に供すべきであつて、それができないのであれば、渡邊の文は、個人的に捏造された単なる妄言として一蹴されたとしても、それは、致し方ないものと思えます。

この小論で私が示した一次資料が語るところによっても明らかに、一枝のセクシュアリティは、レズビアンではなく、トランスジェンダー男性のそれであり、一枝が流した涙は、憲吉の「女性問題」にあつたのではなく、自身のセクシュアリティの違和感に起因していたのでした。

それでは最後に、渡邊が、妻を裏切った夫として根拠なく断罪する憲吉という人物は、どのような男性で、どのような夫だったのでしょか。以下に、参考のために、少し描写しておきたいと思います。

第五節 果たして富本憲吉はどのような人物だったのか

まず、結婚に際しての憲吉の言葉を紹介します。憲吉は、一枝にこう語っています。

アナタが家族をはなれて私の処に来ると思はれるが、私の方でも私は独り私の家族をはなれてアナタの処へ行くので、決して、アナタだけが私の処へ来られるのではない、例へ法律とか概観で、そうでないにしても尾竹にも富本にも未だ属しない、ひとつの新しい家が出来るわけである。そう考へて居て貰ひたい²³。

ここには、「家」に拘束されない、対等の個人たる両性の結び付きとしての結婚観が示されています。しかし結婚すると、すでに紹介しています、「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」という題がつけられた暴露記事に遭遇します。ふたりが東京を離れ、憲吉の実家のある大和の安堵村に住まいを変えるのは、それから数箇月後の、一九一五（大正四）年三月のことでした。新しい生活がはじまると、一枝は、「結婚する前と結婚してから」を草し、青鞥社時代の自分を、こう振り返ります。次は、その文からの引用です。

評判を悪くして心のうちで寂しく暮してゐた事もあつた。可成り長く病氣で轉地してゐた時もあつた。全く寂しく暮してゐた時もあつた。どうにかして眞面目な人生に眼を醒ましたいと悶躁^{もが}いてゐた。偽もつゐた。人を欺しもした。いちめもした。愛しもした²⁴。

振り返って内省してみると、青鞥社員のとときの自分は、寂しく、もがき、そして、うそをつき、人をだまし、またあるときは、人をいじめ、人を愛する一方で、「どうにかして眞面目な人生に眼を醒ましたいと悶躁^{もが}いてゐた」のでした。一枝は、この「結婚する前と結婚してから」のなかで、こうも書いています。「都會を出立して田舎に轉移した彼と私は彼の云ふ高い思想生活を私達の爲めに營むべく最もよい機會をここに見出したことに強い自信とはりつめた意志があつた」²⁵。そしてさらには、「彼は、都會は、私を必ずや再び以前に歸すことを、再び私の落着のない心が誘起される事をよく知つてゐた」²⁶。憲吉は、一枝の「落着のない心」の内実を知っており、理解者でもあつたようです。憲吉と一枝の夫婦は、結婚をひとつの好機ととらえ、一枝のいうところの「落着のない心」、つまり同性へ向かう性的指向が二度と誘発されることがないことを強く望んだのでした。

他方、実際の家庭生活における憲吉の振る舞いも、一枝に対して協力的でした。それについて、このように一枝は書いています。

二三日雨が降りつゞいて洗濯物がたまる時がある。そんな時、私と女中が一生懸命で洗つても中々手が廻りかねる〔。〕それを富本がよく手傳つて、すすぎの水をポンプで上げてくれたり、干すものをクリツプで止めてくれたりしてゐるのを見て百姓達はいつも冷笑した。「いゝとこの主人があんな女の子のやる事をする」といって可笑しがる²⁷。

憲吉の行動は、当時おおかたの家庭において引き継がれてきていた男にとっての伝統的な役割を否定するものでした。それは、授かったふたりの娘、陽と陶の教育にも現われます。学齡期になると、公教育を否定し、富本家の菩提寺に「小さな学校」を個人的につくり、そ

ここに娘たちを通わせるのです。しかし、そこで問題が生じます。奈良女子高等師範学校を卒業し、一年間地方の女学校に勤務したあと、三代目の教師として、ひとりの若い女性が「小さな学校」へ赴任してきます。この女性は、奈良女高師に在籍していたときから、ほかの多くの女生徒に交じって、一枝のもとにしばしば顔を出していましたが、一枝は、この女生徒に特別の感情を抱き、ふたりは、まさしく意気投合した仲となっていました。しかし、赴任してしばらくすると、突如として安堵村から姿を消すのです。ふたりのあいだに何かが起こったことが想像されます。

次の新任教師と同じ関係が生じる可能性も排除できませんし、さらには、これから以降も奈良女高師の女生徒たちが、一枝の魅力に惹かれて集まってくる可能性も、全く否定することができません。そう考えれば、一枝の性的指向を再度惹起させないためには、前回東京から安堵村へと転居したように、転地しか、道はないのです。荷造りがはじまりました。以下は、東京移転について記述されている、一枝の「東京に住む」からの引用です。

かうして幾十日か過ぎた。自分に頼む心の弱々しさを知らねばその間すら過すことが出来ない程もろい自分であつた。夫に勵^{はげ}まされ、荷をつくりかけてみてすら、さて何處に落着くかその約束の地を見ることが出来なかつた。夫の仕事のためには陶器を造るために便宜多い土地を撰定しなければならなかつた。土を得るに、磁器の料を採るために、松薪を求めるためにも、その他仕事する上には繪を描く人、文筆をとる人々のやうに軽らかに新しい土地に轉ずることは出来ない色々の困難があつた²⁸。

「夫に勵^{はげ}まされ」、荷造りをしているところから判断すれば、憲吉の一枝に対する同情の気持ちが見えてきます。一方の一枝は、転地先を選ぶにあたって、製陶に必要な薪や土などの入手に際しての利便性について憲吉を思いやります。そうした夫の仕事上の特殊な条件を考えると、落ち着くべき約束の地がなかなか見つかりません。それに、娘たちの今後の教育のことも、考慮に入れる必要がありました。一枝は、同じく「東京に住む」のなかで、こう語っています。

夫の仕事のことだけを念頭に置いてゆくなら、琉球にでも北部朝鮮にでも、九州の山深くある片田舎にでも容易に決定することが出来た。さうして私は夫を愛してゐる。その仕事を思ふことは夫についてゐるものである。しかしながら、すでに女學校へ入學しやうとする程たけのびた上の子供、まもなく姉の後につかうとする妹兒〔。〕それも四〔。〕五年の間家庭にあつて特殊な方法で教育されて來た子供達であつたから、今後の教育方法について考へることが實に多かつた²⁹。

ところが渡邊澄子は、上の「五. 果たして私がかつて行なつた渡邊批判は生かされているのか」において示していますように、『青鞥の女・尾竹紅吉伝』のなかで、このとき憲吉に「女性問題」が生じ、安堵村を離れなければならなくなつたと断言しているのです。何の証拠も示していません。さらに加えて、こうもいいます。

憲吉に女性問題が生じていたことを知った一枝は、ほとんど一カ月にわたって、睡眠

らしい睡眠をとることもできない状態にあつて、憲吉と話し合う夜が続き、一時離婚も考えたらしい³⁰。

一枝本人がはっきりと語っているように、一枝は、「夫に勵^{はげ}まれ」、荷造りをしています。そしてまた、一枝は、「夫を愛してゐる」のです。それから判断しますと、渡邊がいう、「憲吉に女性問題が生じていたこと」も、「一時離婚も考えたらしい」ということも、渡邊の妄想であることが明らかになります。どうしても、一枝が書く文と、渡邊が書く文のあいだに、整合性をとることができません。証拠となる一枝が書き残した文を越えてでも、こうであったにちがいないという強引な想像や、こうあつてほしいという個人的な願望が、渡邊をしてこう書かせているのかもしれませんが。

一枝の「東京に住む」のなかに、わずかではありますが、自分のセクシュアリティについて間接的に言及している箇所があります。そのひとつが、こうした文言です。

この久しい間の争闘、理性と感情この二つのものはいまだにその闘を中止しようとはしない。そうしてそのどちらも組しきることが出来ない人間のあはれな煩悶を冷酷にも見下してゐる。平氣である感情に行ききれないのは自分が自分に似合はず道徳的なものにひかれてゐるからで、といつて理性を捨切つて感情に走ることをゆるさないのは根本でまだ×に對して憎惡や反感と結びついてゐるために違ひない。……本當にこの心の底には憎惡しかないのか、それでは偽だ。あんまり苦しい³¹。

この文章を読み解くうえで最大のポイントとなるのは、伏字となっている「×」にどの一字をあてるかということになるでしょう。あえて「性」をあててみます。自分のセクシュアリティを憎惡する。しかし、それだけでは、偽りであるし、あまりにも苦しすぎる。ここに、セクシュアリティの解放を巡る理性と感情の激しい対立の一端をかいま見ることができます。自己の特異なセクシュアリティに向けられた憎しみと、憎みきれない苦しみとが、混然一体となって一枝の心身を襲うのです。一枝が神を見るのは、そのときのことでした。

神を見る心、ひたすらに信賴する世界、祈り、これを失してゐたことがすべての悩みの根源であることを強く思つた。私は自分の心を捨てゝ神の意志を尊く思ひ、そこで新しく生まれてこない限り自分達の生活は何度建て直しても駄目であることを知つた。

こゝに歸依したことは同時に小さい自我を捨てたことである。世界が限りなく廣く私達の前に幕をあげた³²。

聖書にあるごとく、キリスト教にあつては、同性愛も異性装も厳しく禁じています。こうして、「自分の心を捨てゝ」信仰心に歸依することにより、富本一家の東京移住が最終的に決定されました。おおよそ一年半の安堵村生活でした。このとき、満年齢で憲吉四〇歳、一枝三三歳、陽一一歳、そして陶は、まもなく九歳になろうとしていました。東京から安堵村に来たときには、一枝のお腹には陽がいました。今度の上京には、まもなく生まれてくる壮吉が一緒です。この二例が意味することは、一枝の女性に向かう性的指向を断ち、憲吉が自分に向けさせた結果の現われかもしれません。大正から昭和へと改元される二箇月ほど

前の秋の日の出来事でした。

上京してまもなくすると、一枝は、長谷川時雨が創刊した『女人藝術』に寄稿をはじめ、多くの女性たちとの交わりがはじまります。のちに、近代文学研究者の尾形明子は、『女人藝術』を調査するうえから、この雑誌の編集に携わっていた熱田優子に聞き取りを行なう機会をもちます。以下は、尾形が聞き書きした、富本一枝に関する熱田の発話内容です。

すらっとしていただけれど筋肉質でしっかりした体型でね。芸術家の奥さんというより、富本さん自身が芸術家。着物をきりつと粋に着こなしていて、感性が鋭くて趣味もよかった。……女の人が好きで、横田文子がかわいがられていたわね。それで長谷川さん、私たちにひとりで祖師谷に行ってはいけないよって言っていたけど、大谷藤子さんも親しかったのではないかしら³³。

もし長谷川が、「ひとりで[一枝の自宅のある]祖師谷に行ってはいけないよ」といって、生前、周囲の人間に注意を促していたことが本当に事実であるとするならば、一枝のセクシュアリティは、すでに「公然の秘密」となっていただけではなく、美貌と才能をもつ女性にとっては、「危険な存在」になっていた可能性さえ残ります。

しかしその一方で、その発話内容は、一枝が女性にとって頼れる味方であることを示唆しているようにも読むことができます。事実一枝は、多くの女性の才能を発掘しては、それを誌上で発表し、彼女たちを勇気づけていたのです。たとえばこの時期、『婦人文藝』に「福田晴子さん」（一九三五年一月号）を、『中央公論』に「宇野千代の印象」（一九三六年二月号）を、『麵麴』に「仲町貞子の作品と印象 手紙」（一九三六年二月号）を、さらに『婦人公論』に「原節子の印象」（一九三七年四月号）を寄稿し、彼女たちの美質なり作品なりを紹介するのです。

もっとも、一枝の性的指向に、変化が訪れることはありませんでした。次のように、本人が語っています。以下は、一九三八（昭和一三）年に発行された『新装 きもの随筆』に所収されている一枝の「春と化粧」からの引用です。

私は化粧を否みはしない。却つて化粧せぬことを嫌ひさへする。しかし、化粧といふものは、いよいよ美しくするためのものである。或ひはむしろ、缺點を覆ひ、美點を一層に補ふものだといふ方が、本當かも知れない。流行の如何ではないのである。……

私はそうした化粧の乙女を見たいと希つて、ある夜も、またある夜も街を歩くのである³⁴。

「私はそうした化粧の乙女を見たいと希つて、ある夜も、またある夜も街を歩くのである」という最後の語句は、どういう意味なのでしょう。私は、夜街を歩くときはいつも、そうした化粧の乙女に出会うことを密かに願っている」くらいの軽い意味でしょうか。それとも、「私は、そうした化粧の乙女を見たいという思いをどうしても抑えきれず、夜になると街に出て、歩き回る」といった、積極的な意味が含まれているのでしょうか。一枝の女性への関心の度合いがどの程度にもとれる、解釈の幅の広い表現であるといえます。しかし、いずれにしても、この言い回しは、自分のセクシュアリティについての、とりわけ性的

指向についてのこれまでに全く明かされることのなかった具体的な行動様式を自ら進んで開示するものであったといえます。

アジア・太平洋戦争に日本は突入します。一九三五（昭和一〇）年の『中央公論』一二月号の「新人傑作集」に所収されている「血縁」が、大谷藤子の作家としてのデビュー作のひとつといえます。大谷は、一九六三（昭和三八）年に憲吉が亡くなると、ただちに筆を執り、「失われた風景」と題するエッセイに仕上げ、富本家を訪問していた当時を懐かしみます。

私は戦争中から戦後にかけて、しげしげと富本家を訪ねた。陶芸家として第一人者である先生を訪ねたのではなく、夫人と親しくしていたからだった。ときどき泊まり込んだりした³⁵。

『終りなき祝祭』において辻井喬が描写している、ふたりの女性の性的絡み合いの箇所をすでに私は引用により示していますが、それが、大谷が「泊まり込んだ」ある夜のものであった可能性もあり、必ずしもそれを否定することはできません。

終戦を迎えると、憲吉は、独り家族から離れ、安堵村の旧宅に一時寄寓したあと、京都の地で作陶を再開するのです。一九四八（昭和二三）年の夏に、陶の夫の海藤日出男に宛てて、憲吉から出された手紙が残されています。以前憲吉が仕事場としていた工場^{こうば}を少し改装して、自分たちの生活空間として使わせてもらえないかという陶夫婦の問い合わせに対する返事のようなのです。

要事から書きます 工場は勿論 あの家に附属したもの故、諸君のうち誰が使用され様とも結構であります 私は去年八月申し送りました通り家の半分を一枝に その残りの半分を三人におくりましたから私のものではありません、あの家には私の書物や衣服がありますが帰へって行くのがいやでモウ一切捨てるつもりで居ます³⁶

憲吉は、家を出るに当たって、財産を夫婦で折半することは考えなかったようです。この手紙から、家の半分を一枝に、残りの半分を陽、陶、壮吉の三人の子どもに分与したいとする意向が、すでに家族に伝えられていたことがわかります。これにより、祖師谷の家屋敷と工場はもちろんのこと、家具調度品から作者留め置き作品に至るまで、さらには預貯金や野尻湖の別荘も含めて、すべて家族に残したまま、まさに無一文の裸一貫、生まれたままの姿で東京を離れたものと推察されます。同じくこのとき憲吉は、教授を務めていた東京美術学校に辞表を提出し、帝国芸術院の会員からも身を引きます。たとえ間接的であろうとも、自分が関与する組織が戦争に加担したことに対する、自分なりの責任のとり方だったのではないのでしょうか。

それでは、なぜ憲吉は家を出る必要があったのでしょうか。一九六九（昭和四四）年九月の『婦人公論』（第五四巻第九号）に掲載された、女性史研究家の井手文子による「華麗なる余白・富本一枝の生涯」のなかに、以下のようなことが書かれてあります。

なぜ、憲吉は一枝のもとを去ったのであろう。その別離の理由を水沢澄夫はある日彼から聞いた。長くためらったのち、憲吉は「あの人はレスビアンだった」と言ったとい

う³⁷。

水沢澄夫は美術評論家であり、憲吉との交友は長いものの、一九五七（昭和三二）年一〇月の『三彩』（第九二号）に「富本憲吉模様選集」と題してその書評を寄稿しているので、憲吉からこのことを聞かされたとすれば、おそらくはこのころの時期だったのでないかと思われます。憲吉が語ったとされる「あの人はレスビアンだった」という言葉が表に出るまでには、水沢と井手というふたりもの人物が介在します。したがって、この言説が絶対的に正確かどうかについての確証は何もありません。しかしながら、憲吉も一枝も、本人たちは直接何も語っておらず、この水沢と井手を経由した憲吉の言葉が、現段階にあって唯一、ふたりの離別の理由を知るうえでの手掛かりを与えているのです。これが事実であるとするならば、憲吉は、結婚以来の一枝のセクシュアリティにかかわる問題に、もはや耐えかねて家を出たことになります。それでは、憲吉が家を出たあとの一枝の心的状況はどうだったのでしょうか。晩年に一枝は、いとこの尾竹親にこう語っています。「戦後、私は一時死のうと思って、古い手紙など、身のまわりのものを焼き捨てたことがありました……」³⁸。

京都での作陶をはじめると、みぢかにいて憲吉の世話をするひとりの女性の姿が、世間の目に止まるようになりました。一九四九（昭和二四）年一〇月二五日の『毎日新聞』（大阪）に目を移しますと、「秋深む温泉郷 女弟子と精進の絵筆 夫人と別居の陶匠富本憲吉氏」という見出しをつけて、憲吉が石田寿枝という女性とともに奥津温泉に遊ぶ様子を報じています。記事のなかには、憲吉が記者に語った談話の内容が、次のように引用されています。

石田君は郷里が島根県なので帰り道に一寸寄つてもらい仕事の手助けを頼んだのがつい長くなつてしまった。妻とは性格が合わぬので別居したが戸籍はまだ切れていない。東京の祖師谷で“山の本書店”というのを経営しているらしいが生活は相当苦しいと聞いている。石田君とは仕事の上だけのつながりであるが私が石田君と奥津に来ていることがわかれば世間は決してそうは思わぬだろう。二、三年のうちにははつきりしたいと考えている³⁹。

島根県の出身の石田とは帰省の帰り道にここで合流し、仕事の手助けをしてもらいながら、長期の滞在になったようです。「先生」「石田君」と互い呼び、かいがいしく世話をする夕食の際の石田の振る舞いを織り込みながら、さらに記事は続き、石田の経歴について、こう記述します。

東京の女子美術を中退。当時官吏であつた父と一緒に朝鮮の京城に渡り戦後引揚げて来た石田さんは在籍中からずっと絵画の創作を続けていたという。いまでは父母とも他界し三高を卒業して大学受験準備中の弟さんと京都で一緒に暮しながら現在富本氏が仮寓している松風氏の元で陶芸の勉強をしているそうだ……石田さんは名を寿枝といい年は三十三、京都左京区川端丸太町に住む人で昭和二十三年、富本氏が京都松風陶歯会社内に窯を築いたとき、松風工業研究所で輸出陶器の研究を続けていた石田さんは助手になり、同年十二月松風工業を退いて富本氏の身のまわりの世話などをするにいたつたもの、一方、一枝夫人は平塚雷鳥女史の青鞥社に尾竹紅吉のペンネームで活躍

した女性解放運動の先駆者である⁴⁰。

こうした内容をもつ本文のあとに、「別れようと思わぬ」という小見出しをつけて、次のような一枝の談話が続きます。

ことしの三月ころ松風さんから主人が助手の女の方と結婚する意志があるらしいと聞きましたが信用しませんでした。私は別れようとは夢にも考えたことはありません。朝夕、富本の作品を眺めて暮しておりますが、富本の心の奥には私があることと確信しています。富本の幸福のためによく話合つて見ましょう⁴¹

本文記事のなかの「二、三年のうちにははつきりしたい」という憲吉の言葉は、今後離婚にかかわる協議に決着をつけ、正式に籍を入れて、石田と結婚したいという意味のことを示唆しているのでしょうか。ところが一枝は、「私は別れようとは夢にも考えたことはありません」という明確な意思表示をします。なぜ別れようとしないのでしょくか。また一枝は、「朝夕、富本の作品を眺めて暮しております」ともいいます。憲吉が、「妻とは性格が合わぬので別居した」と、性格の不一致を離別の理由に挙げ、率直に記者に語っているのに対して、一方の一枝は、「富本の心の奥には私があることと確信しています」と言明します。どこからそのような自信は生まれてくるのでしょうか。いずれにしても、事の推移から判断すれば、談話のなかで、「富本の幸福のためによく話合つて見ましょう」とはいいながらも、結局のところ、離婚という結末へ向かうことはなかったのです。

以上、残された信頼に足る資料に根拠を置きながら、離別後の憲吉と一枝の動向を見てきました。これに対しまして渡邊澄子は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」のなかで、その間の事情をどう書いているのでしょうか。少し比べてみたいと思います。渡邊は、こう書いています。

そこに突如、衝撃が一枝を襲う。憲吉が、一枝と藤子との関係を、肉体的墮落関係の同性愛・レズビアンと触れ歩いたというのだ。井出文子は水沢澄夫から、憲吉が「あの人はレズビアンだった」と語ったと聞いている⁴²。

述べていますように、憲吉が水沢に「あの人はレズビアンだった」と語ったのは、おそらく事実ではないかと思います。しかし、それを語るに当たっては、「長くためらったのち」と、井出は書いています。おそらく憲吉は、妻のセクシュアリティについて口外することを躊躇したものと思われます。しかし、別れた理由を問われれば、何も語らぬわけにもゆかず、余計な誤解を避ける意味もあって、「長くためらったのち」、つまり、内密をもって、あえて告白に至ったのではないのでしょうか。私は、そう判断します。

また、渡邊は、憲吉が語ったという、「あの人はレズビアンだった」の意味内容を、「一枝と藤子との関係」にあった「肉体的墮落関係の同性愛・レズビアン」と、独善的に解釈していますが、そうしたことを示す一次資料はどこにもありません。おそらく、憲吉がいう「あの人はレズビアンだった」は、結婚以来終戦までの家庭生活に現にその姿を現わしていた一枝のセクシュアリティを指しているものと思われます。もっとも、正確に言えば、一枝の

セクシュアリティは、レズビアンではなく、トランスジェンダーのそれでした。つまり、「同性愛」ではなく、実質的には「異性愛」だったのです。

そして、さらに渡邊は、「憲吉が、一枝と藤子との関係を、肉体的墮落関係の同性愛・レズビアンと触れ歩いた」と書きますが、憲吉が妻の性的指向を他者に「触れ歩いた」ことを示す一次資料も存在せず、これもまた、渡邊特有の妄想の類ではないかと思料します。

加えて、「富本一枝におけるセクシュアリティ」の別の箇所でも渡邊は、戦後のふたりの離別にかかわって、こうしたこともいっています。

この状況を井出文子はじめ誰も彼もが一枝を「捨てられた妻」と書いている。……一枝の晩年は自足していたと思う。捨てられたのは憲吉の方だった⁴³。

男女の別れを「捨てる」「捨てられる」の表現に置き換えて、一方の優位性を説こうとする渡邊の姿勢には、同意しがたいものがあります。それにしても、すでに引用で示していますように、一枝は、「戦後、私は一時死のうと思って、古い手紙など、身のまわりのものを焼き捨てたことがありました」と語っています。それに対して渡邊は、「一枝の晩年は自足していたと思う」と書きます。この渡邊の言説は、一体何に由来しているのでしょうか。これでは、正しい一枝の実像を描くことはできません。

他方、「捨てられたのは憲吉の方だった」と断定する根拠は、どこにあるのでしょうか。仮に一枝が憲吉を捨てたとして、夫を捨てた妻が、どうして、「死のうと思って、古い手紙など、身のまわりのものを焼き捨てた」りする行動をとるのでしょうか。また一枝は、「私は別れようとは夢にも考えたことはありません」とも、「朝夕、富本の作品を眺めて暮しております」ともいいますが、これを、夫を捨てた妻の言説として、果たして読むことができるでしょうか。明らかに一枝は、憲吉に対してこころからの敬意をもって接し、婚姻の継続を望んでいるのです。

夫婦が別れるには、どちらにとっても言葉に出して説明しがたい微妙な思いがそこには存在するものと推量されます。しかし、それでもやはり、この夫婦に関していえば、憲吉がいうところの「妻とは性格が合わぬので別居した」、「あの人はレズビアンだった」、というふたつの文言が、真実を語っているように思います。といいますのも、一枝も別れた理由を友人に語っているようですが、それは明らかに虚偽であるように判断できるからです。それではその事例を、以下に紹介します。

神近市子の文のなかに、富本憲吉と石田寿枝の出会いについて言及した箇所があります。神近は、一枝とは青鞥社時代からの親友で、戦後、参議院議員を務めます。「富本一枝 相見しは夢なりけり」と題したエッセイにおいて、神近は、このようなことを記述しているのです。一枝が亡くなった翌年の一九六七（昭和四二）年の文です。

ある日憲吉氏は、小さなカバン一つ持ってフラリと家を出られ、その儘帰られなかった。若き彼女が京都に待っていたかどうか、それは私には分からない⁴⁴。

さらに神近は、別のエッセイ「朋友富本一枝」では、こう回顧します。こちらは、それから六年後の一九七三（昭和四八）年に執筆されたものです。

彼女〔一枝〕の末路は悲しかった。それはどうしたことか、富本氏が別の女の人のところに行ってしまったからだった。岐阜あたりのどこかで出張焼物をしておられた時季に知合った婦人だとかで、富本氏は夫人のところへ帰らず、行き切りになってしまった。そしてその行先で死亡された^{4 5}。

上のふたつの引用文は、何を語っているのでしょうか。生前一枝が神近に漏らした内容に基づいて書かれたものであることは、ほぼ間違いないと思われます。そうであるならば、このことについての一枝の理解は、東京美術学校の教授をしていたときの岐阜県（飛騨高山）への作品疎開のための出張の際に憲吉はこの女性と知り合い、戦争が終わると、駆け落ちでもするかのように小さな荷物ひとつを手にしたままふらりと家を出て、この女性の住む京都に向かい、それ以降一度も帰宅することなくその地で死亡した、ということになります。しかし、前述の『毎日新聞』の記事は、「当時官吏であつた父と一緒に朝鮮の京城に渡り戦後引揚げて来た」あとの「昭和二十三年、富本氏が京都松風陶歯会社内に窯を築いたとき、松風工業研究所で輸出陶器の研究を続けていた石田さんは助手になり、同年十二月松風工業を退いて富本氏の身のまわりの世話などをするにいたつた」と、伝えています。この記事の記載内容が全き事実であるとするならば、戦時中の疎開先の飛騨高山でふたりが出会っていた可能性は、皆無に等しいと断言せざるを得ません。であるならば、飛騨高山で知り合った女性を追って憲吉は家を出たとする一枝の理解内容は、あろうことか、創作された虚偽ということになります。なぜ一枝は、真実と異なる理由でもって憲吉の大和出奔を説明しなければならなかったのでしょうか。おそらく一枝は、自身のセクシュアリティが引き起こす「女性問題」が原因で夫は家を出たとは、どうしても神近にいえなかったのでしょうか。端的に言えば、自分が「男女」であるとか、自分が「おめ」であるとか、口が裂けてもいえないのです。自己のセクシュアリティに関してカミング・アウトできなかったことに起因する、やむを得ない発話だったのではないかと推量されるものの、それでも、朋友の神近市子をしてそう信じ込ませてしまった一枝の妄言の罪は極めて重いといわざるを得ません。

しかしながら、これが、ある意味でひとつの一枝の真実の姿であったことも、疑いを入れないのです。といいますのも、すでに私は、一枝の「結婚する前と結婚してから」の文から一部を引用して紹介していますが、そのなかで一枝は、かかる早い段階において自分のことを、「偽もつゐた。人を欺しもした。いぢめもした。愛しもした」と書いているからです。つまり、一言でいえば、人にうそをつくことも、人を愛することも、生涯を貫く、一枝自身のひとつの本性だったのです。

改めてそのことを念頭に置いて、大和の安堵村から東京の千歳村へ移転したときの事情を、いま一度振り返って、考察してみたいと思います。

富本一枝の最初の評伝が、高井陽と折井美那子が著わした『薊の花——富本一枝小伝』です。高井陽は、富本憲吉・一枝夫妻の長女で、この本が上梓されるときには、すでに亡くなっていました。したがって、この本の最終的な記述は、もう一方の共著者である折井美那子の手によだねられていたものと思われます。それでは、この評伝には、富本一家の安堵村生活の終焉と東京移転に関して、どのように書かれてあるのでしょうか、以下は、その箇所からの引用です。

その頃になると長女の陽も成長し、中等教育をどうするか考えねばならなくなっていた。理想をもって始めた小さな学校は、十全とはいえなかったし、子どもたちに一層よい教育環境をと考えた時、それは安堵村では無理だった。子どもたちのために東京へ、そんな話が夫婦の間で何度か出たが、容易に解決できないでいた。

そんな時、憲吉の起こした女性問題によって、一枝は東京への移転を決意する。憲吉にとってはほんの一瞬の気の迷いであつたろうし、当時の男性にとっては、ありがちのことだったかも知れない。しかし一枝は深く傷ついた。一カ月に及ぶ、二人の夜ごとの話し合いの末、大正一五年三月、東京への移転が決められた⁴⁶。

このような記述をするに際して、書き手の折井は、いっさい注釈を施していませんし、また、最も肝心な証拠となる資料も明示していません。したがって、ここに述べられていることが真実なのかどうかを再検証する方がいまや完全に奪われているのです。

共著者である陽が、生前に、上のような内容を折井に漏らしていた可能性がないことはありません。しかし、たとえば、別の箇所では、「……と陽さんは語っている」⁴⁷とか、「陽さんの回想に詳しく書かれているが……」⁴⁸とか、「……という陽さんの記憶で」⁴⁹といった表現形式でもって、情報の提供者が明らかにされているにもかかわらず、この箇所に関しては、陽によって情報が提供されたことをうかがわせる注釈は残されていないのです。そのことから判断しますと、この記述内容は、折井の独断的な想像と判断によって練り上げられたストーリーであるといわざるを得ません。

記述の内容にも疑問が残ります。「憲吉の起こした女性問題によって、一枝は東京への移転を決意する」と、著者の折井は書いていますが、その相手は誰であつたのか、いつのことであつたのか、これらについては、何も語っていません。さらに、「当時の男性にとっては、ありがちのことだったかも知れない」「女性問題」がなぜ、「東京への移転」という、一般的にはあまりありがちとは思えない特殊な「決意」を一枝にさせてしまったのか、その理由についての言及もありません。

仮に、憲吉の身に「女性問題」が存在したとして、なぜそのことが、家族そろっての東京移住につながるのか、裏を返せば、なぜ一枝は離婚を考えなかったのか、あるいは、なぜ娘たちを連れての一枝単身の転居や実家への寄宿とはならなかったのか——こうした一般的に考えられそうな対応についても、何ひとつ説明がなく、ひたすら疑問だけが残ります。もしふさわしい資料が手もとにあるのであれば、もっと積極的にそれらの資料に真実を語らせるべきだったのではないかと考えます。

しかし、私がこれまでに調査した範囲でいえば、憲吉の「女性問題」を示す資料は、いっさい存在しません。したがって、東京移転の理由としての憲吉の「女性問題」は、いまだ折井個人の強引ともいえる仮説の域に止まっていると判断するのが妥当でしょう。このことを実証するためには、たとえば、憲吉と一枝の当事者たちを含め、周りの関係者たちの手紙や日記などに記述されているかもしれない、動かすことのできない何か新しい資料の発掘が必須の要件となるにちがひありません。もしそのことができなければ、憲吉にかけられた「女性問題」の嫌疑は、誰ひとりとして事実かどうかの再検証ができないまま独り歩きし、今後永遠に語り継がれてゆくことになるのです。これでは「冤罪」を構成しかねません。

すでに鬼籍に入っているとはいえ、実在した人物である以上、その名誉と人権は、当然ながら、尊重されなければならないのです。

この記述問題につきまして、私は、次のように推量しています。この情報は、おそらくは母親の一枝から娘の陽に伝えられた内容でしょう。こうしたストーリーを持ち出すことによって、一枝は子どもたちに東京移転の理由を説明したものと思います。それが折井に伝わり、折井はその真偽を検証することもなく、そのまま、情報の提供者名を伏せたうえで、文にしたのではないのでしょうか。それでは、なぜ一枝は虚偽のストーリーをつくらなければならないのでしたのでしょうか。性的少数者であることをカミング・アウトできないことに起因して、やむを得ず、真実とは異なるストーリーを捏造しなければならないものと考えます。つまりは、富本家の東京移住を、憲吉の「女性問題」に原因を置く折井美那子の言説もまた、すでに先に述べています、憲吉の京都市行きを、憲吉の「女性問題」に原因を置く神近市子の言説同様に、明らかに、事実を隠蔽して一枝自らが作り上げた創作的弁明だったのでした。

このときの一枝の「女性問題」につきましては、この小論ではわずかな示唆に止めています。詳細は、ウェブサイトで公開しています、中山修一著作集3『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』、著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』、および著作集11『研究余録——富本一枝の人間像』に所収の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」において述べています。そこでの記述のとおり、結論的にいえば一枝は、東京転地の原因を、自分の「女性問題」から憲吉の「女性問題」へと、見事なまでにうまくすり替えていたのでした。紹介していますように、「偽もつゐた。人を欺しもした。いちめもした。愛しもした」と、一枝は書いています。ここでも一枝は、愛する子どもたちであろうとも、彼らにうそをついて信じ込ませ、ひいては、それが、折井の文に反映されていったのではないかというのが、いま入手可能なほぼすべての関連する資料の範囲にあって、私が愚考するところです。

戦後すぐ東京を離れたことについて、憲吉は、次のような言葉でもって説明しています。

私にしてみれば、二十年間の東京生活の間に、船腹の貝殻のようにまといついたすべての社会的羈絆や生活のしみを、敗戦を契機に一举に洗い落としてしまいたかったのである。すでに郷里の大和へ一人で引き揚げる覚悟もついていた。私は陶淵明の帰去来の辞の詩文を胸中ひそかに口ずさみながら大和へ発った。……あれもこれも投げ捨てて、とにかく裸一貫で私は大和へ帰った。東京でなにものかに敗れたというような、みじめな思いはちりほどもない。耳順六十歳にして、私はむしろ軒昂たる意気込みだった。ロクロ一台、彩管一本をかたわらに私は新しい制作への意欲に燃えていたともいえよう⁵⁰。

大和の実家にもどった憲吉は、作陶の不便さに耐えかねて京都に向かい、そこで知り合った石田寿枝を内助者として借家住まいをはじめます。一九五五（昭和三〇）年に、色絵磁器で人間国宝の認定を受け、一九六一（昭和三五）年に文化勲章を受章し、京都市東山区山科御陵檀ノ後に新居が完成したのは、翌一九六二（昭和三七）年のことでした。続く一九六三（昭和三八）年三月に、京都市立美術大学を定年退職すると、その三箇月後、七七年の人生に幕を閉じるのでした。

一方一枝は、戦争が終わると、中村汀女の句誌『風花』の創刊に尽力し、その後、大谷藤子との縁で「山の木書店」を創設するも、経営に行き詰まり、晩年は主に『暮らしの手帖』に童話を寄稿する日々を送ります。

一枝は、結婚前の若いころ、取材のために自宅にやってきた『新潮』の青年（記者）が、「それで貴方は、貴方自分を世間の云ふ『新しい女』と自認して居ますか」と問うと、それに答えて、次のように話しています。

いゝえ、——世間で云ふ新しい女と云ふものは、よく分りませんけれども、不眞面目と云ふ意味が含まれて居るやうですね〔。〕私は不眞面目と云ふことは大嫌ひです。私は寧ろ、世間で言はれて居るやうな『新しい女』と云ふものが実際にあるならば、『新しい女』を罵倒して遣り度く思ひます。『新しい』『舊い』と云ふことは意味の分らない事ですけれども、舊い新しいの意味が、昔の女と今の女と云ふのなれば、私は昔の女が好きで且つそれを尊敬し、自分も昔の多くの傑れた女になりたいと思つて居ます。そして、私自身はどちらかと云ふと昔の女で、私の感情なり、行為なりは、道德や、習慣に多く支配されて居る事を感じます⁵¹。

ここから明らかなように、なぎ倒してでも「新しい女」を乗り越えて、自分も昔の多くの優れた女のようにになりたい——これが、このときの一枝が求める女性像だったのです。

そして、晩年には、一枝はこういっています。

ですから、私自身、まるで草履と下駄を片方づつはいて道を歩いているような人間だと言えましょう。

それにしても、同じ明治のあの時代に生きながら、平塚〔らいてう〕さんは全く別です。自分の考えを立派に育てて守り、見事に結実し、今日に至ってなお成長をとめることのない平塚さんを、私は友人として心から尊敬しています⁵²。

一枝は、自分のことを「まるで草履と下駄を片方づつはいて道を歩いているような人間」だったといっています。「草履と下駄」の二足とは、旧い女性像と新しい女性像との葛藤を意味するのでしょうか、それとも、体の性と心の性の乖離を暗に意味するのでしょうか。あるいはその双方を指しているのでしょうか。いずれにしても、「草履と下駄」という表現から、四方に入り乱れて渦を巻く苦闘の実相が容易に連想できます。一枝は、この晩年にあつて、「自分の考えを立派に育てて守り、見事に結実し、今日に至ってなお成長をとめることのない」、らいてうにみられるような姿を、自己の姿として見出すことはありませんでした。一枝にとっては、己の生と性にかかわって、すべての問題が、まさしく未決着だったのです。ここに、らいてうをはじめ、周囲の交流があった女性たちと違って、一枝が自伝を書かなかった、あるいは書けなかった理由が潜んでいたものと思料します。こうして、憲吉が亡くなった三年後、一枝は黄泉の客となります。享年七三歳でした。

おわりに——渡邊澄子「富本一枝におけるセクシュアリティ」の罪悪性

繰り返しになりますが、渡邊澄子は、「富本一枝におけるセクシュアリティ」と題する「論文」のなかで、以下のように私の著述を批判しました。

一枝におけるレズビアニズムを辻井喬の『終りなき祝祭』、時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の「著作集 3・4・11 巻」は一枝を性的墮落者と決めつけて猥褻に描いているが、一枝は中山が決めつけているような猥褻な「性的転倒者」だったのだろうか。

以上これまで、この批判に対する反批判として、私の見解を述べてきました。そこでこの「おわりに」にあっては、渡邊のその「論文」の罪悪性につきまして、五点にまとめます。

一点目として——

冒頭、先行研究の検討もなく、執筆の目的も方法も明示せず、本文にあっては、いっさい一次資料に依拠することなく思弁的に叙述し、したがって、最後に至っては、実証された結論も論理的な考察も不在となる、こうした文は、「論文」の名に値せず、真実や真理を探究しようとする学術研究にとって一利もなく、極めて有害な虚妄の作であると判断します。

二点目として——

一次資料に基づく論証や実証を完全にながしおいた「富本一枝におけるセクシュアリティ」についての叙述は、個人好みの思い付きや思い込みによる恣意的なものにすぎず、真実の富本一枝のセクシュアリティを大きく歪曲するとともに、強引に変質させ、ひいてはそれにより、富本一枝の生涯は見誤られ、曲解的な描出に終始していると判断します。

三点目として——

富本一枝の苦悩と悲痛の原因が自身のセクシュアリティにあったにもかかわらず、そのことに全く目を伏せ、いかなる証拠も示さず、一枝のこころの痛みが、あたかも夫、富本憲吉の「女性問題」にあったかのように蒙昧的に断言したことは、すでに鬼籍に入っているとはいえ、実在した人物である以上、その名誉と人権を著しく毀損するものであると判断します。

四点目として——

この文において渡邊は、「同性愛には性的墮落を伴う『遊戯的な愛』と『真つ当な愛』」の二種類の愛が存在すると一方的に論じ、前者の「性的墮落を伴う遊戯的な愛」をトランスジェンダーの愛に重ねては、それを「猥褻」とみなすその視点は、トランスジェンダー人間を不当にも排除しようとする偏見であり、見過ごすことのできない性差別であると判断します。

最後に五点目として——

渡邊は、私の「著作集 3・4・11 巻」を「時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない」と罵倒していますが、具体的箇所もその理由も何も示していません。また、渡邊は、「一枝は中

山が決めつけているような猥褻な『性的転倒者』だっただろうか」と書いていますが、私は一度たりとも一枝のセクシュアリティを「性的転倒者」という用語で表現したことはありません。他者の著述に対しての、根拠なき全否定も、事実を無視した決めつけも、真つ当な研究者にあつて許される行為ではありません。もし、真つ当な研究者を自認するのであれば、渡邊は、それにふさわしい良心と見識に基づいて、該当箇所すべてをすみやかに削除するよう求めます。

以上の五点をもちまして、渡邊澄子「富本一枝におけるセクシュアリティ」の読後感の骨子といたします。渡邊と私の、どちらの視点が正当であるかは、そのすべてを読者のみなさまの判断にゆだね、これをもって私は、ここに筆を置きます。

（二〇二四年九月）

注

- （1）渡邊澄子「富本一枝におけるセクシュアリティ」『大東文化大学紀要 人文科学』（第61巻）、2023年、391（44）頁。
- （2）同「富本一枝におけるセクシュアリティ」、400（35）頁。
- （3）富本一枝「あきらめの底から」『婦人公論』第8巻第7号、1923年、24頁。
- （4）「謎は解けたり紅吉女史の正體——新婚旅行の夢は如何に 若く美しき戀の犠牲者」『淑女畫報』第3巻第13号、1914年12月、35-36頁。
- （5）富本一枝「東京に住む」『婦人之友』第21巻、1927年1月号、112頁。
- （6）辻井喬『終りなき祝祭』新潮社、1996年、200-202頁。
- （7）渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』不二出版、2001年、269頁。
- （8）「女性間の同性戀愛——エリス——」『青鞥』第4巻第4号、1914年4月、1頁。
- （9）「編輯室より」『青鞥』第2巻第6号、1912年6月、124頁。
- （10）「女文士の吉原遊」『萬朝報』、1912年7月10日、水曜日。
- （11）紅吉「歸へつてから」『青鞥』第2巻第10号、1912年10月、131頁。
- （12）「東京觀（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』、1912年10月27日、日曜日。
- （13）尾竹一枝「Cの競争者」『番紅花』第1巻第3号、1914年5月、107頁。
- （14）前掲「富本一枝におけるセクシュアリティ」、390-389（45-46）頁。
- （15）『婦女新聞』第586号、1911年8月11日（金）、1頁。（「婦女新聞 第12巻 明治44年」、不二出版、1983年3月15日／復刻版発行、265頁。）
- （16）同『婦女新聞』、同頁。（同上、同頁。）
- （17）中山修一著作集11『研究余録——富本一枝の人間像』所収の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」、2023年4月11日（刊行日）、19頁。
この拙論は、以下の神戸大学学術成果リポジトリにおいて閲覧が可能です。
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492136>
- （18）中山修一著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』、2018年3月15日（刊行日）、91-92頁。

この拙論は、以下の神戸大学学術成果リポジトリにおいて閲覧が可能です。

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476417>

- (19) 前掲「富本一枝におけるセクシュアリティ」、395 (40) 頁。
- (20) 同「富本一枝におけるセクシュアリティ」、396 (39) 頁。
- (21) 同「富本一枝におけるセクシュアリティ」、395 (40) 頁。
- (22) 同「富本一枝におけるセクシュアリティ」、同頁。
- (23) 山本茂雄「富本憲吉・青春の軌跡——出会い・求婚・結婚までの書簡集」『陶芸四季』第5号、画文堂、1981年、75頁。
- (24) 富本一枝「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』第2巻、1917年1月号、71頁。
- (25) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、72頁。
- (26) 同「結婚する前と結婚してから」『婦人公論』、同頁。
- (27) 富本一枝「私達の生活」『女性日本人』第1巻第2号、1920年、56頁。
- (28) 前掲「東京に住む」『婦人之友』、109頁。
- (29) 同「東京に住む」『婦人之友』、同頁。
- (30) 前掲『青鞥の女・尾竹紅吉伝』、211頁。
- (31) 前掲「東京に住む」『婦人之友』、110頁。
- (32) 同「東京に住む」『婦人之友』、111頁。
- (33) 尾形明子「富本一枝と『女人藝術』の時代」『彷彿月刊』2月号（通巻185号）、弘隆社、2001年、17-18頁。
- (34) 富本一枝「春と化粧」『新装 きもの随筆』双雅房、1938年、279頁。
- (35) 大谷藤子「失われた風景」『學鐙』第60巻第12号、1963年12月号、42頁。
- (36) 海藤隆吉「祖師ヶ谷の家」『富本憲吉のデザイン空間』（展覧会図録）、松下電工汐留ミュージアム編集、2006年、6頁。
- (37) 井手文子「華麗なる余白・富本一枝の生涯」『婦人公論』第54巻第9号、1969年9月、346頁。
- (38) 尾竹親『尾竹竹坡傳——その反骨と挫折』東京出版センター、1968年、264頁。
- (39) 『毎日新聞』（大阪）、1949年10月25日、2頁。
- (40) 同『毎日新聞』、同頁。
- (41) 同『毎日新聞』、同頁。
- (42) 前掲「富本一枝におけるセクシュアリティ」、393 (42) 頁。
- (43) 同「富本一枝におけるセクシュアリティ」、同頁。
- (44) 神近市子「このひとびと③ 富本一枝 相見しは夢なりけり」『総評』、1967年10月20日、4頁。
- (45) 神近市子「朋友富本一枝」『在家佛教』第234号、1973年9月、54頁。
- (46) 高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』ドメス出版、1985年、149-150頁。
- (47) 同『薊の花——富本一枝小伝』、126頁。
- (48) 同『薊の花——富本一枝小伝』、137頁。
- (49) 同『薊の花——富本一枝小伝』、147頁。
- (50) 『私の履歴書』（文化人6）日本経済新聞社、1983年、223-224頁。〔初出は、1962

著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』
本人と仲間たちの語りで綴る富本一枝の生涯
付録一 私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）

年 2 月に『日本経済新聞』に掲載。]

（5 1）「謂ゆる新しき女との対話——尾竹紅吉と一青年」『新潮』、1913 年 1 月、107 頁。

（5 2）富本一枝「青鞥前後の私」、松島栄一編『女性の歴史』（講座女性 5）、三一書房、1958 年、178 頁。

付録二 私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）

はじめに——なぜ「私の著述に向けられたある批判に関連して」の続編を書くのか

「私の著述に向けられたある批判に関連して」を擱筆しました。しかし、いまだ私の脳裏には残像が回遊しています。消えてなくなる前に、現在の私の心境を、「私の著述に向けられたある批判に関連して（その二）」と題して、ここに少し書き残しておきたいと思います。

デザイン史家としての私は、一九世紀英国の詩人にして、デザイナーであり社会思想家のウィリアム・モリスの研究からスタートしました。このモリスの思想と実践に関心をもち、日本で最初に英国に渡ったのが、のちに陶工となる富本憲吉でした。こうして私の研究に、新たに富本憲吉研究が加わりました。調べを進めてゆきますと、憲吉の妻の一枝が、結婚以前にあって、青鞥社の社員であったことがわかりました。その関係で、富本一枝研究の先行文献である、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』を読んでみました。読んで最初に驚いたのは、この間私は、英国で出版されたウィリアム・モリスに関する伝記や学術書を主として研究の素材としていまして、それには、どれも注や出典が詳細に明記されており、私のような後発の研究者はそれを頼りに記述内容にかかわって検証が可能となっていたのですが、この二冊につきましては、そうした学術上必要と思われる注も出典も何も付けられていないことでした。とりわけ、富本憲吉の家族が、大和の安堵村を出て、東京の千歳村に転居するに当たって、両書とも憲吉の「女性問題」がその背後にあったことが指摘されていましたが、しかし、そうは書かれてあっても、何を証拠に、どんな根拠があって、そう書かれてあるのか、何も明示されておらず、新参の研究者である私は、そのことにとても戸惑いました。そこで私は、一枝が寄稿していた『青鞥』や、一枝の主宰誌であった『番紅花』などを、時間軸に沿って順番に読み始めました。そうしたら、先行研究の二冊に叙述されている一枝とは異なる一枝像が次第に現像されてゆき、驚愕するというよりも、先行研究に書かれてある内容をひたすら信じていた私でしたので、何か恐怖心のようなものを感じるようになりました。果たして、先行する研究成果と、いま私の手もとにある情報との落差をどう埋めたらいいのだろうか——。いくら探しても、憲吉の「女性問題」を扱った一次資料は見当たらず、その一方で、自身を「男女」とも「おめ」とも本人は公言（カミング・アウト）してはいませんが、入手された幾つもの一次資料から、一枝は、当時の俗語にいう「男女」、今日用語にいう「トランスジェンダー」のセクシュアリティの持ち主であることが浮かび上がってきました。そこで私は、安堵村から千歳村への移転の原因は、憲吉の「女性問題」にあるのではなく、一枝のセクシュアリティにその要因があったのではないかという思いに至り、さらに関連する資料の渉猟に入りました。すると、東京移転についてこの夫婦のあいだで話し合いがもたれるようになる直前に、富本家のふたりの娘の教育の場として設けられていた私設の「小さな学校」から女教師の姿が突然消えていたことが明らかになりました。こうして私の推論はさらに深められ、一枝とこの女教師とのあいだに発生した「女性問題」こそが、安堵村を出て東京へ向かわなければならなかった原因だったにちがいないという確信へと至りました。しかし、一枝の「女性問題」は、ただ単に、このときの大和出国というひとつの出来事に止まらず、一枝の全生涯に影を落としていた深刻な問題であることに気づくようになり、この夫婦の苦悩が、ひとえに一枝

のセクシュアリティにかかわって成り立っていることが見えてきました。男を自認し女を性愛の対象とする妻と、男である夫が営む家庭ですので、安定的な夫婦関係の維持に無理が生じないはずはありません。憲吉も一枝も、こうした家族空間のなかにあつて、それぞれがそれぞれの立場から口に出しにくい苦痛を抱えて生きていたのです。ここに新たに発見された家族空間を伝記という形式で叙述したものが、私がウェブサイト公開しています、中山修一著作集4『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』と著作集5『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』の二作で、セクシュアリティにまつわる一枝の苦しみという文脈に特化して描いた伝記が、著作集11『研究余録——富本一枝の人間像』に所収の「第一編 富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」なのです。そして、これらの文のなかにおいて私は、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』の記述内容にかかわって、その問題点を率直に指摘したのでした。

それからしばらく歳月が流れ、最近偶然にも私は、渡邊澄子の「富本一枝におけるセクシュアリティ」と題された「論文」に出くわしました。先行研究である私の上記の論述を受けて、記述内容になにがしかの変化があるものと思い、読み始めましたが、いかなる変化も認められず、それどころか、以下のような批判を目にした私は、驚きと怒りを禁じえませんでした。

一枝におけるレズビアニズムを辻井喬の『終りなき祝祭』、時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない中山修一の「著作集3・4・11巻」は一枝を性的墮落者と決めつけて猥褻に描いているが、一枝は中山が決めつけているような猥褻な「性的転倒者」だったのだろうか。

私はこの批判に対して、今後書く文の片隅にでも、「事実無根の批判は名誉棄損に相当する」くらいの一言の反駁を書こうかとも思いましたが、しかしながら、渡邊澄子の「富本一枝におけるセクシュアリティ」の内容をよく見ると、形式的には、「論文」の体を成さず、内容的には、『青鞥の女・尾竹紅吉伝』における記述から一步も前に進まず、一枝のセクシュアリティについては全くの誤認が、憲吉については、いまだありもしない「女性問題」が、傍若無人に闊歩しており、私は、このことがどうしても看過できず、ここに「私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）」を草すことに至ったのでした。

一枝のセクシュアリティについての誤認は、渡邊が最初ではありません。先行する、高井陽・折井美那子の『薊の花——富本一枝小伝』のなかに、意図的に真実を隠すかのような記述が見て取れます。以下の引用がその部分です。

一枝がまわりの人にできる限りの援助の手をさしのべるという生き方に徹するのはこの頃『婦人公論』に「共同炊事に就いて」を寄稿した一九三〇年ころからである。それは、人に尽くすことは最高の美德と教えた母の訓えでもあり、一枝自身の困っている人を見すごすことができないヒューマニズムでもあった。しかしその底には、天賦の素質をもちながら自己の芸術を完成させることのできない己に代って、他に尽くすことによる間接的な自己表現、あるいは代償行為といった心持が、無自覚的にひそんでいた。それは広い意味でいえば母の心ともいえる。しかし一枝は純粋なあまり、夢中にな

りすぎたし、若くて、美しくて、有能な女性には、理屈抜きで好意をもった。こうして、一枝の一生のうちで誤解されやすい同性への熱中が何度か繰り返される¹。

以上のように、著者の折井美那子は、一枝のセクシュアリティにかかわって、「同性愛」や「トランスジェンダー」といった用語には目もくれず、「誤解されやすい同性への熱中」という表現を駆使して、一枝の真のセクシュアリティを隠したのでした。一方渡邊澄子は、本文で詳述していますように、一枝の「同性愛」は認めたものの、同性愛には性的墮落を伴う「遊戯的な愛」と「真っ当な愛」の二種類の愛が存在すると前置きし、一枝の「同性愛」を「真っ当な愛」とみなして、性的墮落を伴う「遊戯的な愛」から守ろうとしたのでした。渡邊が二分法に使う「真っ当な愛」とは、今日的用語で置き換えれば、「レズビアン²の愛」で、一方の「遊戯的な愛」とは、「トランスジェンダーの愛」を指すものと思われます。なぜ、折井も渡邊も、数々の資料が語っているにもかかわらず、完全にそれに目を伏せてしまい、一枝をトランスジェンダー男性とみなそうとしなかったのでしょうか。おそらくそれは、ふたりの目には、性的少数者の愛が、とりわけトランスジェンダーの愛が、猥褻で気持ちの悪いものと映っていたからなのでしょう。そうした強固な偏見的視点があったために、折井は、一枝のセクシュアリティを「同性愛」から遠ざけ、「誤解されやすい同性への熱中」とし、渡邊は一枝のそれを「トランスジェンダー」から引き離して、同性の「真っ当な愛」としたのではないかと思量します。加えて、幾多の資料が語るように、一枝の悲痛は、自身のセクシュアリティにかかわるものであったにもかかわらず、折井も渡邊も、それを、あろうことか、憲吉の「女性問題」に起因させたのでした。明らかにこれは冤罪です。私がこの拙文「私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）」で試みたのは、まさしくその構造を明確化し、歴史的虚偽を払拭することにあります。その成否の判断は、すべて読み手のお一人おひとりの思いにゆだねたいと思います。

しかし、ここまで書いた以上は、駄文になろうことは十分に理解したうえで、もう少し、この問題に関連して、いま自分が愚考するところを書き進めることをお許しください。

第一節 女性史と高群逸枝を巡って

私は、前作「私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）」におきまして、青鞥社時代の尾竹紅吉（のちの富本一枝）本人が語る、自己のセクシュアリティを五例挙げて紹介しました。そのなかの二例を、改めてここに書き写します。折井も渡邊も言及していない紅吉の語りです。

私は苦しい苦しい心の病氣を、少しでも慰めるために、十二階下にみつた。銘酒やの女を見に行つた。…私は立派な男で有るかの様に、懷手したまゝぶらりぶらり、素足を歩まして、廻つて來た、その気持のいゝ事。あの女の一人でも私の自由に全くなつて來れたらなら…とあてのない楽しみで歸つて來た。

私にはちいさな時分から美しい女の人をみるのが非常に心持のよいことで、また、大變に好きだつたのです。それで私の今迄の愛の對照³になつてゐた人のすべては悉く

美しい女ばかりでした。

一枝が自分のセクシュアリティを語った文は多数残されています。とりわけ上記ふたつの引用文は、はっきりと自身の性自認と性的指向を告白した言説として、注目することができます。「男女」や「おめ」という用語を使って自身のセクシュアリティを告白しているわけではありませんが、事実上、そのことを「カミング・アウト」した内容となっています。

そこで私がいま一番疑問に思っていることは、なぜ折井も渡邊も、一枝が語る性自認と性的指向をかたくなに隠してしまい、そして、そこにこそ一枝の苦しみが集約されていたにもかかわらず、それを憲吉の「女性問題」にすり替え、虚妄の物語をつくり上げたのだろうかという点です。意図的であったのか、そうでなかったのか、意識的だったのか、そうでなかったのか、それはわかりません。しかし、ひとりであれば単なる誤述ですますこともできますが、ふたりも続きますと、そういう理解で終わらせるにはどうしても無理があるように思われます。兩人ともおそらく女性でしょうから、これには、共通した女性固有の視点が働いているものと愚考せざるを得ません。それではそれは、一体どのような視点なのでしょう。それは、本人たち以外にはわからないことであり、第三者にとっては推論するしかありません。しかし、捨て去りがたい疑問として私の体内に存在する以上、それについて周辺の資料を頼って吟味すること自体、推論とはいえども、自由なる思考の一環として許され、必ずしも批判の対象とはなりえないものと思ひ、以下に論述させていただきます。

周知のとおり、日本における女性史学の創設者ある高群逸枝は、一九三一（昭和六）年七月、「森の家」と呼ばれる新築された自宅に移り、女性史研究の道に入ります。ここから、主に以下のような研究成果が生み出されてゆきました。

『大日本女性史 母系制の研究』厚生閣、1938（昭和13）年6月。

『招婿婚の研究』大日本雄辯會講談社、1953（昭和28）年1月。

『女性の歴史』上巻、大日本雄辯會講談社、1954（昭和29）年4月。

『女性の歴史』中巻、大日本雄辯會講談社、1955（昭和30）年5月。

『女性の歴史』下巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和33）年6月。

『女性の歴史』続巻、大日本雄辯會講談社、1958（昭和33）年7月。

『日本婚姻史』至文堂、1963（昭和38）年5月。

他方高群は、こうした研究成果を世に問うに先立って、一九三〇（昭和五）年の一月に無産婦人芸術連盟を結成すると、続く三月にその機関誌『婦人戦線』を刊行し、「森の家」にこもる前月の六月に廃刊にするまで、通算一六号を発行します。私が注目するのは、この無産婦人芸術連盟の創設の目的と、それを表わした「綱領」です。高群は、『婦人戦線』の創刊号（三月号）に「婦人戦線に立つ」を書きました。それは、婦人の「個人的自覚」から「社会的自覚」へと踏み出すことを強く訴える内容になっています。冒頭、高群は、こう書きます。

わが国における、婦人自覚史は、かの「青鞥」運動に、最初の頁を起した。それは、

誰も知るやうに、婦人の「個人的自覚」によつたもので、その後、いく星霜かを経て、いま茲に、我々によつて、婦人の「社會的自覚」にもとづく、劃時代的の運動が、起こされようとするのだ²。

一方、高群の意思は、創刊号に掲載されている「創刊宣言」または「綱領」と呼ぶにふさわしい以下の文言に端的に凝縮されています。これが、無産婦人芸術連盟の旗印となるものでした。

- 一 われらは強權主義を排し、自治社會の實現を期す。
標語 強權主義否定！
- 二 われらは男性専制の日常的事實の曝露清算を以て、一般婦人を社會的自覺にまで機縁するための現實的戰術とする。
標語 男性清算！
- 三 われらは新文化建設および新社會發展のために、女性の立場より新思想新問題を提出する義務を感じる。
標語 女性新生！³

上の三つの標語のなかの「男性清算」と「女性新生」が、この文脈にあつてとりわけ私の目を引きまします。つまり、高群女性史学の根底には、「社會的自覚」によつてもたらされるところの「男性清算」と「女性新生」が岩盤となつて作動していたのではないかという思いに、私はどうしても駆られてしまうのです。さらにそうした思いを押し進めれば、私の思考の流れは、今日に至る日本における女性史研究の發展を支える土壌には、社會的な自覚の上に立つて最初に高群によつて蒔かれた「男性清算」と「女性新生」という種子がすべからく息づいているのではないかという独自の仮説の域へと、必然的に漂着することになります。そして、その仮説をして私に語らしめるのが、高群史学にその源をもつ共通の種子の一発芽形態が、高井陽・折井美那子の『薊の花——富本一枝小伝』であり、渡邊澄子の『青鞥の女・尾竹紅吉伝』ではなかったかという推論です。つまり私には、性的少数者を猥褻とみなし、その世界から一枝を隠しては「女性新生」を計り、他方、その悲しみを希釈し、代わつて夫の「女性問題」を持ち出しては「男性清算」を企てる——これが、両書籍にみられる共通の種子のように見えているのです。そして、「男性清算」と「女性新生」が過度に強調される土壌にあつて、その結果として、誤謬という不要な雑草が覆い繁ることになります。この雑草こそが、まさしく、一枝のセクシュアリティーにかかわる、ある種善意を装つた誤認であり、憲吉の「女性問題」を刃に使つた、隠れた一種の悪意なのです。もしこの論理に、一抹の真理が含まれているとするならば、雑草除去の機能が正常に働かない限り、女性史研究の内にあつて、量の多い少ないは別にして、なにがしかの雑草が常に芽を出す可能性が示唆されることになります。果たして、どうでしょうか。もっとも、わずかに二例をもつて、その研究分野の全体的傾向とすることは、当然ながら厳に慎まなければなりません。

第二節 高群逸枝の伝記のなかにも

確かにそれはそうなのですが、もう少し私の周囲に目を移してみますと、高群逸枝の伝記それ自体のなかにも、「男性清算」と「女性新生」の二項で構成されていると思われる事例が認められるのです。

高群逸枝の夫で、『高群逸枝全集』（全一〇巻）の編集を行なった橋本憲三は、最晩年において、瀬戸内晴美の「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」において、そして、戸田房子の「献身」において、小説という虚構空間のなかで、いわれなき汚名が浴びせられ、苦しめられました。これが、憲三の死期を早めさせた可能性さえあります。さらには没後に至っても、円地文子監修の『近代日本の女性史 第二巻（文芸復興の才女たち）』に寄稿した「高群逸枝」において、女性史研究家である著者のもろさわようこは、死者の霊を傷つけるような、こころない侮蔑の言葉でもって憲三を罵倒しました。そこでここで、「男性清算」と「女性新生」のふたつの項目が、この、もろさわの「高群逸枝」にどう反映しているのかを、以下に少し見てみたいと思います。

一九八〇（昭和五五）年の秋のある日、憲三の妹の橋本静子のもとに一冊の本が集英社から送られてきました。見るとそれは、集英社刊の円地文子監修『近代日本の女性史 第二巻（文芸復興の才女たち）』でした。これは、女性史に関する論集で、そのなかにもろさわようこが執筆した「高群逸枝」がありました。読み通した静子に、体の震えが止まらない、大きな憤りが吹き出してきたにちがいありません。何ゆえに、こうまで兄が罵倒されなければならないのか——。さっそく静子はペンを握り、もろさわに宛てて手紙をしたためました。これが、憲三の死去に伴い廃刊となっていた『高群逸枝雑誌』が息を吹き返し、「終刊号（第三二号）」として発刊されなければならなかった要因となる部分でした。この誌面に、その手紙は掲載されます。そして、静子の文は、次の言葉ではじまります。

集英社から『近代日本の女性史』第二巻が贈られました。この本のもろさわ様の御担当になる『高群逸枝』を拝見しましたので、初めてお手紙を差上げます。

兄憲三をいわれもなく侮辱されていますし、二人の四十五年の共生が憲三の卑しい志のゆえんであったと、意図してお書きになっているように思います。憲三には、いずれも「婦選会館」のかかわりで二度の面識と言われながら、二回の瞥見で他人の七十九歳の生を斬られたことは無謀だと思いました⁴。

こうした前書きのあと本論に入り、もろさわの文のもつ誤謬や偏見の数々を、その頁を明記しながら、指摘してゆくのでした。

それでは、もろさわが書いた「高群逸枝」とは、どのような文だったのでしょうか。内容的には、これまでに刊行された高群逸枝に関する二次資料をなぞったもので、何ら新規性はありません。形式的には、節の番号は付されてありませんが、「その死をめぐって」「詩と真実」「愛と自由」「所有被所有をこえて」の四節で構成され、後ろの三つの節が、逸枝に関する評伝になっています。もろさわは、最初の節である「その死をめぐって」のなかで、婦選会館ではじめて見知ったころの憲三の風采を、このように描写していました。

憲三は少年のおり傷つけた左眼が失明しているため、首をいささか左にかたむけ、肩をいからせ勝ちにしていた。物資のない戦中に使われた粗末ななわ編みの古びた買い物

袋をいつも下げて持ち、膝のつきでた古ズボンをはき、ちびた下駄をせかせか飛び石に鳴らして、婦選会館へ入ってくる彼は、その気配に都会人のダンディズムはみじんもなく、野の少年のひねこびたなれの果てといったおもむきの人でもあった。それから絶えて会うことがなく、十年余の歳月があったのだが、彼は当時と同じく、大人の男の気配を相変わらずその身に宿してはいなかった⁵。

この描写に、静子は度肝を抜かれたものと推量します。今日的な用語でいえば、明らかにこれは、「ルッキズム (lookism)」に相当します。もろさわは、他人の身体や容姿や服装に関して、何ゆえにかくも「外見差別」を行なうのでしょうか。私の目には、無謀なる「男性清算」の極みに映ります。一方もろさわは、最終節の「所有被所有をこえて」にあって、その末尾に、次の語句を当てます。

逸枝はらいてうの「忠実な娘」と自称しているが、その史的業績は、らいてうにまさるとも劣っていない⁶。

このようにもろさわは、高群逸枝の仕事を高く評価してみせます。もろさわは、このように書くことによって、一種の「女性新生」を醸し出そうとしているのでしょうか。しかし、「史的業績」の比較考量など、そう簡単にできるものではないように愚考します。どういう基準で行なったのでしょうか。また、たとえそれが可能であったとして、そのことがどんな意味をもつのでしょうか。もろさわは、それらについては何も書いていません。つまり、ここにみられる断定は、もろさわの、独り高みに立った実証なき蒙昧にすぎないのです。女性史家によるこの文が、研究論文として書かれたものなのか、単なる雑文の類として書かれたものなのか、それは私にはわかりませんが、いずれにしても、極めて問題を残す結論となっていると思料します。

しかし、問題はそこにあるわけではありません。といいますのも、言及しました、「その死をめぐって」における憲三に対する「外見差別」と、「所有被所有をこえて」における逸枝に対する「業績礼賛」とのあいだには、大きな断絶が認められるからです。換言すれば、こうした叙述の構図に、夫と妻、つまりは男と女のあいだにくさびを打ち込もうとする、際立つもろさわの意図が感じ取れるからです。それが、「女性を善、男性を悪」とみなす、単純な図式が支配する、埋め込まれた固定概念、あるいは、刷り込まれた偏見に由来するものであったのかどうかは判断しかねますが、それを否定することもまた、同じくできないものと思われます。しかし、このもろさわの文は、それから四〇年以上が経過した今日の女性史研究者の言説（たとえば岡田孝子の言説）にも登場し、いまなお生き続けているのです。その事例につきまして、以下に触れます。

もろさわようこの「高群逸枝」以降も、高群逸枝と橋本憲三への周囲の関心は衰えを知りませんでした。自著の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』のなかで栗原弘は、高群の学問は史料改竄の結果であり、それは、日記や随筆などの高群の全著作に及ぶことを明言し、他方、その妻の栗原葉子は、『伴侶 高群逸枝を愛した男』を著し、そのなかで、憲三をその共犯者に仕立て上げました。静子の悲しみは、いかほどだったのでしょうか。しかし静子は、もろさわようこのときと違って、それへの反論はいっさい行なっていません。すでに体力的に弱

っていたとも、周りからの度重なる罵声に身を凍らせていたとも、考えられます。静子が死去すると、桜吹雪のなかその遺体を乗せた車が水俣川の土手を行くとき、独り石牟礼道子は手をあわせて見送りました。こうして道子は、遺された唯一の者として、憲三と静子の無念を、しっかりと胸に刻んだのでした。それから四年の歳月が流れました。

石牟礼道子の『最後の人 詩人高群逸枝』が藤原書店から上梓されたのは、二〇一二（平成二四）年一〇月でした。この本は、『高群逸枝雑誌』に連載されていた「最後の人」に加えて、補遺として、「森の家日記」「『最後の人』覚え書——橋本憲三氏の死」「朱をつける人——森の家と橋本憲三」を含む旧稿の数編と、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」とによって構成されていました。

「最後の人」の取材メモとなる「森の家日記」には、「森の家」で橋本憲三と石牟礼道子が交わした、橋本静子を仲立ちとする「後半生の誓い」と、男女としての「聖なる夜」に関する記述が含まれており、その内容は、極めて衝撃的なものでした。さらに加えて、衝撃的なことが、「〈インタビュー〉高群逸枝と石牟礼道子をつなぐもの」のなかにも現われます。このインタビューは、二〇一二（平成二四）年八月三日に道子の自宅において行なわれました。聞き手は、藤原書店の藤原良雄です。

——憲三さんから逸枝さんのことをお聞きになって、憲三さんの姿もそばで見ておられて、「憲三さんのことを」そう思われたわけですね。

石牟礼 はい。憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる。

——「最後の人」というのはどういう思いで。

石牟礼 こういう男の人は出てこないだろうと。

——憲三さんのことを。

石牟礼 はい。高群逸枝さんの夫が、「最後の人」でした⁷。

ここではっきりと道子は、自分にとっての「最後の人」が橋本憲三であることを、世に告白するのでした。『最後の人 詩人高群逸枝』の刊行から六年後の二〇一八（平成三〇）年二月、石牟礼道子は帰らぬ人となりました。享年九〇歳でした。

それからおよそ四年が立ち、藤原書店から『高群逸枝 1894-1964 女性史の開拓者のコスモロジー』（別冊『環』26、二〇二二年刊）が世に出ます。これは、多くの論者による論考を集めたもので、そのなかに、女性史研究家の岡田孝子の「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」が所収されていますので、ここに紹介します。

岡田は、「もうこれ以上の素晴らしい男性は出てこない、『最後の人』だと石牟礼道子にそこまで思わせた橋本憲三とは、どのような人物だったのか」⁸という問いを發します。しかし、『最後の人 詩人高群逸枝』に書かれていた記述内容は、岡田にとって驚きの連続だったようです。岡田が驚きの読後感を書き並べた箇所を、少し長くなりますが、以下に引用します。

「そこしか、わたしの身を置く場所はなかった」とはどういうことなのか。夫の弘や

息子のいる水俣の「家」は、彼女の居場所ではないのだろうか。告白めいたことばでもある。しかも、この後さらに彼女は「その後の著書はすべて『椿の海の記』に至るまで、師が最初の読者、批評家であった」という。逸枝に対してと同じようなことを憲三は道子にしていたことになる。

「森の家日記」の十一月六日のメモは、なかなか衝撃的でもある。

「晴れ 弘より手紙、ガックリ、内容空疎」

当時の彼女の心境が実にリアルに記されていてドキッとさせられてしまう。それに、その前の七月五日には「彼女の遺品——帽子とオーバー——着てみよとおっしゃる。そのとおりする。鏡をみてる。よく似ているとのこと。感動」。

七月十一日の日記は、さらに読む者に戸惑いを与える。「木立の中の深い霧。私の感情も霧の中に包まれてしまう。しかしそれは激烈で沈潜の極にあるものだ。沐浴。今朝の私は非常に美しい、貴女は聖女だ、鏡を見よと先生おっしゃる。悲母観音の顔になったと見とれる」。

このような記述が随所にあり、また、道子は甲斐甲斐しく一人住まいの憲三の食事から身の回りの世話までしている。全体を流れる不思議な関係の、それもどこか悩ましささえ漂う雰囲気は私は感じてしまうのだが、これは考え過ぎだろうか。……彼女は何を思い、『最後の人』で伝えようとしているのか⁹。

岡田は、『最後の人 詩人高群逸枝』に書かれてある、「森の家」での憲三と道子の同棲生活がどうにも理解できないようです。これまでに自分が獲得した憲三像と、この本のなかで石牟礼が語る憲三像とが一致せず、混乱に陥ってしまったのではないかと思います。ふたつの像の乖離を、もろさわようこの「高群逸枝」を引き合いに出して説明する箇所がありますので、同じく以下に示します。

一九五二年、初めての出会いの時、もろさわようこの目に映った憲三は「膝のつきでた古いズボンをはき、ちびた下駄をせかせか」と鳴らしながら歩き、「都会人のダンディズムはみじんもなく、野の少年のひねこびたなれの果てといったおもむきの人」だった。十年余の後、病院で再会したものの、「大人の男の気配を相変わらずその身に宿してはいなかった」し、「おもいを妻に密着させ、他者への配慮を欠く憲三の自己中心的な態度」「偏屈な男」等々と描写していて、石牟礼道子が描く憲三像とはあまりにもかけ離れている。道子は「一人の妻に『有頂天になって暮らした』橋本憲三は、死の直前まで、はためにも匂うように若々しく典雅で、その謙虚さと深い人柄は接したものの心を打たずにはいなかった」と記しているのだから¹⁰。

かつて、もろさわの「高群逸枝」を読んだ橋本静子は、すでに引用で示していますように、このように反論していました。

兄憲三をいわれもなく侮辱されていますし、二人の四十五年の共生が憲三の卑しい

志のゆえんであったと、意図してお書きになっているように思います。憲三には、いずれも「婦選会館」のかかわりで二度の面識と言われながら、二回の瞥見で他人の七十九歳の生を斬られたことは無謀だと思いました。

しかし岡田は、もろさわの文に強く反駁した静子の「もろさわよう子様へ」にはいっさい触れていません。なぜなのでしょう。憲三の妹の、しかも無名の女の文など取るに足らないものであるとして無視し、切り捨ててしまったのかもしれませんが。

実際のところ、憲三の死に際して、静子も道子も、こころからの献身的対応をしています。以下は、道子の文からの引用です。病床にありながらも憲三を思う姉の藤野の気持ちも、よく伝わってきます。なかに出てくる「佐藤さん」という人物は、憲三の主治医で、佐藤の母親と逸枝が幼年時代の同期生でした。

静子さんこの十日間ほとんどお睡りにならない。……

佐藤さん、午後からほとんどつきっきり、いよいよフェルバピタール打たねばならぬようになったようですとおっしゃる。お悩みのご様子。

先生のお姉さんの藤野さんが、若主人におんぶされておいでになる。そしておんぶされたまま肩越しに、よく透る声で、

「憲さあん、憲さあん！姉さんが面会に来たばあい。もう、もの言わんとなあ」

とおっしゃる。そのお声の愛情、哀切かぎりなく、先生の寝息と交互に、

「おお、思うたより、やせちゃおらんなあ。憲さあん、うつくしゅうしとるな」

静子さんも佐藤さんも髪ふりみだしている、たぶん私も。徹夜¹¹。

憲三とはわずかに二回しか顔をあわせたことのないもろさわの言説を信じるか、静子とともに憲三の最期を必死に看取った道子の言説を信じるか、それは人さまざまでしょうが、比べれば、その信頼性なり信憑性は、明らかなように思われます。いや、むしろそれ以上に、私は、もろさわのこの「高群逸枝」の文にみられる憲三についてのルッキズム的描写は、明らかに人権侵害であり、名誉棄損であると考えますが、岡田はこれにいっさい意を用いず、平然ともろさわの言説と石牟礼のそれとを並置し論じており、私には、この方が、より問題적ではないかと思料されます。

一方、『高群逸枝 1894-1964 女性史の開拓者のコスモロジー』には、女性史家で評論家の山下悦子の「小伝 高群逸枝」も所収されていますので、これについても、触れておきます。山下の文は、概略、逸枝の思いに理解を示さない自己中心的で欺瞞的な性格をもつ憲三をからませながら、疎外された逸枝の苦悩の人生を描きます。おおかたこれは、これまでしばしば逸枝の評伝や評論にみられた記述の観点と手法を踏襲したものといえます。山下の言説に対置するために、以下に、逸枝と憲三の夫婦に向ける石牟礼のまなざしを書き記します。

それにしても、憲三にむけてのみ終生積極的に愛を訴え、それを確認したが、共に「完成へ」と歩んだのは、よくよくその夫を好きであったと思われる¹²。

そしてまた、石牟礼は、こうも記述します。

私どもが夫妻の生き方に心をゆすぶられてやまないのはなぜなのか、愛の形はいろいろあろうけれども、この二人においては徹底的に相手に対して真摯にむきあい、慢性的な弛緩やなれあいが、みじんも感ぜられないからであろう¹³。

これらふたつの石牟礼の言説からもわかりますように、山下が理解する逸枝と憲三の夫婦像と、石牟礼の理解するそれとは、はっきりと完全に分かれるのでした。

本文を書き終えたところで山下は、こう書きます。「最後に、ここでは高群逸枝の死後、一二年間生きた橋本憲三に触れる予定だったが、枚数の関係で別の機会に譲りたいと思う」¹⁴。筆が止まった理由は、「枚数の関係」もあったのかもしれませんが、それだけではなく、石牟礼道子が『最後の人 詩人高群逸枝』のなかで書いていた、橋本憲三との親密な関係を理解することができなかったことに、多くの要因があったものと推量します。つまり、逸枝を抑圧する夫として憲三を見立て「小伝 高群逸枝」を草した自身の観点と、憲三をして典雅なわが恩師であり自身の「最後の人」とみなす石牟礼の観点との両極にあって、山下自身、どうしても折り合いをつけることができなかったのではないのでしょうか。そこで、そのことにかかわって、高群逸枝、橋本憲三、橋本静子、石牟礼道子へ向けられた、著者である山下悦子のまなざしがよく現われている箇所を拾い出し、少し長くなりますが、以下に引用してみます。

「憲三さんのような人、見たことないです。純粹で、清潔で、情熱的で、一瞬一瞬が鮮明でした。おっしゃることも、しぐさも。何かをうやむやにしてごまかすというところが感じられない。言いたいことははっきりおっしゃる」。「こういう男の人は出てこないだろうと」「高群逸枝さんの夫が『最後の人』でした」という石牟礼の言葉を読んだとき、石牟礼と橋本のワールドが見えてきたのだ。それは明らかに高群逸枝の世界とは別のものである。

夫と息子のいる石牟礼は三九歳、橋本六九歳の森の家での奇妙な同居生活（六月二九日～十一月二四日）。この間同居生活を導いた橋本の妹橋本静子の真意も筆者には理解し難いものがある……。馬事公苑へ行った時のこと、「先生」とわたくしの表現が「わたくしたち」、「わたくしたち」とかわる場面があったり、肉感的な表現も見え隠れする箇所があったりと、それが何を意味するのかというような意味深な表現も多々ある本が『最後の人』なのである。……

〔憲三から道子は〕眼鏡をプレゼントしてもらい、中村屋のカレーを食べといったような楽しいデートを森の家に籠ってからの高群は経験したことはなかったのではと思うと、なにか割り切れないものを感じる。橋本のために甲斐甲斐しく食事の世話もする石牟礼は高群とは違い、伸びやかな性を発散できるタイプの女性であり、橋本は石牟礼に高群を重ねるというより、三〇歳も年下の石牟礼との同居生活に楽しさを感じていたのではないだろうか。……

高群の死後のこととはいえ、森の家での若い女性との奇妙な同居生活、しかもそれに協力した橋本の妹静子（高群にとっては小姑）という事実に対し、多くの女性はいい感

情をもたないのではないか¹⁵。

「小伝 高群逸枝」の末尾にこのように書く著者は、本文の記述内容においてと同じく、あくまでも憲三を、妻に曲従を強いり、支配しては劣等感に陥らせようとする、理解しがたい異質の人間としてみなしているといえます。あたかも、自分にわからないものは否定し排除しようとするかのような視線です。自分の観点を死守するためかもしれませんが、そうしたまなざしは、周りの橋本静子にも石牟礼道子にも、同じく向けられるのでした。静子の役割、道子の思いへの共感、ここには微塵ありません。

ここまで書いた私は、岡田孝子の「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」と山下悦子の「小伝 高群逸枝」のふたつの論稿に存する共通点を見出します。以下にそれを、短く三点にまとめます。

一点目は、静子の立会いのもと、憲三と道子が「森の家」で過ごしたことに対する理解が、完全に欠如していることです。岡田は、「彼女〔石牟礼〕は何を思い、『最後の人』で伝えようとしているのか」と疑問を発し、山下は、「この間同居生活を導いた橋本の妹橋本静子の真意も筆者には理解し難いものがある」と、静子の行為にも疑問を呈します。これらの疑問は、石牟礼道子研究を十全に行なった末の結論的な問いでしょうか。とりわけ、なぜ道子が「森の家」に向かったのか、その吟味はすんでいるのでしょうか。それとも、ただ一冊の『最後の人 詩人高群逸枝』の字面を追っただけの単なる読後の感想なのでしょうか。両者の文を読む限り、後者のような気がします。私はここに、知識の欠如から生まれるところの、人間存在の軽視ないしは蔑視という、ひとつの危険性を感じ取ります。

二点目は、憲三と道子の「森の家」での同棲生活における、性にかかわる関心のあり方です。岡田は、「全体を流れる不思議な関係の、それもどこか悩ましさを漂う雰囲気は私は感じてしまうのだが、これは考え過ぎだろうか」と書き、山下は、「石牟礼は高群とは違い、伸びやかな性を発散できるタイプの女性であり、橋本は石牟礼に高群を重ねるというより、三〇歳も年下の石牟礼との同居生活に楽しさを感じていたのではないだろうか」と書きます。岡田も山下も、自身の内なる道徳律に照らし合わせると、憲三と道子のふたりの男女の行動が、どうしても許されないようです。これでは、極めて表層的な人間理解に陥りかねません。加えて、憲三と道子の立場からすれば、岡田にせよ山下にせよ、こころをあわせて営む自分たちの私生活に、身勝手にも興味本位に侵入しようとする、迷惑千万なよそ者にしか映らないのではないのでしょうか。つまり、信頼するに足る研究者としての適切な書法が、ここに不在なのです。

三番目の共通点は、さながら女性的視点が表出されていることです。岡田は、「彼女〔石牟礼〕は『その後の著書はすべて『椿の海の記』に至るまで、師が最初の読者、批評家であった』という。逸枝に対してと同じようなことを憲三は道子にしていたことになる」と、いいます。一方の岡田は、「〔憲三から道子は〕眼鏡をプレゼントしてもらい、中村屋のカレーを食べといったような楽しいデートを森の家に籠ってからの高群は経験したことはなかったのではと思うと、なにか割り切れないものを感じる」と、いいます。ひとりの男性がふたりの女性に対して、同じことをしても、あるいは逆に、違ったことをしても、気になるのでしょうか。こうした視点は、男性である私には、女性固有の独自の視点に映ります。それ自体は何も悪いこととは思いませんが、しかし、もしこれが転じて、思慮を欠いた単純な男性

嫌悪につながるまなざしに変質するようなことがあれば、それは問題적であるといわざるを得ません。

しかし、問題なのは、以上の三点だけではないのです。岡田と山下の言説には、さらに重大な問題が含まれているように感じられます。

これまでおかたの女性の女性史研究家が、逸枝の業績を高く評価する一方で、夫である憲三の役割や言動を低く見てきたことは、周知のとおりです。もっともそれは、必ずしも、正確な一次資料に基づくものではありませんでした。いまはそのことは横に置くとして、ところがここへ至って、憲三だけでなく、近くにあって憲三をよく知る妹の静子に対しても、また、憲三を師と仰ぐ道子に対しても、同じく理解不能な人物として排除されようとしているのです。わけても私は、山下の次の言葉に注目します。「高群の死後のこととはいえ、森の家での若い女性〔である石牟礼道子と橋本憲三〕との奇妙な同居生活、しかもそれに協力した橋本の妹静子（高群にとっては小姑）という事実に対し、多くの女性はいい感情をもたないのではないか」。このように山下は、「多くの女性」を味方につけて、自説の正当性を計ろうとするのです。

石牟礼道子は、水俣病に寄り添った作家として高名ですが、憲三との関係という文脈からすれば、その関係を知る人はほとんどおらず、明らかに無名の存在です。私の目には、岡田の文からも山下の文からも、無名の身である静子と道子を、自分の理解が及ばないがゆえに排斥しようとするある種粗暴な力が、いやおうなく映り込みます。言い換えれば、私には、多くの強い女たちが少数の弱い女たちをその力でもってねじ伏せては選別しようとする無言の視線が、ここに強く感じ取られてならないのです。こうして、いまや高群研究において、実証も論証も伴わない、女性による女性分断が、芽生えようとしているのではないのでしょうか。これは、一種の差別行為と受け止めることもできます。私は、正直に言って、この点を危惧する者です。

ここまで述べてきました、「二．女性史と高群逸枝を巡って」と「三．高群逸枝の伝記のなかにも」のなかには、見方によっては、厳しい批判が含まれているかもしれません。したがって、受け入れることができない、見過ごすことができない、そう思う人がいるであろうことが、想像できます。そこで次に、かかる誤解の払拭に供するために、研究者としての私自身の立ち位置について、簡潔に述べさせていただきます。

第三節 偏見と批判を越えて

これまで「歴史」といえば、男性が書く男性についての歴史でした。つまり、この「歴史」には、ほとんど女性は登場しません。書き手の男性のなかに、女性は書くに値しない存在であるという偏った見方が備わっていたのでしょう。そうした「歴史」に代わって、高群逸枝は、「歴史」に隠されていた女性を発掘することに挑戦しました。それが、高群が書く「女性の歴史」なのです。それは、誰もいままでに見ることのなかった光景でした。それゆえにまた、批判もありました。高群は、こう書きます。

巷にゆけばわがころ
千の矢もて刺さる

その矢、心に痛ければ
われはいつもあこがれけり
去りゆかむ去りゆかむと
いずこへか？¹⁶

それでは、千の矢がここに刺さる痛みをこらえてまで、なぜ高群は、書かなければならなかったのでしょうか。高群は、こう書きます。

私は学問が偏見を破る大きな武器であることを知った。……固定観念や既成観念への、火の国女性的なたたかひも、このへんからはじまった¹⁷。

ここに、火の国の女がもつ正義感と義侠心が情動し、詩人としての熱い感性を携えて、学者固有の、冷徹なる知の産出へと向かう、高群の、その瞬間的契機を見るような思いがします。

私が渡邊澄子から批判を受けたのは何ゆえだったのでしょうか。それは、女が書く女の歴史に、男である私が口を出したからではないかと思量します。といいますのも、批判の文言のなかに「時代錯誤ぶりに呆れ哄笑するしかない」という文字が並ぶからです。「時代錯誤」とは、何を意味するのでしょうか。おそらくそれは、一枝の苦しみの原因を夫である憲吉の「女性問題」に求める渡邊にとって、それを否定しようとする私の態度を指しているのでしょう。そしてまた、一枝のセクシュアリティを「真つ当な愛」の発露とみなす渡邊にとって、それについての私の叙述は「遊戯的な愛」のごとくに映り、猥褻に見えてならないのでしょう。換言するならば、私の一連の著述は、一枝の人生に託して「女性新生」に向けて立ち上がろうとする渡邊にしてみれば、それを妨害するものでしかなく、まさしくそれが、「時代錯誤」的行為に映じたのではないかと思われます。したがって、私への批判は、「反動的な時代錯誤の男性を清算」するための至極当然の手続きだったのかもしれませんが。しかし、私が叙述する手法は、実証主義に徹するものでした。「男性清算」と「女性新生」の二分法による論述と実証主義によるそれとは、必ずしも一致するわけではありません。二分法による論述に虚偽があれば、当然ながら激しく対立します。したがってこの対立は、「時代錯誤」から来るものではなく、「事実認定」から来るものでして、ここに、渡邊が書く伝記と私が書く伝記との決定的な違いが存在するのでした。

いうまでもなく、高群の筆の大きさには、はるか遠く届くことはありませんが、それでも、小は小なりの小さきものをもち、たとい偏狭なものであろうとも、そのなかには、高群の心意気を引き継ぐ、火の国男の正義感と義侠心が含まれていることを私は自認します。年齢もいよいよ傾き、高群に倣って「去りゆかむ去りゆかむと」と思いながらも、煩悩に負け諦観に至らず、見苦しくもいま、「私の著述に向けられた批判に関連して（二）」を書いていることが、その証左となります。「千の矢もて刺さる」ことは先刻承知のうえで、たとえ敵が「千万人といえども吾往かん」の孟子の言葉に背を押され、いまここに、私はこの文を草しているのです。

私の研究対象でありますウィリアム・モリスの「最期の言葉は、世界から『迷妄』(mumbo-jumbo)をなくしたい」¹⁸というものでした。私が、実証主義を重んじるのも、まさしく、

ここにありますが。そして、これがまた、ユートピア的な詩作とアナーキズム的な政治信条における、モリスと高群をつなぐ、共通の近代の精神だったのではないかと私は感じているのです。できれば私も、この末席に連なりたいと思います。

第四節 英国の女性伝記作家に学ぶとすれば

モリスが話題に出たところで、視線を英国に移します。それでは、過去の人物を描く伝記とは、どのようなものなのでしょう。まさしく「そもそも論」になりますが、伝記の本質にかかわる幾つかの論点を視野に、ここで、フェミニズムの先進国とされる英国の女性伝記作家たちに学ぼうと思います。どのような知見が手に入るのでしょうか。これより、ウィリアム・モリスの伝記を例にとりながら、少し考えてみたいと思います。

モリスが亡くなったのは、一八九六年です。これを起点として今日まで、モリス研究は進んできました。マイナーな小伝や論評の類は数限りなくありますが、本格的なフル・スケールの伝記は、おおよそ以下のものではないかと思っています。いずれも、その浩瀚さには瞠目すべきものがあり、ことに戦後出版された三番以降のもののレファランスの完璧さには、学術書の神髄を見るような気がします。

- (1) Aymer Vallance, *William Morris: His Art, his Writings and his Public Life*, George Bell and Sons, London, 1897, 462 pp.
- (2) J. W. Mackail, *The Life of William Morris*, volume I and II, Longmans, Green and Co., London, 1899, 375 pp and 364 pp.
- (3) E. P. Thompson, *William Morris: Romantic to Revolutionary*, Lawrence and Wishart, London, 1955, 908 pp.
- (4) Philip Henderson, *William Morris: His Life, Work, and Friends*, Thames and Hudson, London, 1967, 388 pp.
- (5) Jack Lindsay, *William Morris: His Life and Work*, Constable, London, 1975, 432 pp.
- (6) Jan Marsh, *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938*, Pandora Press, London, 1986, 328 pp.
- (7) Gillian Naylor ed., *William Morris by himself: Designs and writings*, Macdonald & Co (Publishers), 1988, 328 pp.
- (8) Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, Faber and Faber, London, 1994, 780 pp.

上記の伝記につきましては、ウェブ上に公開しています私の著作集 9『デザイン史学再構築の現場』の第六部第一編の「伝記書法論（1）——モリスの伝記作家はその妻をどう描いたか」において詳述していますので、ここでは重複を避け、割愛します。ここでの文脈は、ウィリアム・モリスにかかわる英国の女性伝記作家の仕事観です。それに該当するのは、六番から八番までの最後の三つの作品ということになります。そこでまず、これらの著者について紹介します。私はこの三人の女性と面識がありました。ジャン・マーシュさんは、ヴィ

クトリア時代の芸術と女性の生き方に関心を寄せる現役の独立研究者です。独立研究者でデザイン史家でもあったフィオナ・マッカーシーさんは、先年亡くなりました。この間ふたりとも、ウィリアム・モリス協会の会長を務めました。ジリアン・ネイラーさんもすでに没していますが、長く客員教授として王立美術大学とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館で教鞭をとったデザイン史家です。

私は最初に、リストの第六番に挙げていますジャン・マーシュさんの *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938* を取り上げて論じることになります。ウィリアム・モリスの伝記において、はじめてフェミニスト・アプローチを持ち込んだのが、この書物でした。ジェインはモリスの妻で、メイはその夫婦の娘です。以下は、「日本語版への序文」からの引用になります。

なぜ私はジェイン・モリスとメイ・モリスの生涯を書いたのでしょうか。その答えは二つあります。ひとつは、彼女たちの人生が歴史的に見て興味深く、そしてまた、彼女たちが知り合って愛した男性たちの人生と作品だけではなく、彼女たちが生きた時代がどういう時代であったのかを知るうえで、この二人の女性の人生がその手掛かりを与えてくれるからです。いまひとつは、本書がこの一〇年間の英国におけるフェミニズム復興の動きを反映したものであるということです。それ以来、家父長的な文化のもとに忘れ去られ、無視されていた女性たちの人生と仕事が再発見され、再評価されるようになりました¹⁹。

これまでのモリス伝記は、すべて男性伝記作家によって書かれ、そのなかにあっては、妻のジェインも娘のメイもほとんど語られることはありませんでした。ジャン・マーシュさんは、そこにくさびを打ち込みました。彼女は、この本のなかでふたつの作業をしています。ひとつは、画家のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティと恋愛関係にあったジェインについて、これまで多くの男性伝記作家が決して好意を示すことのなかった偏見的記述に対して修正を求めたことです。もうひとつは、画家のモデルとしての、そして刺繍家としてのジェインの隠された業績に積極的に評価を与えたことです。他方で、メイについては、モリス商会の秀でたデザイナーであったことに加えて、モリス著作集の有能な編集者であったことに光をあてて讃美しました。こうした作業をとおして、闇に埋もれていたふたりの女性たちが発掘され、その再評価がなされたのでした。

この作業は、大変示唆に富んでいます。ここから何を学ぶことが可能でしょうか。

これまで男性の伝記作家がウィリアム・モリスという男性の生涯を書くなかで妻である女性の存在を無視したり侮蔑したりしていたことに対して、義憤をもつ女性の伝記作家であるジャン・マーシュさんは、無視され侮蔑されていた妻のジェインに焦点をあてて、その知られざる生涯を書くことによって、その生き方に共感し、歴史の闇から救い出したのでした。

このことをそっくり、完全に反転したかたちで日本に持ち込むとどうなるのでしょうか。これまで女性の小説家や伝記作家たちが高群逸枝という女性の生涯を書くなかで夫である男性の存在を無視したり、侮蔑したりしていたことはないでしょうか。もしそうした理不尽さが残されているのであれば、そのことに義憤をもつ男性の伝記作家が、無視され侮蔑されて

いた夫の橋本憲三本人だけでなく、それによって同じく傷を負ったにちがいない、すでに黄泉の客となっていた妻の高群逸枝はいうに及ばず、身内の姉の橋本藤野と妹の橋本静子、それに加えて、憲三を師と仰ぐ石牟礼道子に焦点をあてて、その知られざる生涯を書くことによって、その生き方に共感し、歴史の闇から彼らを救い出そうとする試みが、この日本にあってもよいのではないのでしょうか。存在を無視されていたジェイン・モリスが歴史のなかから発掘されたように、同じ状況にあった橋本憲三とその周辺の女性たちが同じく発掘されるならば、それは、それなりの意義をもつにちがいません。いま私は、そうしたことに思いを巡らせているのです。

次に、リストの第七番に挙げていますジリアン・ネイラーさんの *William Morris by himself: Designs and writings* を取り上げて論じます。

これまで日本にあっては、富本一枝を主題とした伝記が上梓されました。それは、高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』（ドメス出版、一九八五年）と渡邊澄子『青鞥の女・尾竹紅吉伝』（不二出版、二〇〇一年）の二著です。あえていえば、このふたつの伝記には、幾分共通した難点が見受けられます。それは、一次資料に基づく実証的記述からしばしば離れ、書き手の私的な思いと判断が一方的に数多く盛り込まれているがために、主役となるべき一枝が随所で背景に退くとともに、加えて一枝の実像が必ずしも正確に描き出されていないという結果を招いている点です。

過去に実在した人物の生涯を描くということは、どういうことでしょうか。それは、あくまでも事実に肉薄した学問的作物でなければなりません。逆のいい方をすれば、決して虚偽を構成してはならないのです。そのために、関連する人物および事象にかかわって、限りなくエヴィデンス（証拠となる一次資料）を渉猟し、十全にそれを援用して描写することが、伝記作家に厳しく求められることになります。

それでは伝記は、どのような書法によって叙述されなければならないのでしょうか。単にエヴィデンスを並べるだけであれば、無色透明の年表になり、無味乾燥の年代記になってしまいます。単にそれだけであれば、実在した人物が生き生きとした画像でもって現像されることはありません。かといって、実在人物に余分なものまで恣意的にまとわせ、加飾してしまえば、どうなるのでしょうか。この場合は、書き手にとって都合のいい主人公像が生み出されることはあっても、一人ひとり関心の異なる読み手にとっては、思考の自由が奪われ、脚色された主人公像が無理に押し付けられてしまいかねない危険性が残されることになります。そうした危惧される事態を避けるためには、どうしたらいいのでしょうか。

ジリアン・ネイラーさんの *William Morris by himself: Designs and writings* が、それへのひとつの解答となっているのです。書題を訳せば、『本人が語るウィリアム・モリス——デザインと著作』とでもなるのでしょうか。実際、内容は、モリスのデザインと著作（書簡類を含む）とが多数援用されながら、その生涯がどのようなものであったのかが概観できるように工夫されています。伝記書法上の新鮮なひとつのモデルが、ここに提示されているのです。

その先例となるものが、リストの第一番に挙げていますエイマ・ヴァランスの *William Morris: His Art, his Writings and his Public Life* です。遺族に配慮して、いっさいの個人生活の記述は省かれ、ほぼ全文、モリスの書き残した言葉をつなぐかたちで構成されています。私は、これらふたつの伝記の記述手法に関心をもってきました。といいますのも、伝記

文学の形式が確立しているといわれている英国とは異なり、これまで日本で出版された伝記にあっては、一般的にいつて、歴史記述とも現代批評ともいいがたい、しかも虚実がない交ぜとなった言説が著者自身によって進んで開陳される傾向がしばしば見受けられてきたからです。しかし、上記の二著は、著者自身が多くを語るのではなく、モリス本人に自身の生涯を語らせようとしています。換言すれば、明らかに、客観性と真実性を可能な限り担保するために、著者による多弁と能弁が抑制され、本人が語る事実と現実とが優先されているのです。私が、ジリアン・ネイラーさんのこの書物から学んだのは、この点にありました。

最後に、リストの第八番に挙げていますフィオナ・マッカーシーさんの *William Morris: A Life for Our Time* を取り上げて論じてみます。ここから何を学び取ることができるのでしょうか。

「序文」のなかで、このように語る著者の一節がありますので、引用しておきます。

モリスに関する最近の書物は、専門家としての立場からモリスについて見解を述べる傾向にありました。私たちはすでに、マルクス主義からのモリス像、ユング心理学からのモリス像、フロイト派精神分析からのモリス像をもっています。そしていまや、モリスはグリーン主義者から賞讃されています。理論が積み重ねられてゆくことによって、モリスの「全体的な」パーソナリティは見えにくくなっています。私は、このプロセスを逆転させて、彼を解き放し、そのうえで彼を記述したいと思いますし、もし可能であれば、モリスの最初の伝記作家である J・W・マッケイルが一八九九年に見事な二巻本として出版した『ウィリアム・モリスの生涯』以来、誰も試みていない方法でもってモリス神秘の一端を見定めてみたいと希望しています²⁰。

このことが意味することは何でしょうか。伝記は、その主人公が芸術家であれば、芸術史の一部と考えることもできますし、主人公が女性であれば、女性史の一部と考えることも可能です。しかし、最も小さくくりでいえば、社会史の一端を担う、重要な歴史研究としてみなすことができるでしょう。周知のとおり、とりわけ一九七〇年代以降の英国では、諸学の刷新が求められてきました。「新しい美術史」や「新しい博物館学」が唱えられ、新たな「デザイン史学」や「文化学（カルチュラル・スタディーズ）」も誕生しました。この刷新のうねりは、社会史にも押し寄せます。次の引用は、一九九三年に刊行された『社会史を再考する』のなかからの一節です。

イギリスの社会史研究は、およそこの四半世紀のあいだに歴史学のひとつの大きな分野として確立してきたものである。……イギリスの歴史学で用いられる場合「社会史」という用語は、異なるも関係しあう次の三つのアプローチを包含している。第一は、人びとの歴史。第二は、社会科学から導き出された概念を歴史的に適用することのなかに見出される、私が「社会＝歴史のパラダイム」と呼ぶところのもの。そして第三が、「全体の歴史」ないしは「社会の歴史」と呼ばれている、全体化もしくは統合化の歴史への志向²¹。

ここからもわかりますように、このとき「社会史」に求められようとしたのは、「普通の

人びとの歴史」であり、「全体化あるいは統合化された歴史」であったといえます。フィオナ・マッカーシーさんが「序文」に書いている、「理論が積み重ねられてゆくことによって、モリスの『全体的な』パーソナリティは見えにくくなっています。私は、このプロセスを逆転させて、彼を解き放し、そのうえで彼を記述したいと思います」という文言は、明らかに、当時「社会史」に求められていた刷新内容と軌を一にします。本文を読むと、ジャン・マーシュさんが書くまでほとんど無名であった妻と娘の記述の多さが目を引きます。そして、出生、家庭環境、教育、勉学、恋愛、結婚、性生活、家事、家計管理、妊娠、出産、育児、イデオロギー、政治参加、仕事、労働、友人、趣味、介護、死、葬送などの、普通の人びとにとっての生涯にわたる項目が、そのときの社会的、文化的、政治的文脈に沿って、全体的に統合されて書かれてあり、そこにも私の知的関心は大きな刺激を受けたのでした。そこで私は、伝記というものは、個人礼賛に資するためにその人の仕事と人生にかかわって狭く描かれるよりも、その人を含む家族全体の諸関係を基礎に、統合された生涯が描かれることの方が、産出される情報の学問的価値は高いのではないかと考えるようになりました。実際、著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」の「跋」のなかで、私は、このようなことを書いています。長くなりますが、引用させてください。

それでは最後に、再びフェミニスト・アプローチについて少し振り返ってみたいと思います。たとえばイギリスにおいて、戦後、高等教育や成人教育が一気に拡大するなか、そこで学ぶ多くの進歩的な学生たちは、これまでに描かれていた「歴史」には、自分たちが属する階層の人間を含む弱者や少数者、あるいは被抑圧者や非特権者たちの姿が存在しないことに気づきはじめました。彼らが指摘するように、たとえば芸術史を例にとりますと、伝統的にその学問が扱ってきたのは、限られた例外を除けば、ほとんどが「偉大なる男性作家」であり、そこには、「普通の人びと」の芸術的行為も「女性芸術家」の作品も完全に抜け落ちてしまっていたのでした。彼らはそこに着目して不満と批判の声を上げ、既存の「歴史」の成立過程と記述内容に異議を申し立てました。

続くフェミニスト・アプローチの第二段階に入ると、両性の不公平さへの感情的なほとばしりは、冷静にも学問的作業の新たな道を開拓し、「普通の人びと」の芸術的行為や「女性作家」の作品が再発掘され、「歴史」のなかに再配置されてゆくようになりました。一九八六年のマーシュさんの著作（訳書題『ウィリアム・モリスの妻と娘』）も、そうした文化的、学問的状況のなかから誕生したといえます。そうした状況がさらに進展し、この分野の学問がすでに次の新たな段階に入っているかどうかは勉強不足でよくわかりませんが、私の個人的な実感としては、第二段階の「男性史」と「女性史」には、自ずと限界があるように感じてきました。といいますのも、「男性史」にあっては、ある種特別の調味料として「女性」を登場させ、「女性史」にあっては、多くの場合いまだに攻撃の材料として「男性」を登場させることが、ステレオタイプ化しているように感じられたからです。そこから脱却するため、いまや私は、ふたつの性に同等の敬意を表し、男と女をひとつの組みとして対象化し、その歴史を記述することの必要性を感じています。それは、名称的には、夫婦史、家族史、あるいは男女関係史ということになるのかもしれませんが。たとえば夫は家庭にあって、妻や子ども、あるいは使用人に対

してどのように接したのでしょうか。一方妻は、どのような言動でもって周りの人間に
対して振る舞ったのでしょうか。男女間にあって相互に働くさまざまな力の存在を見
定め、その諸力にかかわる変移や実質について、思想的に、社会的に、そして文化的に
実証分析することが重要なのではないのでしょうか。それぞれの時代の諸次元的制約を
受けた過去の行動空間の構造と、そのなかで男女が織りなす力学とが、順次再発見され
てゆくことになれば、それを手掛かりにしながら、仕事や家庭における真の両性の平等
を今後再構築するうえで必要とされる新たな視点や原理のようなものが萌芽するの
ではないかと、近年私は、このように考えるようになりました²²。

こうした観点に立って書かれたものが、以下の著作でした。

著作集 3 『富本憲吉と一枝の近代の家族（上）』

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476416>

著作集 4 『富本憲吉と一枝の近代の家族（下）』

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476417>

著作集 6 『ウィリアム・モリスの家族史』

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476419>

私が、この三つの巻を書くことができたのも、ジャン・マーシュさんの *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938* とフィオナ・マッカーシーさんの *William Morris: A Life for Our Time* のおかげであり、感謝の気持ちをいまも持ち続けています。つまり、このふたりの伝記作家の著作から私が得たものは、今後伝記は、社会史（あるいは社会文化史）の主要な一部として、ひとつの複合組織である男女ないしは家族に焦点をあてて描かれる、純正の歴史書となるにちがいないという新しい視座だったのです。

フィオナ・マッカーシーさんからは、さらに次のことを学びました。彼女は、モリスは「フェミニストであったにちがいない」²³と書いています。ここで使われている世界的用語法としての「フェミニスト」とは、男性、女性、性的少数者を問わずいずれもの性が、いっさいの偏見も差別も受けることなく、その多様な生き方と諸権利において平等かつ対等でなければならぬことを主張する人すべてを指します。したがって、「フェミニスト」は、女性だけに限定されて使用される用語ではないのです。まして「フェミニズム＝男性批判」という図式も、ここではもはや成り立ちません。モリスは「フェミニストであったにちがいない」というフィオナ・マッカーシーさんの言葉に接して以来、私は、富本一枝の夫の富本憲吉も、高群逸枝の夫の橋本憲三も、「フェミニストであったにちがいない」と直観するようになりました。しかし、富本一枝の伝記作家も、高群逸枝の伝記作家も、それを認めることなく、「フェミニズム＝男性批判」という極めて矮小化された視点から、実に短絡的にそれぞれの夫を嫌悪していたのです。私の義憤はそこにありました。かつて「フェミニズム＝男性批判」という観念がこの狭い日本にあって一時期支配したことがあったかもしれませんが、しかしいまや、フェミニズムを巡る今日の世界の潮流からすれば、それはとくに、過去の残滓となっているのです。あえていえば私も、ウィリアム・モリス、富本憲吉、橋本憲三の列に加わりたと思っています。

加えてもうひとつフィオナ・マッカーシーさんの書物から学んだことがありますので、付言します。

一般的にいつて、性の問題は、日本の女性伝記作家は避けて通る傾向にあるように思われますが、英国にあっては、男性であろうと女性であろうと伝記作家は、この問題を、もちろん一次資料に基づくことが前提になるわけですが、積極的に記述しようとしします。性の問題は、人間の生活において切っても切り離せない極めて重要なファクターであることを認めているからでしょう。もっとも、遺族への配慮から没後五〇年くらいは触れないことが暗黙の了解事項になっているようです。他方、保管されていた故人の日記や手紙を博物館や図書館が公開するのも、だいたいそれくらい立ってからのことではないかと思われます。したがってこの時期、画期的な新たな伝記が上梓されることが多くあります。モリス伝記の場合は、リストの第四番に挙げていますフィリップ・ヘンダーソンの *William Morris: His Life, Work, and Friends* が、それに該当します。

それでは、性の問題にかかわって、因みにフィオナ・マッカーシーさんはどう扱っているのかを、*William Morris: A Life for Our Time* の「索引」に求めてみようと思います。そこには、「性的指向、モリスの」を一次項目として、それを構成する二次項目が、一三個並んでいます。以下に、それらを列挙します。数字は、該当頁を表わします。ここから、性に関する問題が、いかに広範囲に、かつ詳細に触れられているかがわかります。

sexual orientation, Morris's:

animalism 545-6

bashfulness, Englishman's 68, 102, 126, 135, 188-90, 221, 305, 451

bondage 128

celibacy 65-9

comrade sisters 50-1, 88, 129, 159, 163-4, 250, 547-8, 588, 636

courtly love 65, 102, 109, 134, 250

Guenevere factor, the 97, 101, 205-6

homosexuality 68, 105

prostitution 127-8

Pygmalionism 137-8

sadism 128-9, 191, 205-6

voyeurism 14, 205-6, 637

warrior women 160, 636-7^{2 4}

ロセッティに続くジェインにとっての二番目の愛人であったウィルフリッド・スコーイン・ブランドが遺した文書類には、自分たちの性にかかわる行為が詳細に描き出されていますが、他方、夫のモリスも妻のジェインも、控えめを徳とするヴィクトリア時代の流儀に従い、自分たちの性生活についてはほとんど語っておらず、事実上闇のなかにあります。そこで伝記作家は、明らかになっているほかの人の性生活に目を向け、そこから「類推」という手法をとることがしばしばあります。英国特有の一種の暴露趣味といえ、そうともいえませんが、たとえば、同時代の美術評論家のジョン・ラスキンは、「性的不能者」であった

ため、妻は裁判に訴え、離婚を勝ち取り、他の男性に走ります。その事実を踏まえて、モリスの伝記作家は、モリス夫妻にはふたりの娘が誕生していることからして、少なくともモリスは「性的不能者」ではなかったと「類推」するのです。

そこで、英国にみられる上の事例を踏まえて、唐突ではありますが、こうした「類推」の手法を、日本の富本一枝にあてはめてみます。一枝は、自分の特異なセクシュアリティについて、「死ぬる時に遺言状の中には書くかしれませんが」²⁵と語っています。これは、没後であれば公開してもいいということを含意します。また、見る限り、決して一枝は、存命中にいっさい自己のセクシュアリティを口にせず、人に気づかれることなく墓場まで持って行こうとした閉鎖的な人間などではなく、どちらかといえば、存命中にその多くを語っており、開放的な精神の持ち主だったといえます。一方、すでに死後五〇年以上の歳月が経過しました。そこで、過去の歴史的人物としての一枝の実際的なセクシュアリティに対して、「類推」の手法を使って、目を向けてもいいのではないかと思料します。

さらに別の見方をすれば、自身のセクシュアリティについて伝記作家や研究者が事実（一次資料）に基づいて今後言及することを、他方で一枝は、待ち望んでいたのではないかと思料します。その理由は、隠すのではなく明らかにすることによって、広く多くの人に、自分たちのような立場にある人間の苦しみを理解してもらいたいという思いがあったのではないかと愚考するからです。事実、一枝ははっきりと、自分のセクシュアリティを、誰に遠慮することもなく、公的な雑誌のなかで、以下のように書いているのです。これを読むと、いつかは自身の性の実態が検討されることを一枝自身願っていたのではないかという推量さえできます。いま一度、引用します。これは、『婦人之友』に掲載された一枝の「東京に住む」のなかに認められる、自己のセクシュアリティについて言及している部分です。

この久しい間の争闘、理性と感情この二つのものはいまだにその闘を中止しようとはしない。そうしてそのどちらも組しきることが出来ない人間のあはれな煩悶を冷酷にも見下してゐる。平氣である感情に行ききれないのは自分が自分に似合はず道德的なものにひかれてゐるからで、といて理性を捨切つて感情に走ることをゆるさないのは根本でまだ×に對して憎惡や反感と結びついてゐるために違ひない。……本當にこの心の底には憎惡しかないのか、それでは偽だ。あんまり苦しい²⁶。

ここに、セクシュアリティの解放を巡る理性と感情の激しい対立の一端をかいま見ることができます。自己の特異なセクシュアリティに向けられた憎しみと、憎みきれない苦しみとが、混然一体となって一枝の心身を襲うのです。一枝は、掲載される雑誌をとおして、自分の心身について広く社会に訴え、理解を求めようとしているように、私には読めます。

とはいえ、一生涯一枝は、自分のセクシュアリティの特異性について、「男女」や「おめ」といった当時の用語を使って正式に周囲にカミング・アウトすることはありませんでした。しかしながら、「私の著述に向けられたある批判に関連して（その一）」において詳述していますように、彼女が書き残している幾多の性自認や性的指向から判断しますと、ほぼ間違いなく FTM のトランスジェンダー男性であったと思われます。そこで参考になるのが、杉山文野の言説です。『ダブルハピネス』の著者の杉山は、自身が FTM のトランスジェンダー男性であることをこの本のなかで広くカミング・アウトし、自己の性的行動について

も率直に告白しています。紅吉（一枝）が、「栄山」のような紅灯のちまたの遊び女^めと、あるいは、青鞥社時代前後の当時、愛の対象としていた月岡花子や大川茂子のような女性たちと、どのような性行為を体験していたのかは、資料上、具体的には何も正確にわかりません。しかし、以下の杉山の自己体験が、「類推」するためのひとつの示唆的素材を提供します。少し長くなりますが、引用します。私は、社会文化史（とりわけデザイン史）を専門とする単なる駆け出しの学徒でしかありませんが、杉山文野さんの勇氣に敬服するとともに、ここから感謝をし、ここにその言葉を使わせていただきます。

肌と肌が触れ合う気持ちよさ、好きな人と心がつながる安心感、あんなに楽しくて、気持ちいいものは他にない。しかし、セックスをすればするほど、自分の体が男ではないという現実を痛いほどつきつけられる。体が女だという、いまだに信じられない信じたくない現実を実感する。ところが、彼女を求める僕の気持ち、性欲は間違いなく男性的なものであり、自分の内側の男性的な部分を再確認するのだ。（中略）

最初は服を脱ぐことすらできず、とてもセックスなんて呼べないようなものだった。たとえ彼女であっても……いや、彼女だからこそ、自分の「女」である部分、こんな恥ずかしい体をさらすことなんてできなかったのだ。自分は服を着たまま、一方的に相手を脱がせ、一方的に攻めるだけ。彼女がイッてしまえばそこで終わり。相手に体を触られるのは苦痛だった。彼女さえ満足なら自分も満足だと思っていたし、そう自分に言い聞かせていた。けれど、もちろん満足できるはずがない。（中略）

大学に入る頃になってやっと服が脱げるようになった。最初はお酒の力を借りたり、電気が消えていたりしなければダメだったけど。触られるのにも、少しずつ耐えられるようになった。

何が一番苦痛なのか？

気色悪い自分のオッパイの存在もそうだが、やはり、一番辛いのはペニスがないということだろう。彼女たちの多くは「ペニスに頼って男の勝手なセックスなんかより全然いい」と言ってくれた。しかしそうは言われても、やはりペニスがなければ満足できないのではないかなと思ってしまう。立たなくなってしまうという男性の機能障害は、男としてだけでなく人間としての自信も失ってしまうほどショックなことだと聞くが、もともとペニスのない僕に自信なんてものはかけられない。自分の男としてのアイデンティティなんてズタズタだし、存在自体がコンプレックスなのである。

気持ちが高まってくると、あそこが勃起するような感覚になる。今まで一度も体験したことがないはずの「男体」のイメージが鮮明になってくる。しかし、そこにはペニスではなく、彼女と同じものが存在する。触れられるのにも慣れてきたとはいえ、やはりいまだに体の気持ちよさよりも心の気持ち悪さが先行して、気持ちよくなれない。ところがそんな時、彼女以上に濡れていたりすることがある。そうすると、もうただただ自分の体に呆れるしかない。いったいなんなんだこの体は……どんなシステムでできているんだ？自分が「人間」として不良品であり、その存在が間違っているとしか思えない。

自分は欠陥商品なのか？

でなければこの矛盾や苦しみの意味がわからない。セックスをしている時ほど自分

が嫌いになることはない。いろんな「壁」を乗り越えようと頑張っている自分がバカらしく思えてきて、もうすべてをあきらめたほうがよいと思ってしまう。生きる意味を失う。死にたい……。セックスをするたびに衝動にかられる。

僕のセックスは、気持ちが高まるだけ高まっても、終わりが来ない。高まった気持ちの行き場がない。相手に求めれば求めるほど手に入らず、すればするほど欲求不満になる。不満を満たそうとすればさらに不満はつのも、そんなことの繰り返し。それでも僕は手に入るはずのない「何か」を求め、またセックスをする²⁷。

以上が、杉山文野の自らの性体験に関する言説です。紅吉（一枝）もまた、これに近い体験をしていたものと「類推」されます。全く同じではなかったかもしれませんが、すべてを否定することもできません。そして、「何が一番苦痛なのか？」「自分は欠陥商品なのか？」「死にたい……」と杉山が発する、それと同じような悲痛を紅吉（一枝）も感じていたのではないかと「類推」します。これまでの富本一枝の女性伝記作家は、この部分を「猥褻」とみなして切り捨ててきました。しかし、この部分が明らかにならない限り、一枝の悲しみも苦しみも、ひいては一枝の生涯も、その実像を得ることはできず、すべてが虚像と化してしまうのです。さらに問題なのは、そうした行為は、意識的であろうと無意識的であろうと、トランスジェンダー人間の存在を歴史から切り捨ててしまう結果を招くことになることです。むしろ歴史家である伝記作家は、弱者や少数者の声を積極的に集め、強者や多数者による抑圧から守らなければなりません。いま私は、虐げられた人びとの存在をしっかりと歴史的に確保することが、小さい自身の大きな務めであると考えています。

原則論になりますが、伝記作家が、実証や論証から離れて、作文や創作の形式によって虚像を作成すれば、主人公の尊厳を傷つけることになるだけでなく、真実を求める読み手さえも裏切ることになります。歴史家は、常に事実に対して謙虚に頭を垂れる責務があります。事実を、自分の好みや都合で身勝手に変質させてはならないのです。それは、歴史自身を冒涇する行為であると、私はかたく信じます。

実証主義を重んじる私にとっては、一部にみられる、日本のこうした風潮がどうしても看過できず、二回に分けて、この「私の著述に向けられたある批判に関連して」を書いてきました。いよいよ最後の「あとがき」で、ここまでの考察を踏まえての今後の自身の仕事を展覧したいと思います。

おわりに——富本一枝と高群逸枝の新たな伝記の執筆に向けて

私の手もとにある記録によりますと、二〇二三（令和五）年の年が明けたころから、著作集17『ふたつの性——富本一枝伝』の草稿を書き始めており、第三章第一節を書き終わったところで中断しています。当時構想していた「目次」は、次のようなものでした。

まえがき——新しい伝記書法の試み

第一章 生い立ちと学業（富山・東京・大阪・東京・大阪）

一八九三（明治二六）年～一九一二（明治四五）年

第一節 富山での出生と幼児期

- 第二節 離郷後の東京での学童期
- 第三節 転居後の大阪での学童期
- 第四節 夕陽丘高等女学校時代
- 第五節 女子美術学校入退学
- 第六節 『青鞥』の創刊を知る
- 第七節 一時帰阪と新境地の幕開け

第二章 青鞥社を舞台に（大阪・東京）

一九一二（明治四五）年～一九一三（大正二）年

- 第一節 ロダンの作品鑑賞とらいてう宅訪問
- 第二節 大阪での『青鞥』の手伝いと《陶器》の受賞
- 第三節 大阪から東京への転居
- 第四節 青鞥社同人のある夜のミーティング
- 第五節 「メイゾン鴻の巣」で「五色の酒」を飲む
- 第六節 吉原「大文字楼」にて花魁と遊ぶ
- 第七節 青鞥社内外からの非難の嵐
- 第八節 ある日のらいてうと紅吉の愛の再燃
- 第九節 ふたりの「同性の恋」の末路
- 第一〇節 社内での人的交流
- 第一一節 社外での紅吉の姿
- 第一二節 青鞥社退社の意向を表明する
- 第一三節 特異な自己のセクシュアリティをほのめかす
- 第一四節 『青鞥』の表紙絵「アダムとイヴ」の製作
- 第一五節 第一三回巽画会絵画展覧会への出品作《枇杷の實》
- 第一六節 妹の福美への佐藤春夫の恋心
- 第一七節 青鞥社からの最終的な退場

第三章 青鞥社退社から富本憲吉との結婚まで（東京）

一九一三（大正二）年～一九一五（大正四）年

- 第一節 長野、新潟、秋田への傷心の旅
- 第二節 文展へ《豎琴》を出品するも落選
- 第三節 『番紅花』の創刊と富本憲吉による図案の提供
- 第四節 東京、奈良、大阪でのふたりの逢瀬
- 第五節 塩沢温泉へ憲吉が一枝を誘い出す
- 第六節 「富本憲吉氏圖案事務所」の開設
- 第七節 両家の結婚準備
- 第八節 結婚式と新婚旅行
- 第九節 一枝のセクシュアリティについての暴露記事
- 第一〇節 東京から安堵村への転居

第四章 夫の生地での新生活とその崩壊（奈良県安堵村）

一九一五（大正四）年～一九二六（大正一五）年

第五章 新天地での生活再興とその破綻（東京府千歳村）

一九二六（大正一五）年～一九四六（昭和二一）年

第六章 夫の出奔と晩年の独り暮らし（東京都祖師谷）

一九四六（昭和二一）年～一九六六（昭和四一）年

あとがき

語りの出典と注記

索引

執筆するに当たって、私はこの巻を、伝記記述に関しての新しい実験の場となるよう構想していました。一般的に伝記というのは、伝記作家が、対象となる人物の生涯を、一次資料を駆使しながら、「自分の言葉」でもって叙述することによって成立するものですが、ここでは伝記作家は後景に退き、「本人と仲間たちの語り」でもって富本一枝という対象の人間模様を綴ってゆくことを目指しました。具体的にいえば、私は、富本一枝の生涯について叙述する本文のすべてを、本人と夫たる富本憲吉の言説はいうに及ばず、一枝の周辺に存する平塚らいてうや丸岡秀子のような、多くの友人たちによって書き残されている発話内容や、さらには新聞や雑誌等に散見されるところの関連記事、そうした一枝に群がる一連の揺るぎない証言によって構成したいと考えたのです。

その理由は単純です。できるだけ、いや完全に、虚偽記述をなくしたいという私個人の願望によるものでした。つまり、別の言葉に置き換えるならば、そこには、一枝にかかわる既存の伝記や小説にみられるような、語り手自身の恣意的な多弁性を、可能な限り排除するとともに、記述にかかわるいっさいの曇りのない客観性をしっかりと担保することによって、主人公の全き実像に迫ってみたいという、強い個人的な願いが横たわっていたのです。こうした一種の義憤のような思いのもと、伝記執筆上の新しい手法が醸成されてゆきました。それは、私の担う役割を、著者としてではなく編者としてのそれに限定することでした。つまりところそれは、私が関与するのは、一枝の生涯の分節化に伴い考案されなければならない章題、節題、そして各項目題についての名称設定に限られることを意味します。こうして、関係する幾多の証言を渉猟し、章や節にグループ分けをするなかから、富本一枝というひとりの女性の一生にかかわるストーリーとプロットが生み出されていったのでした。

しかしながら、あくまでも「本人と仲間たちの語り」だけで構成される本文ですから、語りの内容にかかわってその背景や行間をも含めて、必ずしも十全に読み手に伝わるとは限りません。その場合、あちこちで未消化の雑駁さだけが残されてしまう危険性が予想されます。そこで、巻末に「語りの出典と注記」を設けました。ここにおいて、今後の再検証に必要とされる、それぞれの資料の出典を明記するとともに、読者のみなさまの思考や判断の手助けになるにちがいないと思われる範囲に限って補足的に注釈を加えることにしました。

こうしてスタートした執筆ですが、三月の終わりに筆が止まっています。そのころ私の関心が、あるきっかけから同郷人である高群逸枝と蔵原惟人に移ったためでした。はじめは短編のエッセイにまとめ、早く切り上げて進行中の富本一枝の伝記にすぐにももどるつもりでしたが、書き出すとなかなか終わりが見えず、とうとう年を越して、二〇二四（令和六）年の四月に擱筆するに至りました。何と一年を要す長丁場になったのでした。これが、いまウェブサイト上で公開しようとしている、著作集 14 『外輪山春雷秋月』を構成する「火の国の女たち——高群逸枝、中村汀女、石牟礼道子が織りなす青鞥の女たちとの友愛」なの

です。

しかし、この巻を書き上げた私には、濁流が流れていました。高群逸枝の死後、最晩年を生きる夫の橋本憲三に向けられた数々の非難や罵声が、消え去ることなく、残滓となって胸の内に沈殿していたのです。いまだ存命中であるにもかかわらず、瀬戸内晴美は「日月ふたり——高群逸枝・橋本憲三——」において、一方、戸田房子は「献身」において、当時「伝記小説」とか「モデル小説」とか呼ばれていた虚構空間を使って、いわれなき汚名を憲三に浴びせ、苦しめていたのです。さらには憲三没後にあっても、女性史研究家であるもろさわようこは、死者の霊を傷つけるような「外見差別（ルッキズム）」の表現でもって憲三を罵倒しました。

もろさわようこの「高群逸枝」以降も、高群逸枝と橋本憲三へ向かう周囲の関心が変わりはありませんでした。栗原弘は、自著の『高群逸枝の婚姻女性史像の研究』のなかで、高群史学改竄説を唱え、改竄は、そのみならず、日記や随筆などの高群が残した全著作に及ぶことを明言する一方で、その妻の栗原葉子も、『伴侶 高群逸枝を愛した男』を著し、そのなかで、憲三をその共犯者に仕立て上げたのです。

その間、存命中にあつては橋本憲三本人が、その死以降は、妹の橋本静子が、そしてまた、憲三との後半生を誓っていた石牟礼道子が、反論の文を書きました。しかし、おおかた無視され、静子に続いて道子が他界すると、女性史研究家の岡田孝子が「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」を、そして、同じく女性史家の山下悦子が「小伝 高群逸枝」を書き、生前の憲三の言動のみならず、憲三にとっての静子と道子の存在のあり様についても、自らの理解が及ばぬがゆえに、冷たい視線を送ったのです。

このことを知った私は、同郷人として単に通るすがっただけの、女性史とは異なる別領域に住む一学徒にすぎないにもかかわらず、その無慈悲と無見識を見て見ぬふりができず、一著を著わし、彼らの霊を慰めることを決意しました。以下に示すのが、これから取りかかろうとする、著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』の目次構成です。

第一部 緒言

まえがき

第一章 本稿に登場する虐げられた弱き人びとについて

第二章 本稿における「三つの巴」の構図について

第三章 本稿の目的と記述の方法について

第二部 「三つの巴」小伝

第一章 誕生——西に不知火、東に大阿蘇、「火の国」に出生

第二章 流浪——高群逸枝と橋本憲三との出会いから出京まで

第三章 幻視——「日月の上に座す」天才詩人高群逸枝の出現

第四章 闘争——『婦人戦線』に立つアナーキスト夫婦の陰陽

第五章 脱皮——「双頭の蛇」となり「森の家」で学問事始め

第六章 再生——戦後の高群女性史学の展開と学会等での評価

第七章 支援——憲三姉妹からの援助と「望郷子守唄」の建碑

第八章 最期——高群逸枝の臨終と一部の後援者たちとの軋轢

第九章 収穫——橋本憲三編集になる『高群逸枝全集』の刊行

第一〇章	寂滅——石牟礼道子の「森の家」滞在と生まれ変わり
第十一章	追慕——原郷の水俣で妻を顕彰する夫橋本憲三の情愛
第十二章	受難——高群逸枝巡礼者たちの水俣来訪と憲三の悲痛
第十三章	服喪——橋本憲三の死去と遺る橋本静子と石牟礼道子
第十四章	無常——高群逸枝と橋本憲三へのいわれなき罵倒数々
第十五章	道行——いざ妣たちが迎える天草灘海底の「沖宮」へ
第三部	結言
	まえがき
第一章	「日月ふたり」における瀬戸内晴美の言説についての私見
第二章	高群逸枝の臨終に際しての市川房枝の言動についての私見
第三章	栗原弘の「高群逸枝論」と栗原葉子の「橋本憲三論」についての私見
第四章	橋本憲三の『高群逸枝全集』の編集手法についての私見
第五章	石牟礼道子の「沖宮」における四郎とあやのモデルについての私見
第六章	伝記執筆の要諦についての私見
注	
図版	
図版出典一覧	
索引	

ご覧のとおり、よく見かける伝記の構造とは異なっています。といいますのも、高群逸枝や橋本憲三についてこれまでに書かれた小説や小論、あるいは小伝が意図するものとは大きく違い、端的に言えば、それらの先行資料と対立する立場に立って書かれることになるからです。私の身は、瀬戸内晴美、戸田房子、もろさわようこ、栗原弘、栗原葉子、岡田孝子、山下悦子といった人びとの側にはありません。さらには、高群逸枝の死去の際に夫橋本憲三と確執が生じた相手方である市川房枝、浜田糸衛、高良真木らの女性たちの側にも、加えて、真偽は別にして、夫延島英一と高群逸枝のあいだに性的関係があったことを瀬戸内晴美に告げた妻の松本正枝（本名は延島治）の側にもありません。私の立ち位置は、そのような人たちから名誉を棄損され、雑言を並べられ、存在を無視されたりした、高群逸枝、橋本憲三、石牟礼道子の側にあります。加えて私の身は、逸枝の学問と道子の文学とその接点をなす憲三の役割、この三つの巴を献身的に支えた、橋本憲三の姉の橋本藤野と妹の橋本静子の側に立っています。つまり私は、虐げた強者の側でなく、虐げられた弱者の立場に立ち、彼らを歴史のなかから救い出そうとしているのです。その結果、つまりは、これから私が書こうとする伝記が、高群逸枝研究の主流と思しき流れの延長線上にないがために、幾つかの工夫が必要となり、それを受けて私の目次は、従来一般的な伝記とは異なる、見慣れぬ独自の構造となっているのです。

もろさわようこの「高群逸枝」を読んだ橋本静子は、それに反論する手紙のなかで、こう書きました。

文筆とは無縁で一行の活字もありません。性質は父母からの血が流れており、理不尽に対しては正直に腹を立てますから、おとなしい方だとは申されないかも知れません。

生来、お茶目だと言われています。地位、名声、職業、風采などでは人を見ず、品性や志、それと人柄のあたたかさ、詩情などの情感にひかれます。

もろさわ様は著者紹介によれば、女性史・婦人問題研究家とみえており、社会に裨益するお志の人だと推察いたしました²⁸。

これが、静子の人となりをもっとよく表わすものであると思われまし、私の胸を打ちます。藤野の文にも、同じく私の胸に迫るものがあります。次の引用は、逸枝の最期の入院に際して出された手紙からの一節です。藤野は、事実上「無文字世界」の人でした。

マイニチカミホトケニ、ネンジテイマス。／ヒヨウノシンパイワ、イリマセン。イクライツテモ、ミナマタカラオクリマス。／ビヨウキニ、マケズ、シツカリキバリナサイ、クンゾ〔憲三〕モアナタモ、ミナマタデオセワシマスカラ、アンシンシテ、ヨウジヨウヲシテクダサイ／イツエサマ／フジノ／テガフルエテカゝレマセン²⁹。

それでは、石牟礼道子は、高群逸枝と橋本憲三の夫婦をどう見ていたのでしょうか。道子の文に、「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」があります。一九七八（昭和五三）年の暮れ、道子は、沖縄の久高島に行き、その地に残るイザイホーの名で知られる祭儀を見学しました。イザイホーは、三〇歳を超えた島の既婚女性が神女となるために行なわれる、一二年に一度開催される一種の通過儀礼で、そのなかのひとつの儀式が、根人と呼ばれる男性主人が、ナンチュと呼ばれる巫女の額と両頬に朱印をつける神事です。道子の論考の題に用いられた「朱をつける人」は、そこに由来します。そして道子は、この文の最後をこう結ぶのでした。

深い感動の中にいて、「花さし遊び^{アシ}」の中の朱つけの儀式、素朴な木の臼に腰かけているナンチュと、その額にいまも朱をつけるようとしている根人の姿に、著者には高群逸枝とその夫憲三の姿が重なって見え、涙ぐまれてならなかった。

逸枝がいう憲三のエゴイズムは、男性本来の理知のもとの姿をそのように云って見たまでのことであつたろう。その理知とは究極なんであろうか。久高島の祭儀に見るように、上古の男たちは、懐胎し、産むものにむきあつたとき、自己とはことなる性の神秘さ奥深さに畏怖をもち、神だと把握した。そのような把握力のつよさに対して女たちもまた、男を神にして崇めずにはおれなかった。そのような互いの直感と認識力が現代という理知あるいは叡智ではあるまいか。

憲三はその妻を、神と呼んではばからなかった³⁰。

道子のこの一節に導かれ、私は、逸枝と憲三の真の本質的關係を知ったような思いにかられました。そして同時に、道子もまた、憲三によって朱をつけてもらった女性だったにちがいないという思いが胸に湧きたちました。というのも道子は、このような表現でもって、「森の家」において憲三との誓いをなしていたからです。以下は、道子が「森の家」に滞在したおりに書いていた日記からの引用です。

今夜更に高群夫妻とそして自分とに、後半生について誓った。それは橋本静子氏に対する手紙の形で（つまり、静子氏を立会人として）あらわした。午前三時これを書き上げる³¹。

そして、このとき静子に宛てて書かれた道子の手紙には、次のような文字が並んでいました。

うつし世に私を産み落とした母はおりまして、天来の孤児を自覚しております私には実体であり認識である母、母たち、妣たちに遭うことが絶対に必要でした。……

つまり私は自分の精神の系譜の族母、その天性至高さの故に永遠の無垢へと完成されて進化の原理をみごもって復活する女性を逸枝先生の中に見きわめ……そのなつかしさ、親しさ、慕わしさに明け暮れているのです。そして私は静子様のおもかげに本能的に継承され、雄々しいあらわれ方をしている逸枝先生のおもかげを見ます³²。

この言説から判断するとすれば、〈沖宮〉に住むいのちたちの大妣君は、まさしく逸枝その人であり、周りでそれを支える妣たちが、藤野であり静子であるということになります。いうまでもなく、天草灘の海底に沈む〈沖宮〉は、道子にとっての「精神の系譜の族母」の住み家、つまりは神殿であり墓所なのです。その家へ手をとって案内する天草四郎（憲三）が、あや（道子）にとっての「最後の人」であり、「朱をつける人」であったことは、もはや言を俟たないでしょう。新作能「沖宮」が、道子の手によって書かれるのは、『最後の人 詩人高群逸枝』が上梓された同じ年の二〇一二（平成二四）年で、道子八五歳の、死去する五年前のことでした。

静子の「もろさわよう子様へ」が掲載された『高群逸枝雑誌』終刊号（第三二号）の「編集室メモ」に、静子は、こう書いています。

あたたかい陽ざしの此の頃を、兄夫婦の墓家と下段の私どもの墓家を毎日訪ねています。レリーフによりかかりますと、途端に私は八才の少女になり「イツエねえちゃん。どうしよう？」とたずねます。「静子さん、もういいのよ。あなたもここへいらっしゃい」と声が返って来たように思いました。人は皆、死ぬことに決まっているのに。「お手紙」を書いたことにところがいたみます³³。

私はここに、静子の無念さと、その苦しみを手紙にする自分の所在のない移ろう気持ちとを見ます。私も、逸枝、憲三、道子、藤野、静子の無念さを、わかるといえば不遜になりますが、彼らが遺した証言（一次資料）に全幅の信頼を置いて、自分なりに描いてみたいと、いま思っています。しかし、静子同様、「人は皆、死ぬことに決まっているのに」——そう躊躇する気持ちがないわけではありません。しかし、道子の次の言葉が私の背を叩きます。

〈ゆき女じょ瓔よう珞らく〉という章を、苦海浄土第二部でいま想定しています。

わたくしの死者たちは遺言を書けませんから、死者たちにかわって、わたくしはそれを書くはめになるのです。

してみると、すでにわたくしは死者たちの側にいることになる。
いついつ、そのようなことになったのか。
どうもわたくしは心中をとげたい^{3 4}。

逸枝がいう「千の矢もて刺さる」ことを覚悟のうえで、それでも私も道子に倣い、「わたくしの死者たちは遺言を書けませんから、死者たちにかわって、わたくしはそれを書く」ことにしました。どうやら私は、「死者たちの側にいる」ようです。そして、私も意を決して「心中をとげたい」のです。

著作集 18 『三つの巴——高群逸枝・橋本憲三・石牟礼道子』において、「三つの巴」である彼らに成り代わって、どう生き抜いたのか、どう苦しんだのか、つまり、彼らにとっての「遺言」に相当する、その生涯に流れる愛と孤独と苦悩とについての執筆が終わりましたら、やっともとにもどり、今度は、著作集 17 『ふたつの性——富本一枝伝』のなかで、一枝が生涯にわたって苦しんだ「ふたつの性」に向き合いたいと思います。一枝さん、お待ちしています。私はあなたが、最初期の日本の婦人運動の最前線に立った人であることをかたく信じています。私にとっての渾身の力を振り絞って文字にするつもりです。

（二〇二四年九月）

注

- （1）高井陽・折井美那子『薊の花——富本一枝小伝』ドメス出版、1985 年、168 頁。
- （2）高群逸枝「婦人戦線に立つ」『婦人戦線』第 1 巻第 1 号、婦人戦線社、1930 年、8 頁。
- （3）同『婦人戦線』第 1 巻第 1 号、4 頁。
- （4）橋本静子「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、3-4 頁。
- （5）もろさわようこ「高群逸枝」、円地文子監修『文芸復興の才女たち』（近代日本の女性史 第二巻）集英社、1980 年、204-205 頁。
- （6）同「高群逸枝」、244 頁。
- （7）石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、453-454 頁。
- （8）岡田孝子「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」『高群逸枝 1894-1964 女性史の開拓者のコスモロジー』（別冊『環』26）、藤原書店、2022 年、200 頁。
- （9）同「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」、201-202 頁。
- （10）同「『最後の人』橋本憲三と『森の家』」、203 頁。
- （11）石牟礼道子「『最後の人』覚え書（二）——橋本憲三氏の死——」『暗河』暗河の会（編集兼発行人／石牟礼道子・松浦豊敏・渡辺京二）、第 15 号、1977 年春季号、63-64 頁。
- （12）石牟礼道子「朱をつける人」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、91 頁。
- （13）同「朱をつける人」、93 頁。
- （14）山下悦子「小伝 高群逸枝」『高群逸枝 1894-1964 女性史の開拓者のコスモロジー』（別冊『環』26）、藤原書店、2022 年、51 頁。

- (15) 同「小伝 高群逸枝」、51-53 頁。
- (16) 高群逸枝著・橋本憲三編『高群逸枝全集』第 10 巻「火の国の女の日記」、理論社、1965 年、2 頁。
- (17) 同『高群逸枝全集』第 10 巻「火の国の女の日記」、62 頁。
- (18) Jan Marsh, *Jane and May Morris: A Biographical Story 1839-1938*, Pandora Press, London, 1986, p. 232. [マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』中山修一・小野康男・吉村健一訳、晶文社、1993 年、313 頁を参照]
- (19) マーシュ『ウィリアム・モリスの妻と娘』中山修一・小野康男・吉村健一訳、晶文社、1993 年、14 頁。
- (20) Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, Faber and Faber, London, 1994, p. viii.
- (21) Adrian Wilson ed., *Rethinking Social History: English Society 1570-1920 and Its Interpretation*, Manchester University Press, Manchester and New York, 1993, p. 1 and p. 7.
- (22) 中山修一著作集 11 『研究余録——富本一枝の人間像』所収の第一編「富本一枝という生き方——性的少数者としての悲痛を宿す」、2023 年 4 月 11 日（刊行日）、100-101 頁。
- この拙論は、以下の神戸大学学術成果リポジトリにおいて閲覧が可能です。
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100492136>
- (23) Fiona MacCarthy, *William Morris: A Life for Our Time*, Faber and Faber, London, 1994, p. vii.
- (24) Ibid., p. 775.
- (25) 「東京観（三二） 新らしがる女（三）」『東京日日新聞』、1912 年 10 月 27 日、日曜日。
- (26) 富本一枝「東京に住む」『婦人之友』第 21 巻、1927 年 1 月号、110 頁。
- (27) 杉山文野『ダブルハピネス』講談社、2006 年、178-181 頁。
- (28) 前掲「もろさわよう子様へ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、3-4 頁。
- (29) 橋本憲三・堀場清子『わが高群逸枝』（下）朝日新聞社、1981 年、350 頁。
- (30) 石牟礼道子「朱をつける人——森の家と橋本憲三——」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、99 頁。
- (31) 石牟礼道子『最後の人 詩人高群逸枝』藤原書店、2012 年、247 頁。
- (32) 同『最後の人 詩人高群逸枝』、248-249 頁。
- (33) 橋本静子「編集室メモ」『高群逸枝雑誌』終刊号（第 32 号）、責任者・橋本静子、発行所・高群逸枝雑誌編集室、1980 年 12 月 25 日、100 頁。
- (34) 『石牟礼道子全集・不知火』第四巻／椿の海の記ほか、藤原書店、2004 年、524 頁。